

末日聖徒イエス・キリスト教会

# 聖徒の道

1985

2/3<sup>月号</sup>



# 聖徒の道

1985年2/3月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。

大管長会：スパンサー・W・キンボール、マリオン・G・ロムニー、ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒定員会：エズラ・タフト・ベンソン、ハワード・W・ハンター、トーマス・S・モンソン、ボイド・K・パッカー、マービン・J・アシュトン、ブルース・R・マッコンキー、L・トム・ベリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス

顧問：カーロス・E・エイシー、レックス・D・ピネガー、ジョージ・P・リー、ジェームズ・M・パラモア

編集長：カーロス・E・エイシー

教会機関誌ディレクター：ウェイン・B・リン

編集主幹：ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：デビッド・ミッチェル

子供の頁編集：ロイス・リチャードソン

レイアウト/デザイン：メアリー・A・ホドソン、C・キンボール・ポット

聖徒の道 1985年2/3月号 第29巻第2号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社

定価 年間予約/海外子約2,200円(送料共)

半年子約1,100円(送料共)

普通号250円,大会号(1,7月号)350円

International Magazines PBMA0540JA

Printed in Tokyo, Japan.

Copyright ©1985 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

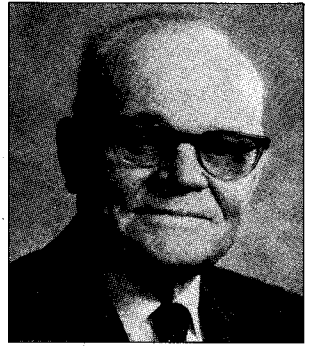
●定期購読は、「聖徒の道予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 渋谷ブックセンター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注：お届け先の変更がありましたら、早急に資材管理部配送センターにご連絡ください。●「聖徒の道」についてのお問い合わせ……〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター/☎0427-96-2820



## ●—もくじ

神の子供	マリオン・G・ロムニー	1
モルモン経探求：第1部	ジョン・L・ソレンソン	6
初等協会：善をもたらずカ	ドゥワン・J・ヤング	19
「神が私たちに下さったのは、臆する霊ではなく…」	ゴードン・B・ヒンクレー	21
ラッセル・M・ネルソン長老：神の律法を生かして	マービン・K・ガードナー	25
瓶の中のイーグル(鷲)	クレイグ・J・スミス	30
墜落	ステイーブン・R・アフleck	32
あの場所は今(カメラによる教会史跡巡り)		35
私を訪ねてくれる隣人たち	ノニー・ギルバート	41
ローカルページ		
子供のページ		
さかなつり	グレン・ダインズ	1
ハンター	アルマ・J・エイイツ	2
どうしたらいいの	ジュリー・H・ジェンセン	9
おおきくなると…	パット・グレアム	10
おもちゃばこ		12

# 神の子供



第一副管長  
マリオン・G・ロムニー

このメッセージは1976年2月28日に行なわれた説教である。

「わたしは神の子」という歌の歌詞について考えていると、数多くのことが思い浮かんできます。

神の子です わたしやあなた  
 いろんなお恵み感謝します  
 神の子です わたしやあなた  
 み言葉正しくわかるように  
 神の子です わたしやあなた  
 みこころ行ないまた天に住む  
 わたしを助けて導いて  
 いつかみもとへ行けるように  
 (「子供の歌」B-76)

ナオミ・W・ランドルが初めにこのすばらしい曲のために歌詞を書いたときは、「みこころ行ない」の箇所は、「みこころ学び」となっていました。スペンサー・W・キンボール大管長がそれを読んで、「学び」を「行ない」に変えるよう提案されたのです。

「わたしは神の子」というこの歌のテーマは、決して目新しいものではありません。パウロはマルスの丘の上のあの有名な説教の中で、アテネの人々に、私たちは「神の子孫なのである」(使徒17:29)と宣言しました。近代においては、予言者ジョセフ・スミスが教義と聖約76章の中で、「これに住む者たちも皆神より生れたる息子と娘」(24節)であると書いています。

私たちは「わたしは神の子」という簡潔で平明な真理をよく口にしますが、はたしてそのとき、頭の中で一体何を考えているのでしょうか。この言葉が、神は触知できる肉体の父であるという意味を持

つものでないことは、私たちも理解しています。肉体は地上の両親から受けたものです。

では、私たちが歌い、語る「わたしは神の子」という言葉の真の意味は、何なのでしょう。この疑問に答えるには、主がジョセフ・スミスに、人間は二元的な存在であると啓示されたことを、最初に理解しておかなければなりません。二元的な存在とは、ふたつの要素から成るものという意味です。人間はそれぞれ、ふたつの要素またはふたつの体、すなわち、霊の体と骨肉の体から成っているのです。「人間は霊と体とより成る」(教義と聖約88:15)と言われたのは、ほかならぬ主ご自身です。私たちの霊は、肉の体とは異なり、神が「もうけて」くださったものです。

モルモン経には、肉体をお受けになる前のある霊のお方の形と性質に関する記述があります。イテル書のその箇所に書かれた物語と真理は、聖典の中でも、非常に強く私の心に迫ってくるものです。

ジェレドの兄弟とその一行が、主によってバベルの塔から導かれたことは、皆さんご存じのことと思います。彼らが海のある所まで来ると、主はそれを渡るようにと命じられました。そこで彼らは8隻の船を造りました。やがて航海の準備も整いました。ところが、船にはすき間がなく、そのままでは、中は暗闇の世界です。

そこで、ジェレドの兄弟は、光をくださるようにと主に祈り求めました。彼の信仰は、それまで地上に生を受けていたいかなる人よりも強いものでした。そして、実際に主から、「われに何を備えられ

んことを願うや」(イテル2:25)との答えがあったのです。

ジェレドの兄弟は行って、岩から16個の石を溶かし出しました。それから彼は山に登り、その石に触れて、光を出す石にしたまえと主に祈り求めたのです。私はこの人が16個の石を持って山を登っていく姿を思い浮かべると、いつも心に熱いものを感じます。その後、この16個の石は船の中に置かれました。

ジェレドの兄弟の信仰は非常に強いものでした。そして「主がその手をのばして一つ一つ石にその指をさわらしたもうと、ジェレドの兄弟の目から幕が取り去られて、ジェレドの兄弟は主の指を見た。その指は人間の指に似て血肉の指のようであったから、ジェレドの兄弟は恐怖に打たれて主の前に倒れた。

主はジェレドの兄弟が地に倒れたのを見て「立て、何故倒れたるか」と仰せになった。

そこでジェレドの兄弟は、主が血肉の指を持っておりたもうとは知らなかったから、主の指を見て、主が私を打ちたまいはせぬかと思っただからであると答えた。

すると主は『汝の信仰厚き故に、われはわれがその後血肉を受くる事実を汝に見せたるなり。これまで汝の如き大なる信仰をこめてわが前に来りし者なし。汝も、もしこれほど熱き信仰を持たざりせば、わが指を見ること能わざりしならん。汝はわが指のほかに見たるものありや』と仰せになった。

そこでジェレドの兄弟は『主よ、指のほかには何も見ざりき』と答え、さらに勇気を出して、『御姿をわれに見せたまえ』と願った。



「私たちがこの地上に来たのには、  
ひとつの目的がある。  
それは、試練を経験し、  
試しを受けることである」

すると主は『汝はわれがこれより告ぐ  
ことを信ずるや』と言いたもうたから、  
ジェレドの兄弟は『主よ、汝は真実の満  
ちたる神なる故、偽りが言えず真実を宣  
うことを知る』と答えた。

かれがこう言うと、主は現われてその  
姿をジェレドの兄弟の目に示して言いた  
もうた『汝はこれらのことを知る故に、  
もはや始祖の墮落より贖われ、帰されて  
わが目のあたりあたりにあり。故にわれは汝に  
現われてわが体を汝に示す。

見よ、われはわが民を贖うために創世  
の前より備えられたる者なり。』

これは、キリストがベツレヘムでマリ  
ヤから生まれる約2,200年前の出来事  
です。しかし主はその山で、ジェレドの兄  
弟の前に立ち、こう宣言されました。「わ  
れはイエス・キリストなり。……わが名  
を信ずる一切の者はわれによりて永遠に  
光を受け、またわが息子わが娘となる。

われはこれまで、わが造りし人間に現  
われてわが体を示したることなし。』

この箇所箇所に、霊がどのような形をして  
いるかについての説明があります。「汝ら  
がわが形にかたどりて造られたることを  
今汝は見ずや。」

主はこの偉大な予言者に、ご自身の霊、  
すなわち、肉体をお受けになる前のイエ  
ス・キリストの霊は、ジェレドの兄弟の  
肉体と同様の形であったことを示そうと  
されたのです。「汝らがわが形にかたど  
りて造られたることを今汝は見ずや。最初  
に一切の人々はわが形にかたどりて造ら  
れたり。

見よ、今汝が見るこの体はわが霊体な  
り。われはわが霊の体にかたどりて人を  
造れり。われは今わが霊のまま汝に現わ  
ると同じ形の肉体を具えてわが民にも  
また現われん。」(イテル3：6-16)

この記述はひとつの偉大な真理を教え  
てくれます。神の霊の子供といわれる私  
たちがどのような存在かという点につい  
ての明確な知識です。私たちは、地上に

来る以前から自由意志を持ち、実在し、  
名前を持った、それぞれに別個の存在で  
した。

アブラハムも、自分が受けた啓示を記  
録したもので、神の子供としての私  
たちの存在について、いくつかすばらし  
いことを教えてくれています。

「さて、主はわれアブラハムに、この  
世に先だちて組織しされたる英智たちを見  
せたまいたりき。而して、これらすべて  
のものの中には、高貴にして偉大なるも  
の多くありたり。

神、これらの霊を善しと見たまい、こ  
れらの霊の中に立ちて言いたまえり、こ  
れらの者をわが統治者となさん。神、霊  
なりしこれらの者の中に立ちて、これを  
善しと見たまいればなり。」

皆さんも私も、そして、この地上に生  
を受けるように定められていた、父なる  
神のすべての霊の子供が、その場にいま  
した。

「これらの者の中に、神の如き者一人  
立ちて共に在りし者たちに言いけるは、  
われら降り行かん。かしこに空間あれば  
なり。」彼らは、今のこの地球があった空  
間を見ました。そのとき、主イエスがこ  
う言われました。「われら降り行かん。か  
しこに空間あればなり。而してこれらの  
材料をとりて、これらの者(神の霊の子  
供)の住まうべき地を造らん。

而して、これによりて彼らを試し、何  
にてもあれ、主なる彼らの神の命じたま  
わんすべてのことを彼らが為すや否やを  
見ん。

而して、最初の位くら(当時の霊の状態)  
を保つ者は更に付け加えられ、最初の位  
を保たざる者は、最初の位を保つ者と  
同じ王国にて栄を得ることなからん。而  
して、第二の位くら(現在私たちがいる、この  
死すべき状態の期間)を保つ者は、と  
こしえに栄光をその頭に付け加えられん。」  
(アブラハム3：22-26)

これらの聖句から、私たちがこの地上

に来たのには、ひとつの目的があること  
がわかります。その目的とは、試練を経  
験し、主から命じられたことを行なうか  
どうか試しを受けることです。

人間としてこの世に生まれてくるに際  
し、神がもうけてくださった私たちの霊  
は、両親から授けられる肉体をまどっ  
ています。死を迎えると、この霊と肉体は  
分離します。どのような人の場合でも、  
死は必ずこの霊と肉体の分離をもたら  
します。肉体はやがてちり、すなわち地  
上の物質に戻り、霊は霊界へと戻って  
いきます。

復活のときには、霊は再び肉体をまど  
ってひとつの結合体となり、決して分  
離しなくなります。「死にたる者より復活  
することは、霊と体を贖うことなり。」  
(教義と聖約88：16)

これらの聖句から、私たち神の子供に  
は3段階の状態があることがわかりま  
す。アブラハムはその段階を「位」と呼  
んでいます。私たちは、前世で神の霊の  
子として過ごし、今この地上においては、  
死すべき存在として生活しています。そ  
して将来は、復活を通して再び身と霊  
が結合し、不死不滅の状態になるのです。

皆さんは、アブラハムの記録の中に、  
主が霊界において次のような約束をされ  
たことが書かれているのを覚えておられ  
ると思います。「最初の位を保つ者は更  
に付け加えられ……第二の位を保つ者は、  
とこしえに栄光をその頭に付け加えられ  
ん。」(アブラハム3：26)

この死すべき世にいて、肉体を「更に  
付け加えられ」ていることを考えると、  
私たちが第一の位を保ったことは明らか  
です。また福音は、来世すなわち第三の  
位において、「とこしえに栄光をその頭に  
付け加えられん」ためには、この第二の  
位をどのように保たなければならないか  
も教えています。

この教会に属する人々を除いて、人間  
とは何かという天に関するすばらしい永

「復活のときには、  
霊は再び肉体をまどつて、  
ひとつの結合体となり、  
決して分離しなくなる」

遠の真理を理解している人はいません。幸いにも私たちは、人間は何者であり、どこから来て、なぜ地上にいるか、また、どこへ行くかを知っています。そして、非常に重大なことです。私たちは、自分が行きたいと思うところへ行くには何をしなければならぬかも知らされているのです。地上での行ないの大切さをこの世で知らされている私たちは、非常に幸運です。

また、うれしいことには、私たちは自分たちが将来どうなるかについて、数多くの真理を授けられています。主は初め、福音をアダムに啓示し、後の各神権時代にも福音を与えられました。

アダムが、自分に啓示された福音を子供たちに教えた後に、サタンは彼らの中に来て、「アダムとイヴの言を信するなかれ」と言いました。そして、彼らは（多くの点について）「アダムとイヴの言を信」じなくなりました。(モーセ5:13)

アダムから洪水までの間の時代に、エノクは私たちが今持っている知識を得て、それを受け入れる人々が住むひとつの市を作りました。この人々の生活が非常に清いものであったため、エノクの市は地上から取り去られました。しかしその一方で、墮落した人々は邪悪な行ない、戦争、流血に明け暮っていたのです。

ノアも福音を知っていました。またエノクからノアの時代までのほかの予言者たちも、人々に福音を教えていました。しかし、主が悪を一掃し、後に地上に生まれてくる霊たちに新たな出発の機会を与えるために洪水を起こすまで、人々は福音を拒み続けました。

私たちはアブラハムとそれ以降の正しい人々についても知らされていますし、さらにイエス・キリストの導きと教義の業についても教えられています。イエス・キリストが時の絶頂にこの地上に誕生し、福音を説かれたこと、また偉大な犠牲を捧げ、悔い改めと正しい生活を条

件に、罪の清めの道を開き、復活をもたらしてくださったことを学んでいます。ジェレドの民やニーファイ人についても教えられています。

私たちが生きているのは最後の神権時代です。やがて救い主が再臨し、地上を罪悪から清めるときが来ます。

私たちは、3段階の栄光があることを知っています。復活のとき、人はそれぞれ日、月、星の3種の栄光のいずれかを受け、不死不滅の体になってよみがえります。

この復活について、主は予言者ジョセフ・スミスに、次のように言われました。

「さてわれ誠に汝らに告ぐ。そもそも汝らのために為されたる罪の贖い（キリストの贖い）によりて、死せる者よりの復活は来るなり。

また死にたる者より復活することは、霊と体とを贖うことなり。

されば、この霊と体との贖いはすべてものを生かす者（イエス・キリスト）によりて来り、地の貧しき者と柔和なる者は地をつぐべしとその生かす者の胸の中に定められたり。

これを以て、日の栄を受くる備えを為さんために、地はあらゆる不義より必ず聖められざるべからず。」

これが地球の行く末です。地球は人間が死すべき世を過ごす場として造られただけでなく、日の栄にふさわしい人々の永遠の住まいとして造られたものなのです。

「およそ、地はその創られたる目的を満したる後、父なる神の御前に在ると言う栄光の冠を受くべければなり。

これ、日の栄の王国に属く人々は限りなくいつまでも地を所有せんがためにしてまた地はこの意志を以てそれが造られ、且つ創造せられ、またこの意志を以て人は聖めらるるがためなり。

またわが汝らに与えたる律法、すなわちキリストの律法によりて聖められざる

者たちは別の王国、すなわち月の栄の王国または星の栄の王国をつがざるべからず。

そは、日の栄の王国の律法（イエス・キリストの福音）に従う能わざる者は日の栄に堪うる能わざればなり。

また、月の栄の王国の律法に従う能わざる者は月の栄に堪うる能わず。

また、星の栄の王国の律法に従う能わざる者は星の栄に堪うる能わず。この故に、この者は栄の国に適わざる者なり。これを以てこの者は栄の国にあらざる一種の国に堪えざるべからず。」(教義と聖約88:14-24)

私たち末日聖徒は、天父、御子、そしてあらゆる時代の義人が住む日の栄の王国に昇栄し、永遠の生命を受けるには、イエス・キリストの福音が説く原則と儀式に従わなければならないことを知っています。そのためには、正直であり、清く、正しくなければなりません。また、思いにおいても、行ないにおいても、汚れを一切遠ざけなければいけません。

私たちは、日々の生活において天父の助けが得られるように、熱心に祈らなければなりません。

人間は神の子供であるという事実に対して本当に心を向けるなら、私たちは神の子と呼ばれるにふさわしい生活をしなければなりません。また、天父が第二の位を守る人のために備えておられるすべての祝福を受け継ぎたいと望む者としても、それにふさわしい生活をしなければなりません。

神の子であるということがどういう意味を持つのか、また、人間にはどのような可能性があるのか、その偉大な祝福を得るには地上でどのような生活をしなければならないのかという点について、皆さんがさらに理解を深めていかれるように望むものです。

私たちは、人間の本質、また神の子であるということがはたしてどのような意

味を持つのかを学んでいます。それにふさわしい生活をしようではありませんか。

### ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに、以下の点を話し合うとよいでしょう。

1. 肉体は地上の両親から受けたものであり、霊は天父から授けられたものである。「人間は霊と体とより成る。」(教義と聖約88:15)
2. 私たちは前世においても、自由意志と名前を持ち、それぞれに別個の存在であった。
3. 私たちが地上に来たのは、試練を経験し、主から命じられたことを行なうかどうか試しを受けるためである。
4. 死によって肉体と霊は分離する。肉体はちり、すなわち地上の物質に戻り、霊は霊界へと戻っていく。
5. 復活のとき、霊は再び肉体をまとうて、結合体となり、決して分離しなくなる。
6. 私たちは神の子と呼ばれるにふさわしい生活をしなければならない。また、天父が備えておられるすべての祝福を受け継ぎたいと望む者としても、それにふさわしい生活をしなければならない。

### 話し合いを進めるために

1. 人間は神の子供であるということについて、あなたの感じていることや経験したことを述べる。
2. このメッセージの中に、家庭で読んだり話し合ったりするのによい聖句や言葉はないだろうか。
3. 話し合いをより充実したものとするために、訪問する前に家長と話し合っておくとよい。今回のテーマに関して定員会指導者や監督から家長に当てられたメッセージはないだろうか。





# モルモン経探求：第1部

古代アメリカとその聖典に関する理解の変遷

ジョン・L・ソレスキン





### はじめに

ここ数十年にわたり、アメリカ大陸の考古学、地理学、文化、言語などが専門的に研究された結果、モルモン経を読み、またそれを信ずる人にとっては非常に興味のある情報や資料が、きわめて数多く出現するようになった。こうした資料には、初期のモルモン経研究者にとってはその存在すら推測できなかつたようなものもある。モルモン経に関する特定研究は、その質、量ともに広範多岐にわたるため、現在ではひとりの人間が、その学問分野の全領域を網羅して研究を続けることはほとんど不可能に近い。

実際ここ50年の間に、前の世代の人々がコロンブス以前のアメリカ文明について考えていたことの多くは、すでに時代遅れとなっている。古代文明を研究する学問は、きわめて重要な変節を経験しているのである。今世紀の最初の数十年間、科学というものは永久不変の真理を探求し、また発見するものと依然として考えられていた。しかし今日では科学者も哲学者も、学問の性質上、絶えずその理論と資料の再解釈を迫られていることを認めている。(注1) カール・ポPPERの言う「永久に流動的」(注2) という科学観

が、広く受け入れられるようになったのである。それゆえ現代では、初期のアメリカ文化について、ほんの半世紀前と比較して、おそらく1千倍もの情報や資料が存在してはいるが、当代一流の学者ならヨーロッパ人侵入以前の新世界で起きたことについて独断的な説明を加えることはきわめて少ないのである。

末日聖徒がモルモン経について抱いてきた考え方にも、一部変化が起きてきている。とは言っても、ニーファイからモロナイに至る予言者たちの教えた救いの原則を信じる信仰に変化があったというわけではない。かりに変化があったとしても、信仰が深まったというだけのことである。しかしモルモン経を古代の文献として考えた場合、慎重な研究者たちは、この文献にはこれまで想像されていたよりもはるかに多くの内容が含まれているという事実気づいている。M・ウェルス・ジェイクマン、ヒュー・ニブレー、そしてシドニー・B・スピリーらをはじめとして増加を続ける末日聖徒の研究陣は、1940年代後半にはそうした細かい研究の一部を明らかにし始めた。(注3)新しい可能性を探ろうとするこうした変遷の一例としては、ジョン・W・ウェルチの発見があげられよう。ほんの15年前のことであるが、ウェルチはカイアズマス(交差配列)と呼ばれる近東地方の文学形式がモルモン経の中にも隠されていることを発見した。1830年の初版発行以来およそ140年の間、人々はそれを知らずに読んでいたのである。(注4)近年においても、数々の研究者たちの手によって、モルモン経の中からこれまで想像もできなかったような事実や形式、言外の意味などの発見が相次いでいる。モルモン経の初版当初はみな見過ごしにされていたものである。

最近の研究によって古代の文献としてのモルモン経の理解の仕方はかなり変化してきているが、それがどう変化しているのかといったことを話題にしている研究資料に触れることのできる末日聖徒は、それほど多くはない。またモルモン経の真正さを裏づけてくれるような、かなり驚くべき新発見がなされているが、その事実を知っている末日聖徒もあまりいない。こうした新発見は、科学の進んだ

手法を駆使してもたらされているものである。今回の記事およびこれに続くふたつの記事が書かれた目的は、過去にかかわる新しい理論と発見の光に照らして、幾人かの末日聖徒の学者たちがモルモン経をどう見ているのか、その変遷の例を明確な形で2、3あげてみることにある。この一連の記事は、公式な教会の教えを表明することを意図して書かれたものではない。むしろ私自身の行なった調査研究に基づいて、一考に値するものとして後述の新しい情報を提供するのである。

## 第1部

モルモン経考古学というのは、長い間末日聖徒の最も好む関心事となっている。「モルモン経」あるいは「考古学」といった言葉を含む遠大な講義のあることが発表されると、いつも決まってある程度少なからぬ人数の聴衆が集まる。しかし残念なのは、ものを書く人や講義する人の中にそうした主題についてきちんとし

する規則に従って作業を進めなければならないのである。

まず最初にどうしてもしなければならないことがある。それはモルモン経の性格を決定することと、モルモン経のどの部分が学問上の発見と適切に比較対照しうるかを確定することである。次に、考古学者やほかの学者たちが実際に知っていることをはっきりさせ、またそうした知識に限界をもたらしている事情は何なのかを確認する必要がある。いずれを論述するにせよ、いかなるささいな結論であろうとも、それを学問のルールに従って引き出すに当たっては、入念な検討が加えられなければならない。

一部の末日聖徒の文筆家や講演者がこれまで抱えてきた問題として、モルモン経の原典自体と、これまで行なわれてきたその解釈とを混同することがあげられる。ひとつ例をあげてみよう。よく聞かれる表現に、モルモン経は「アメリカイ

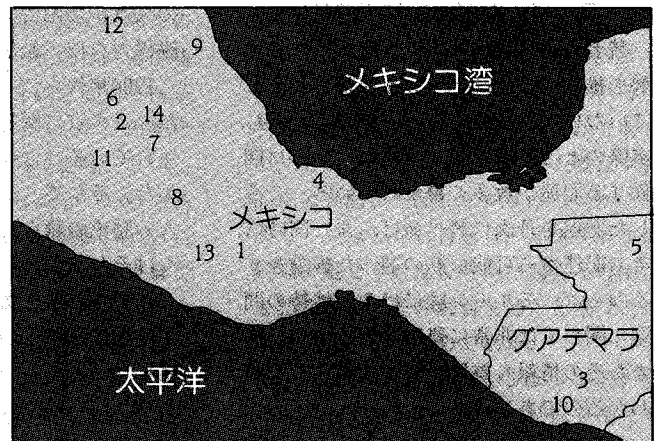


復元した武器。石のハンマーとやり。中央グアテマラから出土したもので、時代は不詳。

た情報を持たずに行なってきた人もいることである。また、折に触れてこうしたことを話題にしている教会に対する批判家についても同様なことが言える。

本稿は、恣意によって書かれたものでもなければ、信仰や証の産物でもない。むしろ学問上の業績を披露するものである。モルモン経と、考古学上およびその関連分野の発見とを比較検討することは、純粋に学問的かつ知的な活動である。それゆえ末日聖徒であるなしを問わず、そうした学問分野で研究を始めようとする者はだれであれ、その分野全般に通用

メソアメリカの一部を示す略地図。テワンテペク湾付近のメキシコの南部とグアテマラ西部を含む。この地域については、記録する制度のあった場所は地理的にはつきりと確認されており、それぞれの年代は、その場所における最も古い事例を表わしている。(1)メキシコ、オアハカのモンテ・アルバーン—紀元前800年頃、(2)メキシコのトラティルコー—紀元前500年以前、(3)グアテマラのカミナルフュー(第10石碑)—紀元前150年頃、(4)メキシコの中央ベラクルス(トレス・サポテス)—紀元前30年頃、(5)グアテマラとメキシコの低地マヤー—紀元300年以降、(6)メキシコのテオティワカン—紀元300年頃、(7)メキシコ中央部のボルジア古写本—紀元650年頃、(8)メキシコのヌイン(ミシュテカ・バヤ)—紀元600年頃、(9)メキシコ、ベラクルスのタイン—紀元600年、(10)グアテマラのコツマルワパー—紀元600年以降、(11)メキシコ、モレロスのショチカルコー—紀元800年頃、(12)メキシコ、オアハカ・グエレロのミシュテカ—紀元700年以降、(13)メキシコ中央部のトルテカ—紀元950年頃、(14)メキシコのアステカ—紀元1450年以降



ンディアン」であるという言葉がある。この表現には、調査不十分な仮説が数多く含まれている。例えば、聖典を通常の意味で過去のある国家なり領地なりの主要な出来事を体系的かつ年代史的に網羅した歴史書だとしている点、アメリカインディアンを単独の集団とする点、聖典中の歴史的かつ文化的な研究材料が書かれている、英文のモルモン経にしておよそ100ページあまりの部分に、おそらくは西半球の全歴史が書かれているものとする点などである。このような調査不十分な仮説をもとに論が進められれば、批判する側も同じようにして反応を示すことになる。古代の原典そのものを批判するのではなく、原典について立てた仮説の方を批判するようになるのである。

その結果、モルモン経にかかわる情報については、見当違いの「証拠」やあてにならない論理、そして矛盾した結論といった問題を抱えるようになってきている。それゆえ、これまで行なわれてきた末日聖徒による比較研究の多くは、聖典分析の面でも、考古学上の諸事実という面でも、誤った情報を与えられてきている。他方、そうした比較研究を試みている少数の考古学を職業としている人たちは、次のふたつの点でしばしば過ちを犯している。(1)モルモン経自体について、つまりその中に書かれていることと書かれていないことについてあまり知らない。(2)考古学上の細かな点について適応する時代はいつか、古代アメリカでその舞台として最も可能性の高いところはどこかといったことを適切に考察していない。実際のところ、ある出来事や特徴の正確

な年代や場所について十分な研究が行なわれ、信頼に足る記述ができるようになったのは、ほんのここ数年のことではないのである。

モルモン経を研究する者は、そこに書かれている情報を常に最新のものにしておくことによって、モルモン経についての考え方の幅を広めていくことをいとわない。当時教会で最も優れた碩学(せきがく)のひとりであったB・H・ロバーツの著作の中から、その例をあげてみよう。ロバーツ長老は、おもに1922年に著わしたいくつかの著作の中で、モルモン経と、エサン・スミスというニューイングランドの牧師がその100年程前に書いた「ヘブライ人の夢」という題の空想的な小説との比較研究を試みた。批判家の中に、予言者ジョセフ・スミスはそのエサン・スミスの小説を下敷きとして使ったのだという者がいたからである。ロバーツ長老は、この「ヘブライ人の夢」と、古代アメリカの民族と文化に関する当時の学問的な文献とを研究し、それをモルモン経と対照させてみたのである。

しかし残念なことに、その当時古代アメリカ文明について正しいと思われていたことが、現在では、不完全な、そして場合によっては不正確な情報をもとにしたものであることが証明されている。例えばロバーツ長老はその研究の中で、当時一般に広く受け入れられていた、モルモン経は西半球全体の歴史書であるという概念を基本にしている。しかし現在では、ふたつの面(特定の分野の研究材料についての知識、およびモルモン経分析の手法)モルモン経についてロバー

ツ長老が立てた仮説の中には間違っているものがあつたことがわかっている。

考古学者たちによるモルモン経批判の中には、最も広く流布されているふたつの文献(故ロバート・ウォーコップの本と10年程前のマイケル・コウの論文(注5))があるが、このふたつともやはり同じ壁に突き当たっている。この著名な学者はふたりとも、モルモン経の反論の根拠に前述の不幸な仮説を使っている。すなわちモルモン経は、アメリカインディアンを含む新世界全体の出来事について書いた記録であるとする仮説である。当然のことながら、ふたりの出した結論も、一部の末日聖徒が到達した結論と同様に誤ったものであつた。

モルモン経を古代の記録として、外部の資料から得た情報と比較し研究する場合、その対象となる諸事実は、ある特定の時代や地域に限定したうえで引き出されたものでなければならないことは明らかである。例をあげてみよう。パウロの書簡を取り巻く環境について説明するにあたって、パウロの著作活動がユダヤ人の捕囚(はくごう)があつた時代にバビロンで行なわれたともいうかのように扱ったとしたら、その説明はまるで意味のないものになってしまう。それゆえモルモン経と、古代アメリカにおけるモルモン経の歴史上の舞台について考古学者がこれまで研究してきた内容とを比較研究する場合、私たちは同じように、できる限りその出来事の起きた場所と時代とを明らかにする義務を負っているのである。

## 記録の性格

モルモン経について、ほかにも重要で新しい考え方がある。それは、モルモン経というのは、今日使われているような意味での歴史書ではないということである。ある特定の領土に起こったことをそのまま書き留めたものというよりは、むしろ旧約聖書のようなものであって、第一義的には、主の靈感を受けた予言者たちの書いた家族の記録なのである。こうして見ると、モルモン経というのは、重要な点で「種族の歴史書」と似通っていることがわかる。これに分類される記録というのは、その一族の起源だとか、なぜ自分たちが神に選ばれたのかとか、あるいはまた一族の命運にかかわる重大な事件だとか、その権力機構がよりどころにしている証文だとか、ほかの部族とのかかわりとかいったことについて精選した情報を残しているものである。どの種族も、ほぼ決まったようにこの種の歴史記録を利用するのは、その領土の境界線をはっきりさせ、権力を誇示し、その社会構造を安定させるためであるとともに、その成員に自分たちが何者であるのかをはっきりと教えるためでもある。

それが書かれたものであるか口承であるかにかかわらず、古代文明や部族の歴

史記録のほとんどは、このたぐいのものである。(注12)そうした記録は、その領土で「起こったこと」を総合的かつ体系的に記録しているわけではない。実際その種族が、ある地域全体を支配していたわけではなかったかもしれないからである。(アブラハムの場合も同様である)こうした種族が、単にある社会の一員でしかなかったこともたびたびある。ほかの同じような種族と並立関係にあったのである。私たちの大部分は、公的な国家というものを歴史の重要な主題と考えているが、こうした種族はその国家という枠の中にいた場合もあるし、枠の外にいた場合もあるのである。

例えば旧約聖書における族長時代の記録というのは、いわばある種族の記録である。そのため、まず第一に書かれていることは、その種族にとって重要な歴史的事件であり、また種族の指導者たちが神から受けた偉大な真理である。旧約聖書の場合、アブラハムがメソポタミヤ北部を出発してカナンに入り、そしてエジプトに至るまでが書かれている。この間アブラハムの家族は、ほかの様々な種族や文化圏と密接なかかわりを持ったはず

であるが、記録上ではほとんど無視されている。ウル、ロト、アビメレク、ゴモラ、「5人の王」、メルキゼデクといった名称も、ほんの少し登場するだけであるが、それは、そうした土地や人物は本質的には場面の一部にしかすぎないからであって、ほとんどの場合、イスラエルが約束の地でその地位を得た過程と理由とを語る際に、その舞台を助ける脇役として登場するだけなのである。

ニーファイ人の記録もジェレド人の記録も、こうして同じような特徴を備えている。ニーファイの種族の最後の記録者であったモロナイが記録を書き終えて埋めたのは、自分の周囲に記録にとどめる必要のあるような歴史がなくなったからではない。(モルモン8：1-9；モロナイ1：1-2参照)そうした出来事が、単なる自分の種族の歴史の一部ではなかったからである。(もちろん、ほかにももっと重要な理由があったからこそ、記録を終えて封じたのではあるが。モロナイ1：4と前書きを参照)そうすると、モルモンが抄録に際して、いわゆる「ミュレクの民」と呼んでいるゼラヘムラの民についてほとんど無視している理由も明



現存する3冊のマヤの本のひとつ、ドレスデン写本

らかになってくる。数の上では、ニーファイ人をはるかにしのいでいたにもかかわらずである。(モーサヤ25：2-3参照) イテルもまた、あの王座を奪った支配者たちについては、特別の関心を持って記録していたわけではなかった。おそらくは彼らは対立する種族の支配者であって、自分の先祖たちを獄に入れ、王座を奪った人物であったはずなのである。実際のところ、イテル書にはその支配者たちの名前すら登場してこない。(イテル10：30-31；11：17-19参照) ジェレドの種族の民にとって、その支配者たちの名前は、重要ではなかったということである。

ここで重要なのは、こうした古代アメリカの記録が、その記録を守る中心的な家族の運命を主題にしていたことである。ほかのことについて書かれることも時にはあったが、そうしたことは単にいわば中心となる劇に必要な背景や小道具として、その役割を果たすために置かれたにすぎないのである。時には数世紀にもわたる期間が省略されることすらあったが、これもニーファイやジェレドの子孫の運命を決するにあたって決定的な要素になると思われることが、その間ほとんど起こらなかったためであることは間違いない。

## 考古学の限界

以上見てきたことから、モルモン経の記録は近代的な意味での国家というものについて書いたものではないことがわかる。むしろ通常は統治権の系譜について書いている。しかし統治権の系譜というのは、考古学からはほとんど見えないのである。そこに問題が生ずる。青銅器時代のエジプトにあった、あの有名なヒクソス王朝についても、また1千年前のメキシコに存在し、現在ではかなり論議の進んでいるトルテック族の支配者についても、その遺跡と理論的に関連づけることすらできないのである。(注13)メソアメリカについて現在入手できる考古学、言語学、歴史学上の証拠の性質から判断して、特定の部族の確実な足跡をさぐることはほとんど不可能である。ニーファイの種族らしきものについてすらできないのであるから、ましてや個人につ

いてはお手あげである。こうした問題は、古代文明にかかわる歴史の研究には必ずついて回る。専門家の間では、ヨシエアの時代とそれ以前にエリコの周囲に出没したイスラエル人の侵略者たちがどういう種族であったのかといった問題すら、決着がついていないのである。(注14)ヨルダン川付近に、「イスラエルここを渡れり」と書かれた記念碑があるわけでもなく、ゴセンの地があったと思われる場所を確定できるようにエジプトのどこかに標識が立てられているわけでもない。だから、聖典に書かれている記事と関係があると思われるような習慣や居住地を捜しだすほかないのである。

しかし、ひとつの解決(例えば、この地層から出土した新しい型の陶器のつばは、イスラエル人の入植があったことを示しているに違いないといったこと)が、ひとりでに「諸々の事実」から出てくるわけではない。ある文書や伝統の内容が実際に出土したものと一致していると主張する学者がいても、それは納得できないとする学者もいるかもしれない。実際、そうした仮説に激しく反論するかもしれないのである。「ポボル・ヴフ」という高地グアテマラの種族の歴史書があるが、これには、メキシコの文化様式を持った少数の戦士の一団が、およそ600年ほど前にその地を支配するために侵入して来たと書かれている。また、ニュージーランドのマオリたちは、中央ポリネシアからカヌーで渡って来たとされる少数の人の子孫であると考えている。資料としては、それほどはっきりしたものがそろっているわけではないが、ふたつの伝説の証明に使うことはできる。しかしその証拠能力は非常に低いため、この種の問題に関しては絶えず学者たちの中で議論が沸騰しているのである。

以上のことから、ニーファイの地における古代の生活についてモルモン経に書かれている内容と、メソアメリカの生活様式について最近の研究からわかることを比較して、数々の重要な合致点を確認できるものと仮定してみよう。そうすれば可能性としてだが、私たちは聖典に関係のない歴史的事象を扱う人々と厳密に同じ土台に立って物を言うことになる。

モルモン経の本文と、実際の出土品と

の間でこうした関係を確立することは可能だろうか。もちろん可能である。これは著名な考古学者たちが、長年にわたってほかの様々な文献と実地研究との間で確立しつつある関係とまったく同じ関係なのである。特に近年では、聖書の歴史に関して、この面で大きな業績があげられている最中である。

考古学者たちは、古代の生活の多くについてはいまだにかなり情報不足である。この理由は、単に陶器の破片や石片や崩れた壁を基礎にしている限り、信仰、社会機構、そして個人といったことについて結論に達するのは不可能だからである。しかも、いつの時代であっても、地中に埋められた大量の物的証拠の中から考古学者たちがこれまで掘り出してきたのは、そのほんの一部でしかない。それゆえ、古代において何が存在したのか、また何が存在しなかったのかということについては、私たちはいつも驚かされている。文化に関係する出土器の研究に、ほかの情報、例えば歴史言語学、碑銘研究、生物学的人類学、植物の同定といったものの助けが加わったとしても、私たちはまだ断定することはできない。それゆえにこそ、考古学上の発見に関するあらゆる解釈は、「これまでのところ」とか「……と思われる」といった静かな言葉で行なわれなければならないのである。

そうしてみると、考古学には考古学固有の限界があることがわかる。そのため考古学者たちは、自分たちの発見になる、限られたかつ曖昧な資料を基にして、筋の通った、しかし決して確定的ではない推理をすることを余儀なくされているのである。例をあげてみよう。エール大学のマイケル・コウは、アステカ族特有の神々と、それより2,500年程さかのほるオルメカ族の偶像との間に関連を見つけ出そうとしている。アステカ族の神々の特徴については、おもに16世紀のスペイン人が記録した伝説からわかるだけであるが、コウの推論では、オルメカ族の偶像も、アステカ族の神々の持つ特徴とほぼ同様の特徴を備えた神々を表わしていたのではないかとみなしている。(注15)しかし、コウの同僚であるジョージ・カブラーは、同一の情報素材として使いつつ、この説に対して真っ向から異

論を唱えている。(注16)しかし、これも資料をどう判断するかの問題である。一方、例えばユダヤといったかなりよく知られているはずの地域についてさえ、解釈はきわめて多種多様である。ウィリアム・F・アルブライト教授は、60年程前、テルラキシの遺跡というのは旧約聖書にアッシリアとバビロンの侵入に関連して登場する「ラキシ」の町の跡に相違ないと断定した。教授がそう断定した根拠は、紀元4世紀のエウセビウスの書いた古い文書にある。ここにあげられている数々の遺跡や里程の記入から、問題のテルラキシ遺跡がおそらく旧約聖書に登場する町の遺跡であろうとするのである。シカゴ大学のアールストロム教授は、この鑑定の結果に異論をさしはさんでいる。また、長年にわたってこの遺跡の研究にたずさわっているテルアビブ大学のデビッド・アシシュキンは、鑑定の結論が状況

証拠にのみ頼っているとしながらも、彼の考えでは、その結論は「きわめて可能性が高い」としている。(注17)

モルモン経の研究者の多くは、現代のグアテマラ市の一部にあるカミナルヤムの大遺跡というのが、モルモン経の中のニーファイの市と符合するのではないかと考えている。こうした推論については立証可能であろうか。もちろん不可能である。しかし、そうした可能性を高めるにあたっては、現在の最も進んだ考古学の考え方から導き出される様々な手法に従って行なわれているのである。L・R・ビンフォード教授の主張によれば、「考古学上の記録にある諸事実が曖昧模糊」としている中であって、そうした曖昧さを前にした考古学者たちは、「細心の注意を払ってあらゆる可能性について検証したうえで、最も可能性の高いものはどれか判断を下さなければならぬ」のである。

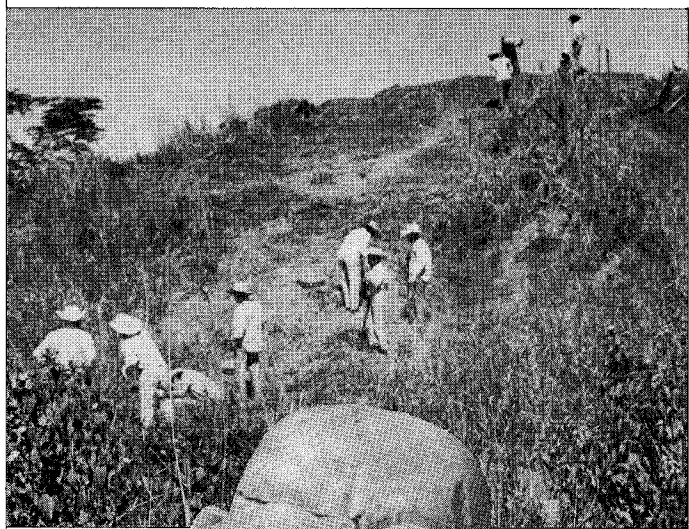
言い換えれば、可能性が高いかどうかということが、考古学上打ち立てられたある説が正しいかどうかを判断する基準となるのである。(注18)

私たちができることはこれしかない。結局、人の作った歴史はもちろんのこと、科学というものも、「永遠に流動的」なのである。ポッパーは、次のように断言している。「確信という我々の主観的な経験の中においてのみ、また我々の主観的な信仰の中においてのみ、『絶対に確実』と言い得るのである。」(注19) 科学には、その「主観的な信仰」と同等のものは存在しない。それにもかかわらず、ここ半世紀にわたる熱心な探求に照らしてみると、ニーファイ人の記録に潜んでいる可能性の深さを考えて、多大の興味をそえられるのである。

## 戦争

専門家の意見が劇的に変わって、モルモン経の記述に一層納得するようになった例がある。その良い例は、戦争に関することである。つい最近までメソアメリカについては、その最盛期には平和な社会しか存在していなかったという図式が支配的であった。紀元300年頃から800年頃にかけて見られたマヤやテオティワカンの壮大な遺跡がその例であるとされた。(注20) マヤの指導者たちは、その時間を平和のうちに思索にふけり、複雑な神々を礼拝し、優れた芸術作品を鑑賞し、その暦を使って哲学的な研究に没頭し、そしてそのほかの時間は「新世界の賢人」のように振る舞っていたと考えられていた。紀元1000年以降になって初めて、軍隊というものがメソアメリカの歴史で重要な役割を演ずるようになったと考えられていたのである。

1950年代および1960年代になって、アーミラス、ランズ、パラームといった(注21) 幾人かが、この図形は書き変える必要があると主張したが、この主張に耳を傾ける者はだれもいなかった。この状況に大きな変化をもたらしたのが、1970年にユカタン半島のペカンでチューレーン大学が行なった発掘調査である。ここの遺跡の中心部は、周囲がおよそ2キロメートル、幅が平均16メートルの堀で囲まれている。これを造った人々は、



グアテマラとメキシコ国境付近で行なわれた遺跡発掘の写真。この写真からは、遺跡から信頼に足る情報を得ることのむずかしさがわかる。

遺跡から出土した破片は復元可能である。これは、遺跡の崩れた墓の中から、ふたつに割れて出土した容器を復元した偶像の写真である。



堀の内側に沿ってくいを打ち込み、防壁を作っていた。デビッド・ウェブスターは、この築溝法に軍事的効果のあることを認めて、次のように言っている。「外側から『上に向かって』投げることは、ほぼ不可能である。防御側はおそらく、そのさくに守られて、やり投げ器や投石器を使い、近づいてくる敵の上に長距離用の飛び道具を雨あられと降らせることができたであろう。」(注22)

この解説は、ほとんどアルマ書49章18節から20節の焼き直しのようなものである。しかし、スペイン人征服者のコルテスも、同じような種類の要塞化された場所をいくつか見ていた。コルテスが1520年代に、メキシコのタバスコとホンジュラスの間にある森林地帯を進軍していたときのことである。ベカンの遺跡は、モルモン経の時代よりもはるかにあとの、大して重要性のない遺跡のひとつだったのであろうか。ウェブスターは、ベカンの堀と城壁は、紀元150年から450年の間に造られたものであると説明している。これはモルモンやモロナイが生活をし、戦っていた場所とほぼ同じ時代である。(注23)

それ以来、この説を裏づける証拠が数多く現われている。今では、要塞のあった遺跡として知られているものも100カ所以上になった。レイ・マセニーがエズナで行なった発掘作業によって、キリストの時代にまでさかのぼる大規模な堀を備えた要塞があったことも明らかになった。(注24) メキシコ峡谷にあるロマ・トレモテは、丘の頂をさくで囲んだ居留地で、その時代は紀元前400年頃までさかのぼる。(注25) 有名なモンテ・アルバンの長さ3キロにも及ぶ防御壁の一部は、紀元前200年以前のものである。(注26) 西ホンジュラスにあるロス・ナラニョスの中心部は、周囲が全体的に大きな堀で囲まれていて、これは時には、紀元前500年から1000年頃までさかのぼるものもある。(注27) 実際の遺跡のほかにも、絵画、武器の遺物、兵士の立像といったものが長年にわたって発見されている。また、石垣も同様に発見されている。(アルマ48：8参照)(注28)さらに、一般公開用の頭がい骨陳列台(アステカ語でツァンパントリ)があったが、これはスペイ

ン人の征服時代にアステカ族が使用したもので、軍隊支配に反抗しようとする民衆の心に恐怖心を植えつけるためのものであった。それが最近、オアハカのクイカトラン峡谷で発掘されているのである。しかもその年代は、キリストの時代以前にまでさかのぼるものだという。(注29)

ヨーロッパ人がアメリカ大陸に到着したときに見られた戦争の慣習の起源が、メソアメリカの歴史のきわめて初期にまでさかのぼることが、だんだんと明らかになってきている。しかしほんの10年前には、この地域の古代の生活について書かれた出版物のほとんどが、この考え方とは完璧に矛盾する書き方をしていたのである。

すでに時代遅れになった考え方がいかに学者たちをおびやかしているかを示すささやかな事件が最近起こった。以前私の教え子だった青年が、心配そうな様子で私に手紙を書いてきたのである。彼の在籍する合衆国東部のある大学の担当教授が、モルモン経の中にたびたび登場する弓や矢は、紀元900年以前にはメソアメリカには存在していなかったのだと彼の前で断言したので、彼としては非常に心配しているとのことであった。しかし私は彼に、メキシコの中央部で発見された陶器の破片には、そのような武器を持った人物の絵が描かれていたのだから、心配しないようにと返事を書いた。その破片の年代は、その教授が「認定」としている年代から、さらにおよそ3,800年程さかのぼるのである。(注30)

アルマ書48章から第三ニーフアイ3章までの間に見られる要塞の描写、ジェレド人とニーフアイ人の記録にある通りたびたび行なわれた戦闘行為、死傷者数の規模、使われた戦法、武器の多様さ、軍隊の組織法、さらにモルモン経の中で明らかにされている戦争に関するそのほかの情報は、最近の研究でメソアメリカについての私たちの知識が増すにつれて、今では完全にあり得ることと考えられているのである。

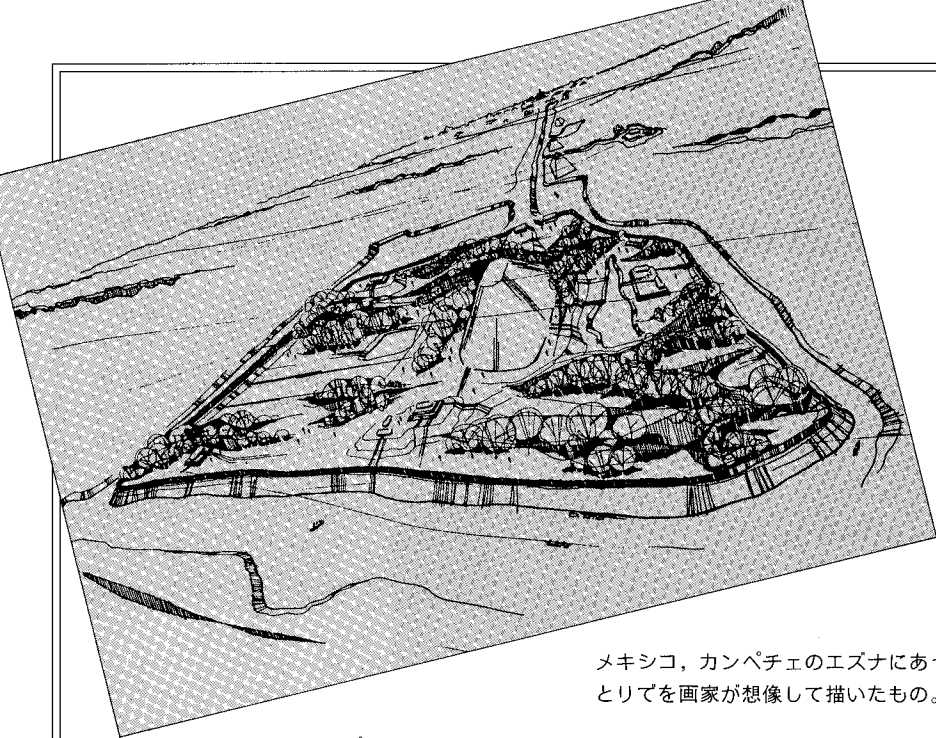
## 人 □

1560年のことである。バルトローム・デ・ラ・カサス神父は、コロンブスの発見後2世代のうちに、ノバイスパニアで

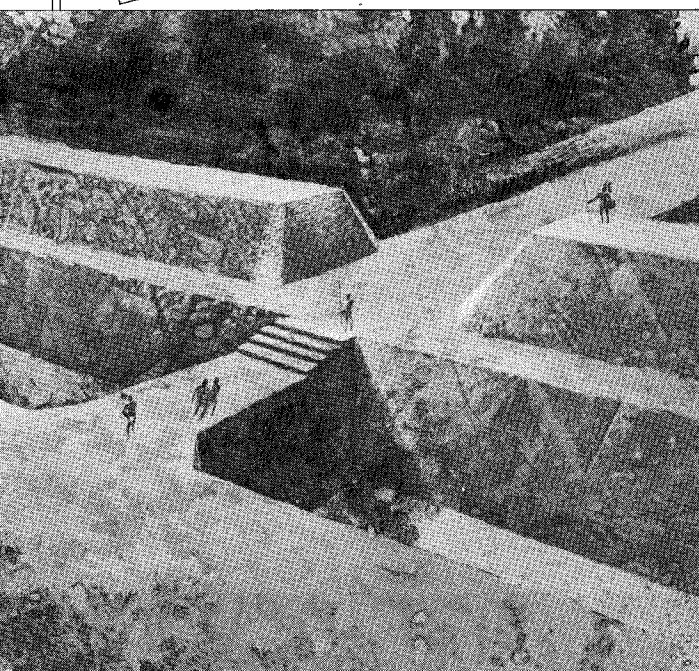
は4千万人ものアメリカ原住民が、「不当にかつ圧制によって」減んでいったと推定した。(注31)ヨーロッパ人が到着したときの西半球全体の人口について、1930年代になって人類学者のA・L・クローバーがはじき出した数字は、840万人というはるかに小さい数字であった。(注32)このふたつの極端な数字は、ヨーロッパ人がアメリカ大陸に侵入する以前の人口を決定することが、いかに困難であるかを物語っている。よくあることであるが、人口の推定というのは、その推定を行なった人の生きた時代を反映するものなのである。クローバーの算出した数字が、大恐慌時代の悲観的な世相を反映したものではなかったとは言いがたい。歴史家も人類学者も、ほかの学者も影響を受けたのである。これに反して、ヘンリー・ドビンズが繁栄の1966年に行なった資料の分析では、紀元1500年にはアメリカ大陸に9千万人の原住民が住んでいたと結論づけている。メキシコと中央アメリカだけでも、4千万人以上いたと言うのである。(注33)

もちろん人口の研究として、空理空論やいたづらな解釈を基礎にしているわけではない。歴史的、考古学的資料をさらに入念に調査し、専門家たちが互いに批判し合うことによって、それぞれの数字を修正しているのが、現実的な数値について一層深い理解が生まれているのである。ウィリアム・デノバンは、1976年に著わした「1492年におけるアメリカ大陸原住民の人口」という著作の中で、こうした議論をことごとく取りあげて考慮したうえで、西半球では合計5,700万人といったところがかかなり妥当な線であろうと推定した。彼はまた、メキシコと中央アメリカには約2,700万人いたと結論づけた。

(注34)さらにまた、フェルナンド・デ・アルバ・イソトリルソチトルは、メキシコ中央部のスペイン征服以降の歴史を調べるにあたって、その資料として現地の文書を用いたが、彼によると、10世紀のトルテック族は数百万人の軍隊で戦争を遂行し、560万人以上が戦死したと言う。(注35) おそらくは誇張もあるだろうから、その分を差し引いて考えなければならぬが、それでもこの数字は筋の通ったものという枠からはみ出る数字ではない。それより600年前の、ニーフアイ人の戦死者



メキシコ、カンペチエのエズナにあった  
とりてを画家が想像して描いたもの。



メキシコ、カンペチエの  
ペカンでの発見に基づい  
て、要塞と防御用の土手  
の一部を表現したもの。

数23万人という数字も、同様に枠内に収まる数字である。(モルモン6：10-15参照)

数十年前に人口統計学者たちの出した数字は、モルモン経の中に書かれている記述と合致するという点を見いだすことができなかつた。ジェレド人とニーファイ人の最後の戦いでは、何百万という人々が減っていったと書かれているからである。しかし現在では、居住した地域に関する資料の分析、生態学、居留地の大きさ、戦争による死傷者数、そのほかモルモン経に書かれている人口に関係す

る要素といったことの研究により、昨今の人口統計学の変遷の中で、矛盾もなく現実性のある数字として重要な内容を持つものとしてとされている。と同時にモルモン経の中に報告されている断定的な数値も、最近のメソアメリカの研究から許容できる数値の範囲に収まっているのである。

### 金属の使用

批判者たちは、モルモン経に書いてありながら、古代のアメリカにそれと一致するものの存在が知られていないという物品がある場合、それは特別な問題であ

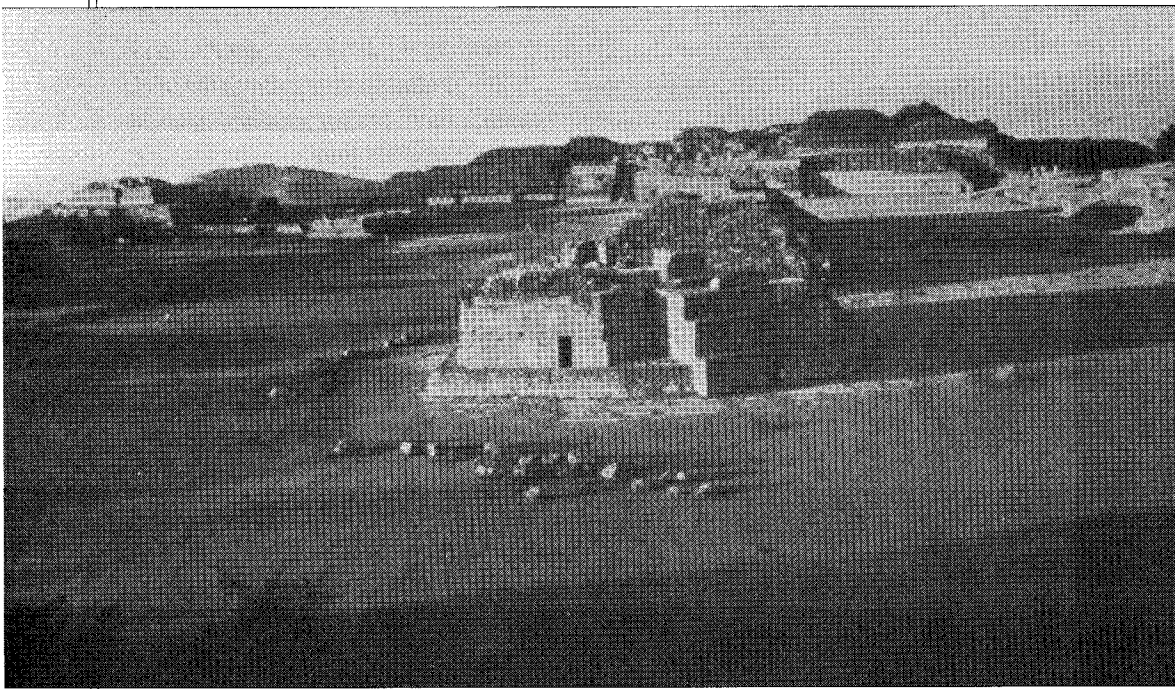
ると考えてきた。しかしながらこの問題に関しては、それを批判する者も、さらにそれに反論する者も共に、聖典で述べられていることや、正しい時代と場所を定める比較文化の資料という点でも不十分な知識しか持っていなかったことがわかってきた。

長年にわたり、メソアメリカの学者たちは、この地域には紀元900年頃の最盛期の時代のあとになるまで、金属工業は知られていなかったと結論していた。ところが一方、モルモン経には、ニーファイ人たちがほぼその歴史の初めから、鉄、銅、真鍮、鋼、金、銀といったものを使用していたと書かれている。(IIニーファイ5：15) さらにまた、ジェレド人たちも、それより1,000年以上も昔に金や銀、そのほかの金属を使用していたとある。しかしながら新しい資料と新しい解釈によれば、ここでもモルモン経に明るい光が投げかけられるのである。

メソアメリカの金属工芸品のほとんどは、スペイン人の征服直前の数世紀の間に作られたものである。当時でも、その地域には豊富な金属材料は存在していなかった。そのため、それ以前に作られた物が、おそらくは再び使われたり、または溶かされて鋳直されたりしたのであろう。当然のことながら、そのような貴重な品物が、考古学者が発見できるような場所に残されていたという例はきわめて少ない。これまで発見された初期の金属製品は、一般的に量が少ない。また墓や神聖な遺跡の中に捧げ物として意図的に置かれた事実はその貴重さを示すものである。紀元900年から紀元前約100年にまでさかのぼる金属細工が、現在まで12個あまり発見されているが、その事実は、この人々も金属細工の知識を持っていたことをはっきりと示している。しかしながら、間違いなく、いつの時代であっても金属製品というのは比較的珍しく、またかなり貴重なものであった。パターンソンは、コロンブス以前の時代に金属が比較的珍しかったのは、当時の技術が未熟であったことに関係があるのであって、そのために金属の鉱床を採掘するのが困難だったのではないかと推測している。(注36)

いずれにしても、金属を細工する技術





メキシコ、オアハカのモンテ・アルバンの遺跡。この写真からは、考古学上の発掘作業からどのような成果が生まれてくるかがわかる。前方の建物の年代は、キリストの時代頃までさかのぼる。この建物には、太陽と月のそれぞれの位置と一直線につながる観測用の通路があるために、観測所ではなかったかと言われている。しかし、実際の機能はまだに不明である。(写真撮影 ジェームズ・クリステンセン)

を持っていたという証拠について、ほんのわずかな量の初期の作品しか発見されておらず、これだけしか証明するものがないというのは、まったく驚かされることである。私たちはペルー人たちが、紀元前2,000年以降には、単純な金属細工の技術を持っていたことは知っている。(注37) ペルーとメソアメリカの間に交渉があったことは、一般に受け入れられていることであるから、金属といった貴重な、かつ文化的に優れた物が、もしペルーからメソアメリカに伝わらなかったとしたら、私たちは驚かざるを得ない。(注38) 金属細工の技術が海を渡って導入されたという可能性について考えるまでもなく、ペルー人が持っていた知識から、この点に関して従来からの考古学の理論には誤りがあることがはっきりとわかる。また実際に、メソアメリカの民も見かけ以上にこの種の技術についての知識を持っていたこともわかる。

言語の研究からも、メソアメリカで初期の時代に金属が使われていたことが裏づけられている。言語学者たちは、長年にわたって現存している関係諸語を比較研究し、その母体となる基語を再構築しようとしている。ロングエーカー教授とミロン教授は、メキシコのオアハカ州とその一帯で使用されていたミスチカ基語の一部、再構築することに成功した。そ

の結果によれば、金属（あるいは、少なくとも「金属の鐘」）を表わす語は、紀元前100年頃には、すでに使用されていたものと考えられる。(注39) ツェルタル・ツォツィル諸語に関するカウフマンの研究によれば、マヤの地域には金属を意味する語がもうひとつあって、その語源は紀元500年頃までさかのぼることができ、同じ語源の語がワステカ語にも見つけ出すことができるとしている。このワステカ語というのは、マヤ語系の一言語であって、紀元前2,000年頃、その主流から分かれたものと考えられている。(注40) 一方、キャンベルとカウフマンは、ミソ・ツォクアン基語に関する有力な研究の中で、その言語こそオルメカ文明の基幹言語であったと、かなり断固たる調子で説明している。この言語にも金属を意味する語があり、ふたりの考えでは、その語源は紀元前1,500年頃までさかのぼるものとみている。(注41) というわけで、現在、歴史言語学からは、優に紀元前1,000年頃の初期メソアメリカにおける3つの最も重要な祖語の中で、金属に該当する語が知られていた、またその金属が使われていたことがわかるのである。私たちは将来、めったにないことかもしれないが、考古学者たちが何か金属の見本を発見し、それによって現在欠けている部分を補ってくれるときが来るということに

信頼を寄せておいていいのかもしれない。

モルモン経に登場する金属の中に、「ゼフ」というのがある。(モーサヤ11: 8 参照) この語のヘブライ語の語源を調べると、割り出し可能な語がいくつかあるが、「輝いた」という意味か、「めっきをした」という意味だと思われる。メソアメリカの物質に照らし合わせて考えると、おそらく論理的に「ツンバガ」というものである可能性が一番高い。(注42) この銅と金の合金は、コロンビアや中央アメリカで広く産出されたものであるが、マヤの遺跡でも発見されている。(注43) もうひとつ可能性があるものとしては、あまり例のない銅とすずの合金であって、メキシコ西部で、ルビン・デ・ラ・ボルボラとカレー、イースビィによって発見されたものである。(注44) あるいは、すずそのものがゼフだったのかもしれない。現代の冶金学者たちは、すべての合金はすでに知られており、ゼフのように新しい、どういふものかいまだにはっきりしないようなものはまったく存在しないと考えがちである。

物質の分析と命名には、まだまだ解決しなければならない問題があるということを示す、同じような事例をあげてみよう。中世のロシアの文献には、「カルシニ」という金属のことが書かれている。これがつい最近になって、慎重に文献を読み

直した結果、砒素とアンチモンから成る、その地方特有の物質であることが暫定的に判明した。学者たちは、それ以前には、「カルシニ」というのは間違いなく真鍮のことでありと推測していたのである。

(注45) これと同じような事例だとして、カレーとイースビヒは、メソアメリカの考古学者に対して、コロンブス以前の時代における鉱業と精錬、すずの使用について、「事実をかたくななまでに受け入れようとしない」として厳しく批判した。考古学者たちは、スペイン人が侵入する以前の時代に、このすずという金属が存在していたことを一般的には否定していたからである。(注46)

一方クラドックは、地中海地方における古代の金属の使用についての誤った考えをひとつ訂正させた。彼は新しい分析法を用いて、銅と亜鉛の合金である真鍮が、リーハイの時代の頃、ギリシアとエトルリアで実際に使われていたことを証明したのである。亜鉛もまた、使われていたのかもしれない。(注47)長年にわたる標準的な説は、亜鉛と、亜鉛から意識的に作り出される合金は、1,700年代のヨーロッパで初めてできたものであるとされた。この説からすると、「真鍮版」の存在にはいささか問題があったが、今ではまさにモルモン経に書かれている通り、それが真鍮製であった可能性がきわめて高くなったのである。

以上の話の要点は、こうした疑問を解決する道が、「知識」というものが一体何なのかをはっきり教えていることである。現在の時点では、私たちは「ゼフ」というのが何であるかわからない。冶金学者や考古学者たちが、現在自分たちの持つ資料がいかに完璧であると感じているにせよ、私たちはさらに研究を深めることにより、新しい情報をもたらされるものと確信している。その中には、すでに発見された標本の化学構造の解明もあるだろう。また、将来確実に発見されるものもあるうし、金属の専門用語などの問題もあるだろう。例えば、何年前かにスウェーデンの考古学者であるシグワルト・リンネがメキシコのテオティワカンで発掘した陶製の器の内容物について、私たちはもっと入念に研究したいと思っている。この器の年代は、およそ紀元300年か

ら400年のものであり、その中には銅や鉄を含む「金属のような」塊が入っているからである。(注48)同時に、関心を抱く末日聖徒は、モルモン経の本文を細かく調査し、金属について書かれていることやそれに類似する記録を分析し、相互に関連づけを行なうべきである。そのときに初めて適切な比較研究を行なうことができる。しかしながらモルモン経の金属使用の「問題」は、すでに解決に向かって大きく踏み出しているように思えるのである。

広い意味で言えば、いつでも批判を受け入れられる態度で、倦むことなく研究を続けることが、本稿の主題である。末日聖徒の読者といえども、あるいはまた考古学を職業としている人やその同僚といえども、ただ座して待つほど愚かなことはない。表面的な「証拠」の見方から脱却したいと望んでいる末日聖徒の読者は、読書技術を向上させ、古代の文献の見方に幅を持たせるようにしなければならない。昔の文書には、なじみの薄い宗教的な資料も含まれているかもしれないが、それでも自分たちの関心のある有形の遺物について新しい理解の方法を示唆してくれるかもしれない。考古学者なら、これくらいのことでは簡単に学び取らなければならない。それが聖徒であれ考古学者であれ、他人の業績を無視する者は、自分の意図とは逆の結果を招くことになる。両方の側に立つ熱心な学究態度こそ、最も賢明なあり方なのである。

(次号へ)

## 注

1. Thomas Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions* (Chicago: University of Chicago Press, 1962).

2. Karl R. Popper, *The Logic of Scientific Discovery* (New York: Basic Books, 1959) p.280 「古くから科学の理想であるエピステーム——すなわち、絶対的に確実で、論証可能な知識——は、偶像にしかすぎないことが立証されている。科学に客観性を求めれば、必然的に、科学上の所説はみな、『永遠に流動的』にならざるを得ない。一応、確認することはできるかもしれないが、いかに確認したとて、それもほかの所説と相対的な関係においてそうなのであって、その所説もやはり、流動的なのである。確信という我々の主観的な経験の中においてのみ、また我々の主観的な信仰の中においてのみ、『絶対に確実』と言い得るのである。」

3. M. Wells Jakeman, "The Ancient Middle-American Calendar System: Its Origin and Development," *Brigham Young*

*University (BYU) Publications in Archaeology and Early History*, no.1, 1947; Hugh Nibley, "The Book of Mormon as a Mirror of the East," *Improvement Era* 51 (1948), pp.202-04, 249-51; Sydney B. Sperry, *Our Book of Mormon* (Salt Lake City: Stevens and Wallis, 1947).

4. John W. Welch, "A Study Relating Chiasmus in the Book of Mormon to Chiasmus in the Old Testament, Ugaritic Epics, Homer and Selected Greek and Latin Authors," Master's Thesis, Brigham Young University, 1970; John W. Welch, editor, *Chiasmus in Antiquity* (Hildesheim: Gerstenberg Verlag, 1981).

5. Robert Wauchope, *Lost Tribes and Sunken Continents* (Chicago: University of Chicago Press, 1962). Michael D. Coe, "Mormons and Archaeology: An Outside View," *Dialogue* 8(1973), pp. 40-48.

6. 詳細については多少異論があるものの、これとほぼ同じ結論に達したものの中から、次に発表年代順にあげておく。J.A. and J.N. Washburn, *An Approach to the Study of Book of Mormon Geography* (Provo: New Era Publishing, 1939); M. Wells Jakeman 少なくとも1946年以降のBYUにおける一般講義の講義録; Thomas Stuart Ferguson, *Cumoram — Where?* (Independence, Missouri, 1947); Milton R. Hunter and Thomas Stuart Ferguson, *Ancient America and the Book of Mormon* (Oakland, California: Kolob Book Co., 1950); Ross T. Christensen, "The Present Status of Book of Mormon Archaeology: Part 2," *Millennial Star* (Oct. 1952), pp. 234ff.; John L. Sorenson, "Where in the world? Views on Book of Mormon Geography," 未刊行の Book of Mormon Working Paper No. 8, 1955; V. Garth Norman, "Book-of-Mormon Geography Study on the Narrow Neck of Land Region," 未刊行の Book of Mormon Geography Working Paper No.1, 1966; Sydney B. Sperry, *Book of Mormon Compendium* (Salt Lake City: Bookcraft, 1968), pp. 447-451; Hugh Nibley, "The Book of Mormon and the Ruins," *Foundation for Ancient Research and Mormon Studies, Nibley Archive Reprint BMA -BM* (1980), p. 2; David A. Palmer, *In Search of Cumoram: New Evidences for the Book of Mormon from Ancient Mexico* (Bountiful, Utah: Horizon Publishers, 1981).

7. 例えば, Norman A. McQuown, "Indigenous Languages of Native America," *American Anthropologist* 57 (1955), pp.501-70.

8. ニーフアイ人の(そしてジェレド人の)地が、かなり限定された地域であると考えさせるような聖句については、これまで数多くの学者によって論議されている。ブリガム・ヤング大学の聖典学の教授を長年務めたシドニー・B・スピーリーも後述の著書の中で、その例を取りあげている。教授がしばしば討論の対象として使用した聖句は、次のようなものである。オムナイ1:20-21; モーサヤ8:7-12; アルマ22:30-32; モルモン1-5; イテル9:3; 14; 15. J. Nile Washburn, *Book of Mormon Lands and Times* (Salt Lake City:

Horizon Publishers, 1974), pp.205-17,283-87も参照。また、注6にあるFerguson, 1947とPalmer, 1981も参照のこと。

9. Michael D. Coe, "Early Steps in the Evolution of Maya Writing," in H. B. Nicholson, editor, *Origins of Religious Art and Iconography in Preclassic Mesoamerica* (Los Angeles: UCLA Latin American Center and Ethnic Arts Council of Los Angeles, California 1976), pp.110-11.

10. 注6と注8に引用されている文献のほか、John L. Sorenson, *An Ancient American Setting for the Book of Mormon* (Provo: FARMS, in press).

11. 次のような理由が考えられる。(1)ニーファイ人のクモラとジェレド人のラマは、同一の丘であった。(イテル15:11)(2)この地域は、骨が一杯あり、(オムナイ1:22; モーサヤ8:8; 21:26-27など)また、「湖と川と泉の多い所」(モルモン6:4; イテル15:8)で、デソレションの地にあった。ここは、狭い地峡でバウテンフルの地と接していた。(アルマ22:29-32)(3)モルモン3章から6章までで、ニーファイ人の最後の戦場がかなり局地的だったことが明らかになる。その中心は、ほぼデソレション市の全域であって、そこは「南の地へ行くあの狭い地峡の附近」にあるデソレションの地であった。(モルモン3:5,7)(4)それゆえ、以上の理由から、ニーファイ人とレーマン人の最後の戦場であるクモラは、狭い地峡の近くにあった。

12. I. M. Lewis, "Force and Fission in Northern Somali Lineage Structure," *American Anthropologist* 63(1961), p.109; F. Barth, "Segmentary Opposition and the Theory of Games: A Study of Pathan Organization," *Journal of the Royal Anthropological Institute* 89(1959), p.7; W. F. Albright, *Yahweh and the Gods of Canaan: A Historical Analysis of Two Contrasting Faiths* (London: University of London: The Athlone Press, 1968), p.82; Nigel Davies, "The Aztec Concept of History: Tula and Teotihuacan," 1982年マンチェスターで行なわれた第44回国際アメリカ学会議に提出した論文。

13. William F. Albright, *The Archaeology of Palestine* (Harmondsworth: Penguin Books, 1949), pp.85-87; Richard A. Diehl, "Tula" in J.A. Sabloff, editor, *Supplement to the Handbook of Middle American Indians*, Vol.1, *Archaeology* (Austin: University of Texas Press, 1981), p.291.

14. Kathleen M. Kenyon, *The Bible and Recent Archaeology* (Atlanta, Georgia: John Knox Press, 1978), pp.33-43.

15. Michael D. Coe, *Mexico*, 2nd edition (New York: Praeger, 1977), p.86.

16. George Kubler, "The Iconography of the Art of Teotihuacan," *Dumbarton Oaks Studies in Pre-Columbian Art and Archaeology*, No.4 (Washington D.C., 1967), pp.11-12.

17. 鑑定にかかわる議論については、1982年2月のブリガム・ヤング大学で行なわれた講義の中で、アシシキキンが要約して述べている。

18. Lewis R. Binford, "Reply" *Current Anthropology* 24 (June 1983), p.373; emphasis in the original.

19. 注2を参照

20. David L. Webster, *Defensive Earth-*

*works at Becan, Campeche, Mexico: Implications for Maya Warfare*, (Tulane University, Middle American Research Institute, Publication 41, 1976), p.108.

21. Angel Palerm, "Notas sobre las Construcciones Militares y la Guerra en Mesoamerica," *Anales del Instituto Nacional de Antropología e Historia* (Mexico), 7(1956), pp.123-34; Pedro Armillas, "Mesoamerican Fortifications," *Antiquity* 25(1951), pp.77-86; Robert L. Rands, *Some Evidences of Warfare in Classic Maya Art*, doctoral dissertation, Columbia University, New York, 1952 (University Microfilms Doctoral Dissertation Series no.4233, 1952).

22. Webster, p.96.

23. 同上, p.87.

24. Ray T. Matheny, Deanne L. Gurr, Donald W. Forsyth, and F. Richard Hauck, *Investigations at Edzna, Campeche, Mexico*, Volume 1, Part 1: *The Hydraulic System* (Brigham Young University, New World Archaeological Foundation, Paper 46, 1983)

25. "Current Research," *American Antiquity* 45(1980), p.622.

26. Richard E. Blanton and Stephen A. Kowalewski, "Monte Alban and after in the Valley of Oaxaca," in J. A. Sabloff, editor, *Supplement to the Handbook of Middle American Indians*, Vol.1, *Archaeology* (Austin: University of Texas Press, 1981), p.100.

27. Claude F. Baudez and Pierre Becquelin, *Etudes Mesoamericaines*, Vol.2, *Archeologie de los Naranjos*, (Mexico: Mission Archeologique et Ethnologique Francaise au Mexique, 1973), pp.3-4.

28. Palerm, p.129; Webster, p.98.

29. Charles S. Spencer and Elsa M. Redmond, "Formative and Classic Developments in the Cuicatlan Canada: A Preliminary Report," in Robert D. Drennan, editor, *Prehistoric Social, Political, and Economic Development in the Area of the Tehuacan Valley: Some Results of the Palo Blanco Project*, University of Michigan, Museum of Anthropology Technical Reports, no.11 (Research Reports in Archaeology, Contribution 6), 1979, p.211.

30. Florencia Muller, "Instrumental y Armas," in *Sociedad Mexicana de Antropología, Teotihuacan: Onceava Mesa Redonda* (Mexico, 1966), p.231.

31. Henry F. Dobyns, "Estimating Aboriginal American Population: An Appraisal of Techniques with a New Hemispheric Estimate," *Current Anthropology* 7(1966).

32. 同上, p.396.

33. 同上, p.416.

34. William M. Denevan, editor, *The Native Population of the Americas in 1492* (Madison: University of Wisconsin Press, 1976), pp.289-92.

35. Milton R. Hunter and Thomas S. Ferguson, *Ancient America and the Book of Mormon* (Oakland, California: Kolob Book Co., 1950), p.385. 英文ではこれが唯一の資料である。

36. Clair C. Patterson, "Native Copper, Silver, and Gold Accessible to Early Metallurgists," *American Antiquity* 36(1971), p.331.

37. J.W. Grossman, "An Ancient Gold Worker's Tool Kit: The Earliest Metal Technology in Peru," *Archaeology* 25(1972), pp.270-75; A.C. Paulsen, "Prehistoric Trade between South Coastal Ecuador and Other Parts of the Andes," 1972年第37回アメリカ考古学会年次集会で読みあげられた論文。

38. J. Charles Kelley and Carroll L. Riley, eds., *Pre-Columbian Contact within Nuclear America*, Southern Illinois University, Carbondale, Research Records of the University Museum, Mesoamerican Studies 4, 1969.

39. R.E. Longacre and Rene Millon, "Proto-Mixtec and Proto-Amuzgo-Mixtec Vocabularies: A Preliminary Cultural Analysis," *Anthropological Linguistics* 3 (1961), p.22.

40. Terence Kaufman, "El Proto-Tzeltal-Tzotzil: Fonología Comparada y Diccionario Reconstruido," *Universidad Nacional Autónoma de México, Centro de Estudios Mayas, Cuadernos* 5 (1972), p.118; Marcelo Alejandro, *Cartilla Huasteca con su Gramática, Diccionario y Varias Reglas para Aprender el Idioma*, Secretaría de Fomento, Mexico, 1899, pp.84, 88; H. de Charency, "Les Noms de Metaux chez Différents Peuples de la Nouvelle Espagne," *Congres International des Americanistes, Compte-Rendu, Paris 1890*, Paris, 1892, pp.539-41.

41. Lyle Campbell and T. Kaufman, "A Linguistic Look at the Olmecs," *American Antiquity* 41(1976), pp.80-89.

42. Read H. Putnam, "Were the Plates of Mormon of Tumbaga?" *Papers, 15th Annual Symposium on the Archaeology of the Scriptures* (Provo, Utah: BYU Extension Publications, 1964), pp.101-09. 現在では、Foundation for Ancient Research and Mormon Studies から入手可能。Reprint PUT-64 (P.O.Box 7113, University Station, Provo, UT 84602, USA).

43. David M. Pendergast, "Tumbaga Object from the Early Classic Period, Found at Altun Ha, British Honduras (Belize)," *Science* 168 (3 Apr. 1970), pp.116-18.

44. R.R. Caley and D.T. Easby, Jr., "New Evidence of Tin Smelting and the Use of Metallic Tin in Pre-Conquest Mexico," *35a Congreso Internacional de Americanistas, México, 1962, Actas y Memorias*, Vol.1, Mexico, 1964, p.511.

45. L. G. Alieva and A. M. Gasanova, "Problem of the Unknown Metal Kharsini in Medieval Written Sources," *Doklady Akademii Nauk Azerbaidzhanskoi SSR* 37, no.4(1981), pp.84-87; *Art and Archaeology Technical Abstracts* 19(1982), p.111 には、英文の抜粋あり。

46. Caley and Easby, pp.507-17.

47. P. T. Craddock, "Europe's Earliest Brass," *MASCA Journal* 1(December 1978)

48. Sigvald Linne, *Mexican Highland Cultures*, Ethnographical Museum of Sweden, Stockholm, Publication 7, (1942), p.142.

# 初等協会： 善をもたらす力

中央扶助協会会長  
ドゥワン・J・ヤング



今日世にあって、初等協会の子供たちは最も力強い影響力を持った人々と言えそうです。私たちは、彼らからたくさんを学ぶことができます。たとえば、彼らは会員でない友達に福音を紹介したり、不活発な人々が活発になって教会に来れるよう手助けをしたり、お互いを強め合ったりと積極的に努力しています。初等協会のテーマである「あなたの子らはみな主に教をうけ……」(イザヤ54：13)という聖句も、ほかの人々に教を分かち合えるよう、子供たちをしっかりと教指導くという私たちすべてに与えられた責任を強調しています。

この責任は、「主を求めよ」(イザヤ55：6参照)という新年のチャレンジが出されたときから、世界中の初等協会の教師、指導者が引き受けてきたものです。

私たちは、初等協会でも働くすべての人々に、毎年特別なチャレンジを与えることにしています。今年は、すべての教師、

指導者が天父とより親しい関係を築くというものです。子供たちが、主に従うという私たちの模範にならいたいと思えるように、私たちの生活を彼らに見てもらい、その中に主のみ力があることを知ってもらわなければなりません。私たちは、子供たちが自分たちは天父の子供であり、天父に愛されていることを理解するように、また何が起ころうとも天父の子供に変わりはなく、常に天父が見守ってくださるということを彼らが納得するように、教指導いていきたいと願っています。

子供というのは、いったん福音がどういうのかを理解すると、その知識を人々に分かち合いたいと思うようになるものです。私たちのもとには、初等協会でも学んだことを、不活発な教会員、また、教会員でない両親や友人たちに分かち合い、彼らの心を教会に向けさせたという子供たちの報告がいくつか届いています。

ペルーのキラバンパでは、ある男の子

がほかの教会の牧師に大変すばらしい模範を示したという話があります。この小さな末日聖徒の少年は、その牧師と会うたびにいつもモルモン経を読んでいました。ある日、牧師がその書物のどこにそんなに魅力があるのかと彼に尋ねました。少年はその書物には南アメリカの初期の住民の歴史がのっていることを話し、牧師にぜひ読んでみるよう勧めたのです。これがきっかけで、その牧師は宣教師のレッスンを受け、のちにバプテスマを受けました。

子供たちに聖典を読み、祈り、天父の戒めに忠実に従うように勧めることは、今年度の初等協会の聖餐会での発表の中でも特に強調していることです。子供たちに、「主を求め」た特別な経験をぜひ話させてください。新しく作られた『子どものときから』という歌は、若いうちに主をたずね求めることの大切さを子供たちに思い起こさせてくれるでしょう。ま

た「お父さまは生きています」(「子供の歌」)を歌うときに、子供たちは若きジョセフ・スミスがどのようにして主を求めたかを思い起こし、証することができるはずです。

聖餐会での発表では、「子供の歌」の中から、『神さまありがとう』『よく聞いて』『イエスさまのお話を読むとき』『ふかくわれをもとめよ』『モルモン経の物語』などが歌われることになっています。

さらに「子供の歌」の増補版の中からは、『いましめ守ろう』と『世界中の子供たち』の2曲が、そして「讃美歌」から『うるわしき朝よ』(138番)と『世をはなれ』(158番)が歌われる予定です。両親の皆さんにも、ぜひ子供と一緒にこれらの歌や讃美歌を口ずさんでいただきたいと思います。家庭の夕べや、ほかの活動の中にそれらの歌を取り入れてみてはどうでしょうか。子供たちが初等協会で習う歌を親と一緒に歌うことは、家族の絆を強めることになり、子供たちがクラスで習ってきた福音の教えを強調することにもなります。

初等協会の目的のひとつは、子供たちにクラスで教わる教えに従った生活をさせることです。

たとえば、10、11歳の男女のための「福音の実せん賞」プログラムは、自己修養プログラムと言えるでしょう。このプログラムは、個人、家族、教会、社会の4つの分野でそれぞれひとつずつ実行することを選ぶことにより、子供たちに福音の原則にそった生活をさせるものです。その中には、才能を伸ばしそれを人々のために使う、より良い友となる方法を見いだす、個人の系図表を完成するか日記をつける、最低1カ月間毎日聖典を読む、個人や家族またはクラスの奉仕活動を計画し実行するといったことが含まれています。4つの分野での計画を達成したら、

参加者は達成したことの証として賞を受けることができます。

初等協会の子供たちは、年4回の活動の日に福音を実践することができます。私たちは、年に4回行なわれるこの活動の日に大変大きな期待を寄せています。というのは、教会員でない子供たちやふだん日曜日の初等協会に出席していない子供たちでも、そのような活動には参加しやすいからです。

では、ベネズエラのカラカスで行なわれた活動の日のプログラムを少し紹介してみましょう。そこでは、150人の子供たちが伝統的な音楽を演奏し、踊りを披露しました。また各ワード部ごとに美術工芸品を展示し、子供たちはそれぞれにタレントや腕前を発表し合いました。

この活動の日のもうひとつのアイデアとして、「英雄たちの足跡をたどる」というものがあります。有名な人に関連した絵や写真、彫刻などを鑑賞するのです。また、子供たちには、クリスチャンらしいふさわしい英雄の模範が必要です。私たちの身近には、教会の立派な指導者たちの模範があります。自己を捨てて主のために尽くしてきた、そして今も尽くし続けている人々のすばらしい模範がたくさんあります。また私たちの父親や母親、監督、初等協会の教師や指導者など、毎日身近に接し、話すことのできる英雄もたくさんいます。

私は、タヒチでそのような英雄のひとりに出会いました。その人はメアリー・トゥアというパペエステキ部バマタイワード部の初等協会の会長をしている姉妹です。初等協会の登録人数が200人いるにもかかわらず、常時出席者がわずか50人という状態を知ってから、トゥア姉妹は、定例の活動にできるだけ多くの子供たちを参加させなければと思い始めたのです。彼女はワード部の書記と一緒に

登録者全員の名前を検査し、それからワード部区域内にまだ住んでいる子供たちを全員訪問しました。そして両親の承認を得てから、その子供たちを初等協会に出席するよう招待したのです。それから5カ月もたたないうちに、100人の子供たちが毎週初等協会に来るようになり、8歳を過ぎた子供が8人、バプテスマを受けました。私がパペエを訪問したとき、クラスは、やさしい、やる気十分の教師たちと、よく準備されたレッスンに耳を傾ける子供たちで一杯になっていました。ちょうどその日、トゥア姉妹はほかに3人の大切な「彼女の」子供たちを初等協会に迎えて、ことのほかうれしそうでした。彼女は以前、その子供たちと食料品店で出会い、初等協会に出席できるよう彼らの母親から許しを得ていたのです。子供たちからわき出る熱意が、ワード部のすべての会員に伝わっているようでした。

会長の召しを受けている私が最も喜びとすることは、世界中の子供たちと話ができることです。言葉が必ずしもわかるわけではありませんが、救い主や自分たちを教え導いてくれる人々に対する彼らの愛ははっきりと感じとることができます。私はこれまで訪問してきたいろいろな所で、初等協会の指導者や教師が子供たちに対して抱いている特別な愛を身をもって感じてきました。

初等協会の指導者、教師としての私たちの責任は非常に大切なものです。イザヤ書54章13節の「あなたの子らはみな主に教をうけ」という言葉には、もしそのようにすれば「あなたの子らは大いに栄える」という約束がついています。福音に従い、福音の原則を守り通すときにもたらされる平安を、子供たちが必ずや手にすることができるよう、心から願ってやみません。



再組織された高松ステーク部会長



関東地区7ステーク部合同「第4回セミナー・グランプリ'84」に集った青少年

## 高松ステーク部会長 再組織される 新ステーク部長に 田染洋一兄弟

去る10月28日に開かれた高松ステーク部大会において、新しいステーク部会長が再組織されました。

大会は七十人第一定員会会員ウイリアム・R・ブラッドフォード長老の管理のもとに開かれ、これまで地方部の時代、そしてステーク部になって約3年半の間、部長の責任を立派に果たしてこられた神崎武二郎兄弟から新たに田染洋一兄弟にシオンの鍵が引き継がれました。

四国（高松）は日本全体から言えば、人口、経済などの面で占める割合は3パーセント内外で、特有の地理的条件と交通の状況下にあります。しかしながら、主の業に励む者には、それらが障害とはならず、かえって強力な武器となっているようです。活動に費やす時間、力、エネルギーは、決して他に劣るところはありません。

新たな出発をしたステーク部会長は、四国をシオンとするため、全力を尽くして働く決意しております。

ステーク部長／田染洋一（写真中央）  
第一副ステーク部長／重富行雄（写真左）  
第二副ステーク部長／大村美貴男（写真右）  
幹部書記／荻田文男、書記／池内右典  
高等評議員／兵頭清隆、杉本昭文、阿部政

信、森泰三、末広盈詩、中桐重勝、宮本一政、国見重和（総合施設代表）、浜田茂  
七十人定員会先任会長／佐々日出雄  
祝福師／郡田堯、泉幸夫  
ユニットの管理者／高松ワード部監督（工藤徳幸）、松山ワード部監督（三樹敏憲）、徳島ワード部監督（石部建雄）、高知ワード部監督（藤田和雄）、丸亀支部

長（高嶋俊郎）、坂出支部長（末沢俊明）、南国支部長（近森久）、新居浜支部長（青葉太一）、今治支部長（中原博）、宇和島支部長（竹内一孝）、八幡浜支部長（宮崎昇三）

▶田染洋一ステーク部長：1950年生まれ。由紀子姉妹との間にひとりの子供がいる。教会ではこれまで副地方部長、副ステーク部長などを歴任している。建設会社勤務。

## 関東地区7ステーク部 合同「第4回セミナー・ グランプリ'84」開かる —青少年150名が参加—



去る11月23日（金）東京ステークセンターにおいて、関東地区7ステーク部合同の「第4回セミナー・グランプリ'84」が開かれました。前回までは9ステーク部合同で行なわれましたが、遠くから来る生徒に事故でもあつてはいけないと、今回は7ステーク部の合同となり、14歳から17歳の青少年150名が参加しました。

'84年度の学習は「旧約聖書」です。そのため大会のテーマとして「主はわが羊飼」を取りあげ、テーマ聖句に箴言3章5節、6節の「心をつくして主に信頼せよ……そうすれば、主はあなたの道をまっすくにされる」が選ばれました。

午前10時30分、地域教育部長である鈴木正三長老のお話に始まり、知的ゲーム、5

つのクラスに分かれてのセミナーと続き、その後交流を深めるためにディスカッションやポップダンスが行なわれました。

楽しく汗を流した後、メインの「聖句さがし大会」です。それまでワイワイと騒いでいた生徒たちも、「用意」の合図がかかるとピクリともしなくなりました。一年間の学習の集大成であり、これまでの成果がこの「聖句さがし大会」で問われるのです。真剣に取り組む青少年の顔はとても頼もしく見えました。

読みあげられる聖句に全霊を傾け、1秒差を競います。一次選抜、二次選抜と進み、最終選抜には10名が残ります。聖書をめぐる音のみが響くホールの中で、1位を獲得したのは、東京南ステーク部の石坂真理姉

# ローカルページ

妹、2位は町田ステーク部の<sup>しんぱ</sup>榎葉祐子姉妹、3位は同じく町田ステーク部の古賀陽一郎兄弟でした。

各自メダルと賞品を手にし、にっこりとほほえんでいました。聖句さがし大会中には決して見られない笑顔です。

最後の証会では、たくさんの兄弟姉妹が証をされました。「自分ひとりが苦しいわけではないことを知り、とても励まされました。」「セミナーは確かに主に導かれたプログラムです。」「主は確かに生きていらっしゃいます。このことを知ることができました。ほかには何もいりません」と涙ながらに証してくれた兄弟姉妹。彼らのすばらしい証に心が洗われる思いでした。(レポーター：セミナー・グランプリ'84実行委員長・宮本桂子)

## 実を結んだアロン神権定員会の伝道活動 (沖縄那覇ステーク部 小祿ワード部)

先頃、ウィリアム・R・ブラッドフォード長老とロバート・L・バックマン長老は、ステーク部内のアロン神権定員会を強めるように指導されました。しかし、ステーク部内のほとんどのワード部にはアロン神権者が6、7人しかおらず、定員会の会長ささえ満足に組織されていませんでした。

そのような現状を打開するために小祿ワード部の監督会は、アロン神権定員会の活動として、宣教師と共に伝道活動を行ない、定員会会員を増やすようにしてはどうかと提案しました。さっそくアロン神権者たちは監督の呼びかけに応じて綿密な計画を立ててくれました。その内容は、卓球大会を催し、教会の近所を回って中高校生に参加を呼びかけようというものです。若い女性たちには当日リフレッシュメントを担当してもらいました。

祈りの後に、6月23日に伝道卓球大会を開き、宣教師と監督はじめアロン神権者はペアを組んで卓球大会への参加を呼びかけに教会を出て行きました。最初はなかなか、どのペアも参加してくれる人を見つけることがむずかしく、教会にだれも見つけれずに戻ってくるペアもありましたが、若い女性たちの励ましにより、もう1度町へ出て行きました。

そして約3時間の努力のかいあって、15人の中高校生がこの卓球大会に参加してくれました。卓球大会の後にリフレッシュメントをほおぼり、なごやかな雰囲気の中で会は進みました。最後に宣教師によって、スライド「最初の示現」が上映されました。その日からレッスンを受けた求道者がきょうまでに4人バプテスマを受けて、当初5人しかいなかったアロン神権者も今では10人近くになっています。

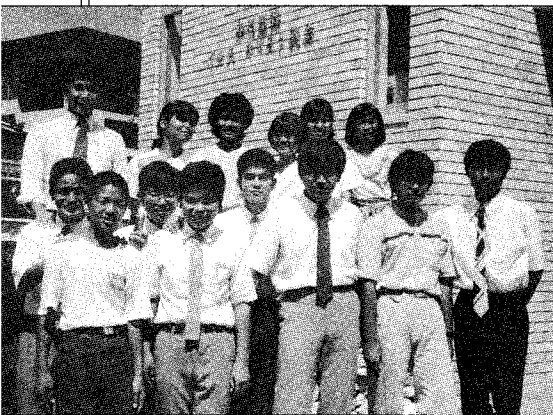
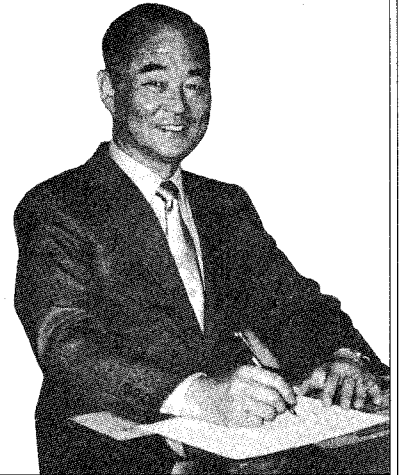
このような少ないアロン神権者が、監督会と一致協力し、伝道をみずからの手で行ない、豊かな実りを刈り取ったのを見て、アロン神権者の内に秘めた力のすばらしさを知ることができました。

この小祿ワード部の小さな定員会伝道活動が皆さまのアロン神権定員会活動の一助となりますようにお祈りします。(レポーター：沖縄那覇ステーク部高等評議員・仲井真盛准)

末日聖徒イエス・キリスト教会  
昭和29年2月11日に  
「宗教法人」として認証

## 戦後の教会の進展に思う —「包括宗教法人等管理者 研究協議会」に出席して—

日本・韓国地域管理本部総務部長  
今井 一男



小祿ワード部のアロン神権者と若い女性たち

2月11日は何の日ですか、と尋ねられたとき、皆さんは何と答えるでしょうか。「紀元節」これは戦前派の方、「建国記念日」これは戦後派の方ですが、もうひとつ末日聖徒にとって銘記しなければならない記念すべき事柄があります。

昭和22年、戦争の傷跡がまだ消えない頃、エドワード・クリソード伝道部長と数人の宣教師が、伝道を再開するために来日しました。そして伝道本部として港区南麻布に壊れた建物を買ひ、そこを拠点に伝道活動が始められました。(この場所に昭和55

年、東京神殿が建立されたのです)

昭和26年4月3日、日本では新しく「宗教法人法」が公布施行されました。当教会も法に従って正式な宗教法人となるべく、佐藤龍猪兄弟をはじめ何人かの兄弟たちによって準備を始め、昭和29年2月11日に文部大臣により正式に認証されました。いわば日本において当教会が法的に独立誕生した、記念すべき日であるわけです。

宗教法人法が施行されて3年後に認証を得ることができ、しかも日本国の建国記念日と同じ日(建国記念日としての制定は昭

## ローカルページ

和41年で、実施されたのは昭和42年2月11日から)であるということは、特に記念すべきことだと思います。当教会のために努力された先人の方々と、神の導きに深く感謝しております。

ところで私は、去る昭和59年7月26日、久しぶりに京都を訪れました。文化庁宗務課と日本宗教連盟が協力して行なう「包括宗教法人等管理者研究協議会」に出席するためでした。

今回の議題は「被包括法人における財務運営の課題と包括法人の指導」で、参加者は各宗派教団より200名ほどでした。皆熱心にメモをとったりテープに取めたりしておられました。

宗教者としての社会への貢献と、宗教法人が各自自主的かつ法に従った管理と運営を行なうことの大切さを学びました。神社庁に属する神社は8万社あるそうで、予算書、決算書、財務諸表の提出を義務づけ、それらのフォームを一定のものにするよう、検討中とのことです。特に土地、立木などは神社として風致環境の保全のために必要なものなので、それらの財産処分は神社本庁の認可を受けることを原則としているそうです。しかし8万の神社となると、規模の大小、役員数や財産の多少などの格差が大きすぎるので、指導は非常に困難です。そのため、同程度の神社を集めてグループ化し、指導を行なう意向のようです。

また、仏教系の真言宗智山派は3千の寺院を包括しており、地域差、財源の多寡、事業の種類、法人の財務運営に対する関心度、事務能力の差など、多くの格差と問題を抱えています。今後の方針としては地方を教区に分け、各教区ごとに教区宗務所を設け、教区長、副教区長、会計担当者、会計監査者などを選任し、指導監督を行なうようにするべく検討中で、そのために専門教師の育成、手引書の斡旋、帳票の同一フォームと共同印刷、相互研修制度の設定などを計画中とのことです。

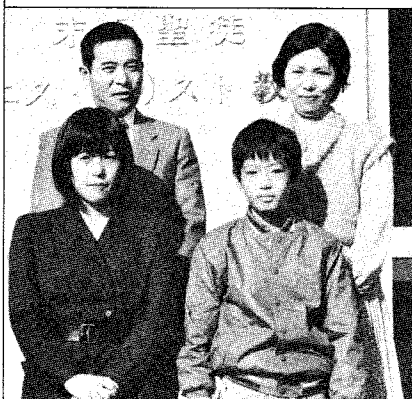
大きな宗教団体は多数の管理役員を任命し、公認会計士に監査を依頼しているところが約20パーセントありますが、単一の法人の中には3人以上の役員が同族の人によって占められ、決議公告運営がルーズなところもあるそうです。

他宗派と当教会を比較しますと、皆様よくご存じのように、当教会にはステーキ部、伝道部のもとにワード部、支部があり、3人の監督会または支部長会によって公平適切な運営が行なわれています。報告書類も共通の簡潔なフォームが用いられており、内部監査機構も備えられています。

当教会の事務は長い間麻布の伝道本部で取り扱われてきました。私もアンドラス伝道部長のとき以来、文化庁をはじめとする官庁、役所への手続きなど多くの事柄についてお手伝いする機会に恵まれてきました。現在は管理本部が設置され、その中に各部

門が組織されています。また教育、系図、神殿の各事業も進展し、充実してきています。また23のステーキ部と9つの伝道部に分割された日本各地に奉仕の輪を広げております。

戦後伝道が再開されて以来、当教会の今日の大きな発展を見ると、まさしく神のみ業であると感じられます。先日、戦後間もない頃伝道したある宣教師が再び日本を訪れましたが、教会の発展ぶりを見て大変驚いていました。この想像することもできないほどの大きな発展は、これからも続くことと確信しております。(いまい・かずお)



## 我が家の新しい歴史

—数多くの試練の後に得た改宗—

盛岡地方部八戸支部  
(海上自衛隊航空機関士)

藤島 廣司

**私**は10年ほど前に1度だけ宣教師の訪問を受けたことがありました。今にして思えば、その頃はまだ私が神様やイエス・キリスト様を信じる準備ができていないことを、神様はご存じだったのだと思います。そのときの宣教師はただ1度きりの訪問でした。

私は毎日のように飛行機に乗る仕事をしています。以前は若さにまかせて、信ずるのは自分だけというような生活でした。ところが私は8年前に大きな航空機事故に遭遇し、九死に一生を得ました。新聞には「奇跡の生還」と書かれるほどの大事故で、機体は大破し、炎上しましたが、当の私はかすり傷ひとつありませんでした。

その2年後は飛行中に落雷があり、機体の翼端タンクが爆発するという事故がありました。しかし大事には至らず、すぐに火が消えて無事着陸することができました。

それからさらに2年を経過した頃、今度は妻が大病を患いました。数カ月も入院生活を送り、3度の大手術にも妻は耐えてく

れました。しかしその間、私の方はと言えば時間的にも不規則な仕事でしたので、それに加えてふたりの子供の食事や洗濯と、仕事と家事で身も心も本当にへとへとに疲れ果てる毎日でした。子供たちも私も、病気の妻を心配し、また家の中がなかなか思い通りにならないことから、次第に不きげんになっていきました。

その妻もすっかり元気になり、通常の家事ができるまでに快復し、ホッとしていた頃でした。この苦しくつらかった3年ほどの間に私は様々なことを考えるようになっていました。

もし私と妻が無事でなかったら、この子供たちはどうなっていたらだろうか。どうして私の家庭に、あのように命にかかわるような災難が続いたのだろうか。にもかかわらず、無事でいられたのはなぜだろうか。

福音も何も知らない私でしたが、「神様しかいない。神様が助けてくださったのだ」と感じました。それなのにこうして平々凡々とした毎日を送っていて良いものだろ



うかと、私も妻も心が満たされないような毎日でした。

1984年の5月のある日、突然ふたりの宣教師が我が家を訪れました。「あなたは、生きている目的は何だと思えますか」と聞かれました。10年ほど前の私たちとは違っていました。そのときがきていたのです。答えにはとても困りましたが、「家族を大切に、子供たちを育てることです」と答えました。「私たちが家庭は本当に大切だとします。この本の中には、人生の目的や、神様のことがたくさん書かれてあります。よろしかったら、どうぞ読んでください」と上手な日本語で渡されたのがモルモン経だったのです。

宣教師が帰られた後でモルモン経を読んでいて、思わず妻や子供たちに大声で言いました。「アメリカでイエス・キリストに会われた人がいたんだ。」興味は尽きず、その夜のうちにだいたい読み進んでいました。

数日後、再度訪問された宣教師が私たち家族に福音を学ぶことを勧めてくださいました。私も妻も子供も、それを長い間待っていたかのように、何の障害もなく本当に素直な気持ちで学び始めることができました。

レッスンを続けていくうちに、「知恵の言葉」があることを知りました。神様は私にまた大きな試練を与えられたと思い、ショックでした。酒は問題ありませんでしたが、タバコはこれまでに何度もやめようとしてやめることができなかったものでした。しかし、福音を受け入れたい気持ちが勝っていました。宣教師が帰ったその夜から、やめようと心に決め祈りました。本当に不思議でした。それ以後「知恵の言葉」を完全に守れるようになったのです。神様の助けがあることは、本当だったのです。私は心から感謝し、神様に祈りました。

これまでのことを思い出してみますと、神様がいろいろな試練を与えてくださったのは、家族が強い絆で結ばれるためでした。私と妻が生死の境から抜け出したのは、神様が私たち家族に福音を聞かせるためであったのだと、心から証できます。

私は祈ることで、心に安らぎと力強いものを感じております。神様は確かに生きていらっしゃいます。

1984年7月に、私たち家族は全員バプテスマを受けました。家族そろって改宗できたことを神様に感謝しております。私たち家族はこれからこの真実の教会で、主の教会員として、我が家の新しい歴史を築いていきます。(ふじしま・ひろし 1942年生まれ、八戸支部書記補助)



日々の恵み

## 怒りっぽい性格を直すために

東京北ステーク部  
川越ワード部  
岡田 あや子

**私**は自分の怒りっぽい性格に悩んでいました。毎朝、「子供を感情的に怒らないで、もっと忍耐できますように」と、いくら祈ってもさっぱり効果がありません。バプテスマを受けて12年、霊的に少しずつ成長してきたとは思っていました。でも私の霊の成長は、怒りっぽさという性格を前にして、もうそこでストップしているような気がしたのです。

私は毎月毎月神殿に入りました。奉仕の機会を得るためだけでなく、自分の霊性のために、つまり怒りっぽい性格を直したいという切なる望みで参入してきたのです。しかしいくら心をつくして神殿に入り、一生懸命祈ってみても自分のその弱い性格は、ちっとも変わりませんでした。私は次第に心が沈み、落ち込んでいきました。もうだめ。いくら一生懸命祈ってみてもどうにもならない。ああ性格を直せない、変えられない。私はだんだんそのことだけに心をとられていきました。

そんな苦しさの中で、神殿に入り続けました。そしていつものようにそのことを祈っているときに、急にひとつの強い気持ちがわき起こり、祈りの言葉をささげりました。それは、良いことをたくさん行なって

良い性質を伸ばしていけば悪い性質は次第に隠れていき、なくなっていくのではないかと、という気持ちでした。つまり弱点や欠点に心を奪われすぎると、かえって落ち込み、よくない。それよりも良いことをひとつでも多く行ない、戒めを守っていけば悪いことを行ないにくくなるのではないかと思いました。

私の気性の激しさが自分の個性であり、怒りっぽい性格は、その気性の激しさから来ていると思いました。でも考え方を変えれば、その激しさがあるからこそ、その激しさで人を愛し、神様を強く求めることもできるのです。また福音を教えるレッスンでも、証を述べるときでも、激しく心が燃えることが多かったのではないかと、そう思いました。私は今まで自分の気性の激しさが、好きではありませんでした。でも神様がおっしゃるように、その個性を良い方向へ発揮させるときに確かに喜びを得ることができると思いました。私は、これらのことをすべて神殿の中で受け、その言葉を忘れないうちに、帰りの電車の中で紙に書きとめていました。

それからと言うもの、ひとつでも多く良いことを、という気持ちで過ごし、心を込めて祈りと聖典勉強に努め、そして教会の召しを、たとえいつ解任されても悔いの残らないようにと一生懸命力をつくして努力しました。また不精な私が、最も守りにくい、そして引き延ばしていた戒めである糸図を再び始めました。実に7、8年ぶりのことでした。そうしているうちに神殿の中だけでなく、家にいるときでもみたまをひんぱんに感じられるようになったのです。

さて、私の怒りっぽい性格はどうなったと思えますか。前よりもずっとずっと怒らずにすむようになったのです。みたまを取り入れた生活以上に価値のある真の幸福を感じる生活がほかにあるでしょうか。神様の助けがあったことを心から感謝しています。(おかだ・あやこ 川越ワード部日曜学校教師)

### 訂正

1月号100ページ左段下から7行目の「6日間」は「5年間」に、120ページ沖繩那覇ステーク部長の「長嶺顕正」は「長嶺顕正」の誤りです。おわびして訂正します。

日々<sup>の</sup>恵<sup>み</sup>

## 6人目の赤子の 病気に学んで

北陸地方部金沢支部  
北陸地方部長  
藤原 茂



それは約2年前の出来事です。四男<sup>かず</sup>の法佳<sup>のり</sup>が8月7日に誕生しました。6人目の子供なので、経済的、肉体的に少し大変になりましたが、何とかやっていると自信もあり、さほど心配はしていませんでした。

ところが1カ月が過ぎる頃、軽い咳をするようになりました。最初は、母乳でも胸につかえたのだらうぐらいに軽く考えていました。しかしたびたび繰り返すので変だと思い、また生まれて間もない子供は母体から免疫をもらっているはずだし、この子は何か困難な病気でもわずらっているのではないかと思い、近所の開業医へ見せに行きました。そこでは単なる風邪だから心配いらないと言われ、一応安心していました。

ところがある土曜日の午後、妻から頼まれて近くのスーパーマーケットへ買い物に行ったときのことで。私は品物を確かめるため、家に電話をしました。すると妻が泣き声で「法佳の様子がおかしい。体温が急に下がって弱々しい咳をするだけだ。そのうえ、顔が紫色になっている」と言うではありませんか。

私は買い物を途中でやめ、急いで日赤へ連れて行きました。土曜日の夕方ということで、担当の医師は不在で、当直の先生が手当てをしてくださいました。

医師は子供を見るなりすぐ酸素マスクをあてて、未熟児が入る保育器の中へ入れました。その間に担当の先生が駆けつけて診察をしてくださいました。しばらくして、特別に話があると云われ、「明日1日が山です。生命を維持できるかどうかは自信がありません。あとはこの子の生命力だけです」と申し渡されました。

妻は目に涙を一杯ためて、保育器の方を

見つめていました。病名ははっきりしませんが、何でも小児性百日咳らしいとのことでした。

私たちにはどうすることもできず、いったん家に戻って家族で輪になって祈ることにしました。灌油の儀式はすでに施していたので、祈りにより家族の気持ちを神様に伝え、み手にゆだねようと決心しました。

祈りの輪を作り、長男・武宣(8歳)、長女・倫美(6歳)、次男・崇(5歳)、三男・篤(3歳)、そして妻、私の順に祈りを捧げました。私は祈っているときみたまを感じ、涙がとめどなく流れました。「この子を育てる特権をお与えください。許されるならば、夫婦で協力して立派な神権者に育て、現世での務めを果たせるようにします」と必死になって祈りました。そうすると心の中に「この子の命は助かる。安心なさい」という何とも知れぬ力強い温かいものを感じました。妻もあとで、次のように証をしました。「祈っていると、静かな声が聞こえました。『しっかりなさい。あなたはこの子の母親ではないか』と。

こうしてその夜は過ぎ、翌日の安息日、私は子供たちを連れて教会に出席しました。妻は病院から連絡があるということで家で留守番をしました。

私は信仰が弱いためか、みたまの慰めを得たにもかかわらず、万一のことがあってこの子が神のみもとへ召されはしないかと、不安でなりません。何かあれば病院から自宅へ、そして教会へと電話が入る手はずになっていました。私は集会の間中、聞こえてくる電話のベルの音に心臓の鼓動を抑えることができませんでした。その日は生涯で最も長い一日になりました。

幸いにも、みたまの告げられた通り、法佳は無事家族の元へ戻ってきました。とてもうれしく思いました。

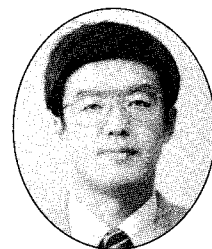
しかし喜びはつかの間、3カ月検診を受けてわかったことは、咳のために脳に酸素が十分行き渡らず、運動障害が起きる可能性があり、手足の動きが不自然で、機能回復訓練を施す必要があるということだったのです。

それ以来、新たな苦労の日々が続くことになりました。しかし、命を助けられたうれしさから、さほど苦にはなりません。家族でたびたび祈り、整肢学園へ通いましたが、何もわからない乳幼児にリハビリを施すことは、はた目で見ているとつらいことでした。それを行なう妻には心労が多かったことでしょう。筆舌には尽くせない苦しみがあったことと思います。

それが約1年続き、1歳の誕生日を前に訓練の甲斐あって法佳は快復しました。この訓練に耐えてくれた妻に、心からの感謝の念で一杯です。結婚して以来、私たちが遭遇した大きな試練や神のみ手を感じるような特別な出来事はたびたびありましたが、中でも今回の法佳を通して得られた証は大きなものがありました。この経験により家族は強められ、前にも増して一致が見られるようになりました。神様は生きておられ、私たちを幸福へと導いてくださることを証します。(ふじわら・しげる 1949年生まれ)

日々<sup>の</sup>恵<sup>み</sup>

## 幼な子を思う両親のごとく



北陸地方部  
武生支部  
北川 邦茂

秋の運動会、すばらしい秋空のもと、子供たちが青空に向かって、いっせいに飛び出します。

私には3歳の娘がいますが、彼女は駆けっこが大好きで、運動会となると出場した

## ローカルページ

くていつもうずうずしています。

かりに、皆さんにもそれくらいの年齢の子供があるとして考えてみてください。皆さんは、夢中で駆けるわが子を見て、何を思われるでしょうか。「一番になったらジュースを買ってやる」とか、「ビリだったらゲンコツだ」とは、さらさら思わないでしょう。一生懸命走る我が子に、ただ「カー頑張れ、途中でへこたれるな」と言いたいのではないのでしょうか。そして、1位になることよりも、一生懸命走る姿を見るだけで、幸福なのではないのでしょうか。

私は神権会の下調べをしながら、こんなことを考えていました。

そのときです。突然、何か熱いものが体内にわき上がったように感じました。

そうです。神様は、私たち一人一人を愛され、期待され、そして応援されているのです。あたかも私たちが幼い我が子の走る姿を見守るように。(神様が私たちを大人と見てくださるのは、私たちが神様のような完全な人格を持ったときだと私は思います) 神様は、決して冷淡に私たちを見つめ、私たちの欠点を記録し、私たちを試しておられるわけではありません。神様は、私たち

一人一人に非常に大きな期待を寄せておられ、大きな声で「頑張れ」と応援してください。神様は、「私の声が聞こえるよう、チャンネルを私に合わせなさい」と言っておられます。正しい祈りによって神様と交信できるように望んでおられるのです。

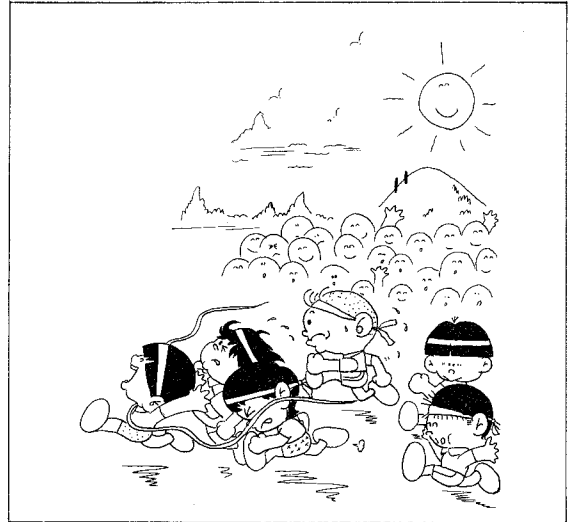
私はこのことを、心で強く感じることができました。神様は、幼な子を見守る両親のように、私たち一人一人を見つめ、そして大いに期待されています。私たちに与えられた自由意志、才能をいかに使うか、非常に楽しみにされているのです。そして、私たちが才能と能力を最大限に使って、考え、悩み、祈るとき、神様は必ず答えを与えてくださるのです。

今、私の生活の基盤は、信仰にあります。9年間もお休み会員であった私を立ち直らせ、赦し、成長させてくださる神様と、近藤支部長に、心からお礼を言いたいと思います。

末日聖徒の皆さん、神様は愛を持ち、私たち一人一人に大きな関心を寄せておられます。さあ、前進しましょう。(きたがわ・くにしげ 1954年生まれ、武生支部長老定員委員会会長)

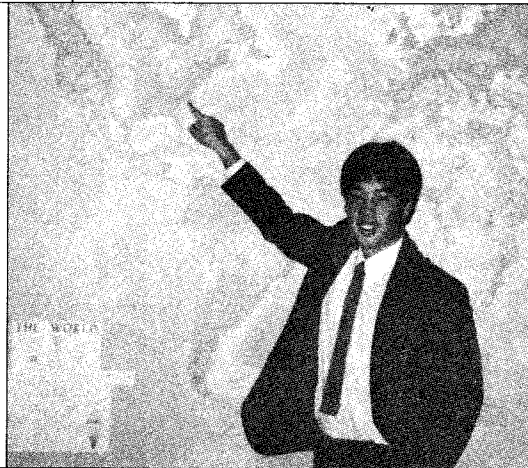
### お願い

「日々の恵み」のコーナーに、日常生活の中で得ている末日聖徒としての喜びや証を短くまとめて「聖徒の道」編集室へどしどしお寄せください。



## アメリカ南部の 伝道地に召されて

米国ノース・カロ  
ライナ・ローリー  
伝道部専任宣教師  
津端 穰治



'83年の10月以来、ここノース・カロライナ・ローリー伝道部にて専任宣教師として働く機会に恵まれていることを心より感謝しています。ノース・カロライナはアメリカ南部にあり、湿度の高い、またとても暖かい所です。アメリカ南部はパイプル・ベルトとも呼ばれており、人々が聖書に関して多くの知識を持ち、バプテスト

教会の力のとても強いところです。そのような場所で、白人、黒人、そしてインディアンなどの人々にこの回復された福音を宣べ伝えることができるのは、私にとって大きな祝福です。

私のノース・カロライナでのふたつめの任地は、ペンブロックという人口3,000人前後の小さなアメリカインディアンの町で

した。まわりにはペンブロックのような小さな町が3つほどあり、私たちは、このペンブロックを含めた4つの町を受け持つことになりました。

伝道に出て5カ月目、英語の方も少々進歩し、毎日が楽しくなってくる頃でしたが、私と同僚は、この小さな町を見たとき少しがっかりし、また、ひとつの町から次の町まで15キロから20キロという地域の広さにびっくりしてしまいました。5日もあれば町の中心に住む人々すべてを訪問できるようなこの町で、どのようにしたら成功を取られるか、私と同僚は考えました。そしてとりあえず私たちは、毎日少しずつ、最も伝道活動の効果的な夜にトラクト(伝道用のちらしや小冊子)を配りながら、昼間は会員訪問という生活をしました。

1カ月目はこれといって成功はありませんでしたが、2カ月目に状況は少し変わってきました。毎日毎日会員を訪問することによって、一人一人の会員ととても親しくな

ることができました。そして彼らは、彼らの友人や親類を私たちに紹介してくれたのです。そして私たちは、会員の家でその友人を教えるという、願ってもない形を持っていくことができました。会員の家で家庭集会を持つとき、霊の力はとても強く、レッスンが信じられないほどうまく進みました。また、不活発会員の家で家庭の夕べを開くなど、お休み会員の活発化のお手伝いもできました。ある不活発会員の家族が活発になったときには、ひとりの求道者にバプテスマを施したときと同じような喜びがありました。このようにして、ペンブロックでの伝道は、思ってもみなかったほど順調に進みました。

ペンブロックに来て3カ月目の終わり、会員の助けを借りて改宗したひとりの兄弟が日曜学校の教師に召され、10歳前後の子供たちのクラスを教えることになりました。私と同僚は、自分のことのようにうれしくなり、会員を通して彼に会わせてくれた神様に心よりの感謝の気持ちで一杯になりました。2カ月前までは求道者のクラスで回復された福音を学んでいたのが、今では子供たちの前に立ち、その回復された福音を教え、証しているのです。レッスンを終えたあと彼は、子供はうるさくてかなわんと言いつつも、彼の顔は満足のいった、とても幸せそうなものでした。

ペンブロックを出て3カ月、私はまた小さな町ワシントンで働いています。会員40人前後（半分は子供）の小さな支部で、日曜学校の教師、若い男性会長会、そして専任宣教師として会員の助けを借りながら頑張っています。



ノース・カロライナで伝道する津端長老

私は伝道を通して証を強め、知識を増すことができました。また回復された福音への感謝の念を培うこともできました。しかし私がこの伝道を通して最も教わったことは、愛することだと思います。小さな町での会員の宣教師に対する愛は、とても深いものでした。彼らの愛に何度助けられ、また励まされたかわかりません。そして今、彼らの模範に従い、すべての人を愛せるように努力しています。偉大な宣教師の中のひとり、パウロはこのように言いました。

「たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鏡鉢と同じである。

たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識に通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。

愛はいつまでも絶えることがない。」（1コリント13：1-2、8）

私は、ノース・カロライナの人々を心より愛しております。そして、アメリカ南部が霊的に起きあがる日を目指して頑張りたいと思っています。（つばた・じょうじ 22歳、東京ステークス部ひばりヶ丘ワード部出身。米国に留学して3年目に宣教師に召された）

## 「自分の一族の中から 神様の教えを 宣べ伝える 人が……」



大阪伝道部  
専任宣教師  
吉岡 知恵子

**私**の家族は、祖父の代からプロテスタントです。父やおばから聞くところによると、祖父は非常に熱心なクリスチャンで、自分の一をきちんと払い、祈りと聖書の勉強を欠かさずに行っていました。あるとき、線路に誤って入ってきた子供た

ちを救うためにみずから線路に飛び込み、子供たちを救うことができましたが、自分の腕を失うという出来事がありました。そのような祖父を誇りに思っています。しかし残念なことに、祖父はこの地上で末日聖徒イエス・キリスト教会を知ることはできませんでした。もしこの真実の福音を聞いていたら、必ず受け入れたと確信しています。今は霊界で、私が祖父のために身代わりのバプテスマの準備をするのを待っていると感じます。

私は小さな頃、母の病気のために、しばらくの間京都のおばに育てられました。短い期間でしたが、私を自分の子供のように愛し、大切に育ててくれました。そのおばが、私が伝道に出ようと決心し、会社もやめたときに、大変な病気になりました。私は手術後の約1カ月間、看病に行くことになりました。おばは高齢で、手術に長い時間がかかったのでとても不安でしたが、経過はすこぶるよく、めきめきと元気になっていきました。

私はこの期間を、神様が与えてくださった特別なものだと感じています。私がおばに付き添っている間、おばはいろいろな話をしてくれました。おばは小さな頃からプロテスタント教会に行っていますが、その様子は昔とずいぶん変わってしまったそうです。牧師さんたちもお酒を飲み、おばは自分が救われているとは少しも感じないと言います。そのような状況の中で多くのまじめな信者の方々が教会を去っていったと言われました。

私はおばに、末日聖徒イエス・キリスト教会を紹介しました。バプテスマや按手のこと、たくさん若い人たちが宣教師として頑張っていることを話すと、おばは顔を輝かせて聞いてくれました。祖父が信仰深かったことから、自分の一族の中から神様の教えを宣べ伝える人が必ず現われる、おばはそう信じていました。そして、「それがおまえだったんだね」と言われたとき、自分の使命がとても大きなものであると改めて感じました。

真実を知りたいと願っている正しい人はたくさんいます。彼らは本当の教会を知る機会を、そして救われるのを待っています。ですから私たちは、そのような人々を早く

見いださなければなりません。

私はモーセのように口も重く、舌も重い者ですが、宣教師として働くことの意味の深さを知った今、やらなければならない宿命のようなものを感じています。神様は本当に私たちを愛しておられ、私たちが努力するときに、必ず助けを与えてくださいます。真実を知りたいと願っている人々に、私たちの中にある聖なる光を示し、神様の使いとして、真理を伝えていきましょう。

伝道に出ることを許してくれた愛する両親に、そしてすばらしい模範を示してくださったJMTCの同僚たちに、心から感謝しています。(よしおか・ちえこ 1962年生まれ、岡山ステーク部米子ワード部出身)

## 主の伝道の業

一落胆から  
歓喜へ一



高松ステーク部  
岡山ワード部  
元東京北伝道部専任宣教師  
中島 久喜

**私**の伝道期間のうち、最初の14カ月間はこれといった成果を目にすることもなく、たくさんの人々の強い拒絶にあって失望していました。18カ月間もこういう状態が続くのかと思うと、伝道をやめて帰ろうかと思いましたが、しかし、18カ月間神様の使いとして働くことと誓約した以上、それは実行しなければなりません。また、その間の時間は私のものではなく、神様のものでした。

膨大な数の家を訪問しましたが成功はほとんどなく、14カ月の週の家集の平均数は3.6件で、一日中歩きまわったことも珍しくありませんでした。

そして、7月2日に日立に転勤となりました。このとき、「あと4カ月の辛抱だ」と思いましたが、その一方で不安はますます大きくなっていきました。伝道はつらかったという気持ちだけを持って帰らなければならないとしたら、私の伝道は一体何だった

のでしょうか。それはきっと、これからの教会員としての生活を情熱のないがっかりしたものにしてしまうに違いないと思いました。

それまでも、働きに対して祝福がありませんように、バプテスマが見られますようにと祈ってきましたが、このときから祈りは本当に切実なものになってきました。夜みんなが眠った後、声を出して祈りました。神様の栄光のために、また日立にシオンを築くためにどうぞ私の心を強くしてください。また、伝道は本当によかったと言って帰ることができますようにと祈りました。

神様は私にとって必要な宣教師のいる支部へ導かれました。同僚のマッカーサー長老は積極的に、とても元気な明るい人でした。彼からどのようにして求道者を見つけるかを学び取りました。手帳とコールバックと元気です。日立に来て1、2週間は、私は否定的で信仰も弱く、元気ではありませんでした。マッカーサー長老との最初の同僚計画会で、家庭集会の目標数を15と聞いて、そんなバカな、できっこないさど心の中で思いました。しかし、少しずつ成功を目にするようになって、私の心は徐々に変わっていきました。

信仰はだんだん大きくなってきました。ドアの前に立っても、どうせ聞いてくれないだろうと思っていたのが、いつの間にか必ず聞いてくれると思い始めました。1度訪問したときの状態を手帳に書き込み、それを見ながら2度3度と訪問するようになりました。

そうしているうちに人々の心は変わってきて、紹介レッスンをたくさんできるようになり、標準レッスンにも進めるようになりました。同僚が転任する前の週には24の

家庭集会ができ、求道者は27人になりました。

彼の転任を聞いたときすごく心配しました。彼は後輩でしたが、ほとんど彼がリードしてくれていたからです。私は紹介レッスンのフリップチャートがありませんでした。自分のオリジナルのフリップチャートを作り、覚悟を決めて神様に祈りました。どうぞ神様の業の発展のために求道者を導けるように私を助けてくださいと。

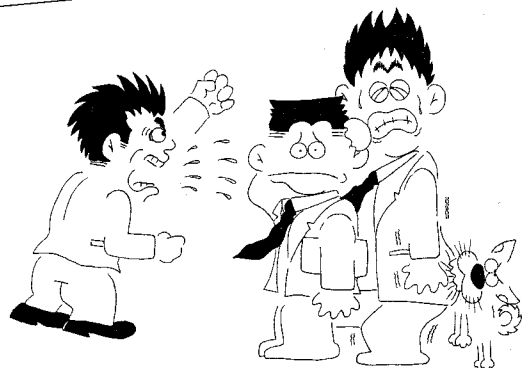
新しい同僚と伝道を始め、その週に35の家庭集会ができました。主に対する感謝で胸が一杯でした。ほとんどすべての家で紹介レッスンを行ない、その家を祝福する祈りを捧げることができたのです。

15の家庭集会なんて夢だと思っていたのが、9月の終わりには43の家庭集会ができました。求道者も35人を越え、紹介レッスンを入れると60人を越えました。

今度はこの求道者をどのようにしてバプテスマに導くかという問題になりました。同僚のメリル長老からアイコンタクト(目を見て話すこと)の大切さとチャレンジを臆することなく与えることによって求道者を成長させる方法を学びました。私の最も弱い部分でした。

それをレッスンに取り入れていったときに求道者はよく成長しました。求道者が自分で努力するときに、自分自身でみたまを感じ、みたまの助けを受けることができるからです。チャレンジは心と心のぶつかり合いです。最初、恐れが少しありましたが、心を割って話すとき、求道者から本音が聞け、それに対して証をもってチャレンジすることができました。目を見てバプテスマチャレンジをするのが大好きになりました。

たしか「みたま」に導かれたと思っただけど……



東京北ステーク部豊島ワード部  
渡辺 哲男(24歳)  
(6ページのカットも)

## ローカルページ

日立での4カ月間は、何人かの改宗者を得て、神様に対する感謝と喜びに満たされた日々となりました。

人々は自分の自由意志で福音を拒んでいるから仕方ないと14カ月間思ってきましたが、そうではありません。信仰を持って愛を示し、偏見を取り去るとき（それは私たちの責任です）、もっと多くの人は改宗し

ます。なぜならすべての人は善悪をわきまえる力を持っているからです。（モロナイ7：16-19参照）そして、この福音は善なるものであり、真理だからです。

私は心から伝道はよかったとすることができます。そして、私の心は本当に喜びに満たされています。「私たちほど喜ばねばならぬわけのある者はない。私は喜びが溢れ

て私の神に誇りを感じるようになった。」（アルマ26：35）確かに神様は生きておられ、私たちの祈りに答えてくださいます。伝道で私を待っていてくれた前世の友に会うことができたことを感謝しています。イエスがキリストであり、私たちの贖い主であることを証します。（なかじま・ひさよし 1960年生まれ、松山ワード部日曜学校教師）

JMTC  
TWTC

第65期生  
第66期生  
第67期生



- （写真上）昨年10月に召された日本人宣教師15名。
- （左下）11月に召された21名。●（右下）12月に召された6名。



### 渋谷ブックセンターから



扶助協会バッジ  
（12金・ピン式）800円



セゴ百合ブローチ  
（12金・ピン式）2,000円

●CHARITY NEVER FAILETH（愛はとこしえに絶ゆることなし）と金文字でデザインされた扶助協会のバッジとセゴ百合ブローチは、ホームメイキング大会の賞品として、そのほか扶助協会に功績のあった方々への贈呈品としても最適です。

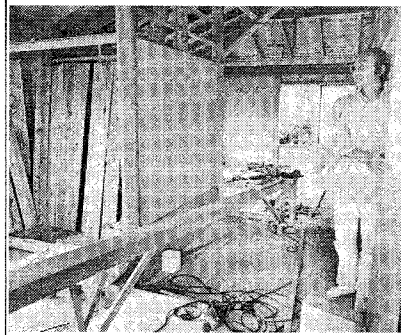
### 編集室から

●本誌へのご意見、ご希望をお聞かせください。また心に残った記事の感想文をお寄

せください。読者のひろばで紹介します。そのほか各地の話題や行事、日々の信仰生活から得ている証、カットなどをお送りください。4月号掲載分の締切は2月8日（必着）です。投稿には必ず連絡先（電話番号）を記入して下さい。

●あて先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室。☎03-440-2351（代）  
☎03-444-5264（聖徒の道夜間専用。ただし職員が残業中のときのみ通じます）

東京北ステキ部高等評議員である一級建築士の高橋修一兄弟(37歳)が創設した「住まい塾」なるものが朝日、読売、東京新聞、そのほか建築関係の雑誌などに取りあげられ、話題となっている。表面だけを化粧した住宅がひこるのを憂い、質の高い、豊かな空間を、それもローコストで供給しようと考え、中間の一級建築士ばかり12人で「住まい塾」を結成した。草の根の住宅運動である。高橋兄弟の職業人としての意識の中には、才能を伸ばし、人のために役立てようとの末日聖徒としての信仰が根底にある。



## 才能を人のために —人生のめぐり合いと 私の転機—



東京北ステキ部豊島ワード部  
高橋 修一(建築家)

朝日新聞'84.10.2付

## 質向上めざし 実際に建築も

建築家に主婦ら共鳴

高橋修一と高橋伸二兄弟が中心となる「住まい塾」は、草の根の住宅運動である。草の根の住宅運動とは、三軒又三軒と、二軒又二軒と、一軒又一軒と、というように、自ら家を新築してゆく。その参加者の中には、主婦も数多く参加している。住まい塾の活動は、建築士の資格もなくても、建築士の手がけで建築中の住宅に、高橋修一と高橋伸二兄弟が、五月になり、実際に建築も行うことにした。高橋伸二は、五月になり、実際に建築も行うことにした。高橋伸二は、五月になり、実際に建築も行うことにした。高橋伸二は、五月になり、実際に建築も行うことにした。

**「才能は自分のためにのみ与えられているのではない。人のためにそれをを使うよう望まれて与えられている。」**  
私たちは、植物の生長から学べるように、才能を、機を逸することなく伸ばせるときに伸ばすよう求められている。教会においても私たちはしばしばそのことを教えられる。怠惰は与えられているものを生かさないという意味で大きな罪のひとつに数えられるからである。

あの激しかった大学紛争のさなか、大学に残っていた私は人に教える前に己に教えるなければならないことを身にしみ感じ、教員の道を捨てた。第一の転機であった。

白井晟一とめぐり会えて私は幸運であった。いかに自分が未熟であるか、いかに鍛練が足りないかを人間と技量の両面からいよというほど思い知らされて、それまでコンペティションに何度か入賞してうめぼれていた私は、たたきのめされる思いであった。我が国の建築の世界ではもう唯一と言っている徒弟制度的体質の中で、経済的困窮と1日数時間の睡眠、そして家族を犠牲にしてしまっていることへの複雑な思いに私は立ちと疲れを覚えていた。

社会的地位と名誉と金銭に恵まれる人はそうめずらしくない。だが究極それらは人に充実感を与え得ないことも知った。文字通り空しいものであることを師は私に身を

もって教えてくれた。師は、こともあらうにみづから設計した銀行本店の正面入口頂部にラテン語で「黄金のみが輝くものではない」と刻んだ。師の思いの表出であった。

目のキラキラとかがやくふたりの、いや、数年にわたる何組かの宣教師たちの継続した訪問がなかったなら、私の信仰への芽ばえは失われていたに違いないと思う。

長老たちの目は輝いていた。私が知っているどんな金持ちよりもふたりは充実していた。あの澄んだ目によって私の第二の転機が訪れた。冒頭にあげた菊地長老の言葉を遠くで聞いていて、私はハッとさせられた。自分の才能、自分の個性、自分の生涯と、自分のことばかり考えていた私は、以来何をもちて人々に仕えることができるかを考え始めた。それはとりもなおさず、私がこの世に生を受けた理由のひとつの解答を見いだすことでもあった。どのような境遇にあろうとも、人にはやはりそれぞれに使命が与えられているように思う。

何もしないで生きられるなら、これほど楽なことはないという人もいるが、迷いの中で無為に過ごすことほどつらいことはない。それは神の目にかなわぬことであるからに違いないと思う。

あと1歩が続かない……。この壁さえつき抜ければ……。しかし、神はそう簡単には手伝ってくださらなかった。住まい塾の

構想をあたためて5年、具体的準備に取りかかっていたに5年、行きづまって、だが多くの人々の声援があつて、なおまた行きづまって、ここで倒れては信頼してついで来た皆に申しわけない……。そんな思いに明け暮れていたある日、早朝4時頃であったと思う。

「そのような生活を続けてはならない!」

私には胸に直角に打ち込まれた言葉、と言うよりも、何かエネルギーのかたまりのように思えたのだが、ハッとしてふとんの上にとび起きたほどに明瞭な声で私の胸に響いたのだった。だれかが近くでそう叫んだようにも思えたので、部屋を出てみたがだれもいなかった。夢というにはあまりに明瞭すぎて、またあの明瞭な響きは確かに



ユーザー会員(消費者)を対象に開かれたセミナー。右前方に高橋修一兄弟。

## ローカルページ

夢とは呼べぬものであった。

以来、「豊かな住宅を、訓練を経た人々の手で、しかもローコストで！」とうたって安易なお化粧住宅の潮流に抗する運動が具体的にスタートした。1983年の9月、各新

聞社の支援によって順調なスタートが切れ、すでに500人を越える相談者を迎えた。この経験は、私の建築家としての大きな転向でもあったし、また自分に与えられている使命の自覚でもあった。菊地長老の言葉

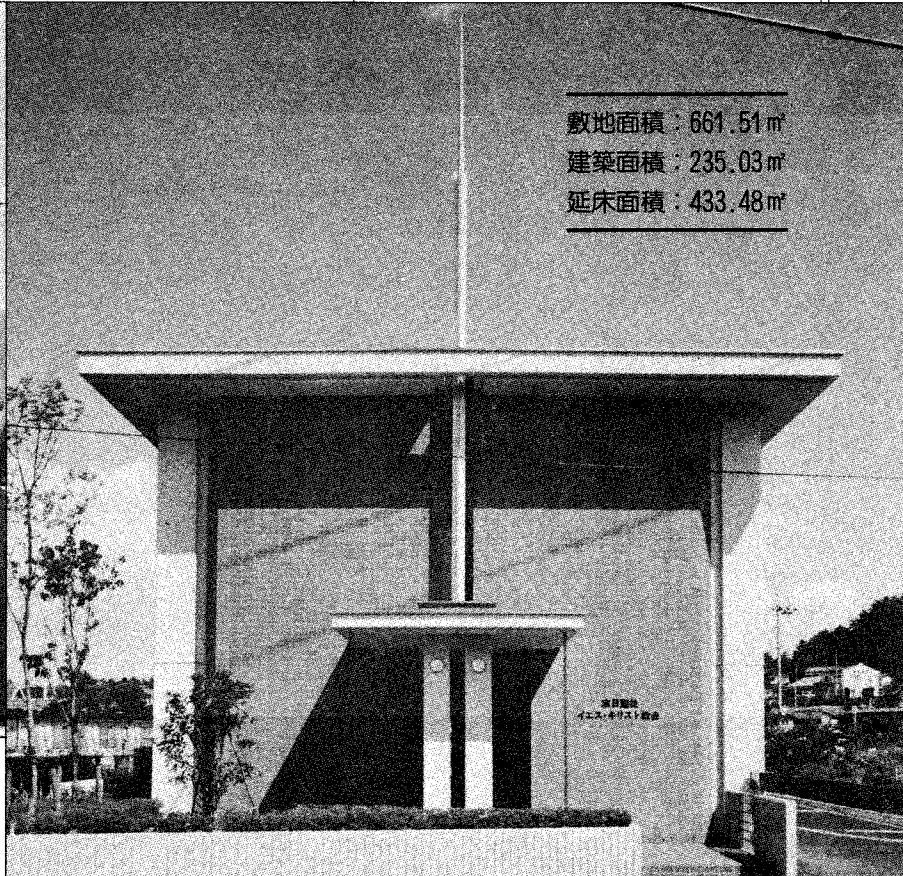
を思い出し、そしてまたあの早朝の経験を思い出して怠惰な性格の自分を打ち打っている。(たかはし・しゅういち 1947年生まれ、東京北ステーク部高等評議員)



曾田耕吉監督



岡山ステーク部松江ワード部  
松江市西津田町細田1065-6  
TEL 0852-27-5405



敷地面積：661.51㎡  
建築面積：235.03㎡  
延床面積：433.48㎡

### 完成した松江ワード部 教会堂——伝道に注ぐ 情熱

〔完成—1983年8月10日〕  
〔献堂—1984年7月29日〕

**神**話のふるさと出雲の国の中心地、そして山陰の地に初めて宣教師が送られた地、それが松江です。

松江ワード部は、1969年のオープンから半年の間は会員がいませんでした。しかし翌年は10名のバプテスマがあり、その内の約半数は伝道に出ました。松江ワード部から召される場合と、伝道資金をためる目的で松江を離れてから召される場合とありま

すが、両方含めるとすでに20名ほどの方々が伝道しています。

私たちのワード部では、伝道に出なさいと言ったことはありません。若人たちの心の中には伝道に出るのは当然だという信仰が育っています。兄弟たちは大学や就職で都会へ出ていくことが多いのですが、たとえどこへ行こうと神様を心から愛し、戒めに快く従い、み業の一端を担いたいと強く決心できるよう、私たちは彼らを常に励ましています。

また、第一のことを第一に行なえる神権者を育てるために工夫をしております。たとえ少しの時間しかなくても、神様のことと神権者の義務について親しく語り合うよう努めています。

私たち松江ワード部の会員たちは、何事

を行なうにも、まず神様の喜ばれることをしようと決めています。人を喜ばすことよりも、神様が良しとおっしゃることを勇氣を持って行なえる信仰を養うことを重要なこととしております。

'84年の松江ワード部のモットーは、「私のように頑張ろう」でした。すべての人は才能が異なりますから、それぞれの善い点がより一層良くなるように力を尽くし、ほかの方々の助け手となろうという意味がこのモットーに含まれています。

監督会は2名しかいませんし、長老定員会も会長ひとりだけです。小さなワード部ですが、信仰は大きく持って、日本のすべての聖徒の方と共に主のみ業を行ないたいと思っています。(松江ワード部監督・曾田耕吉)



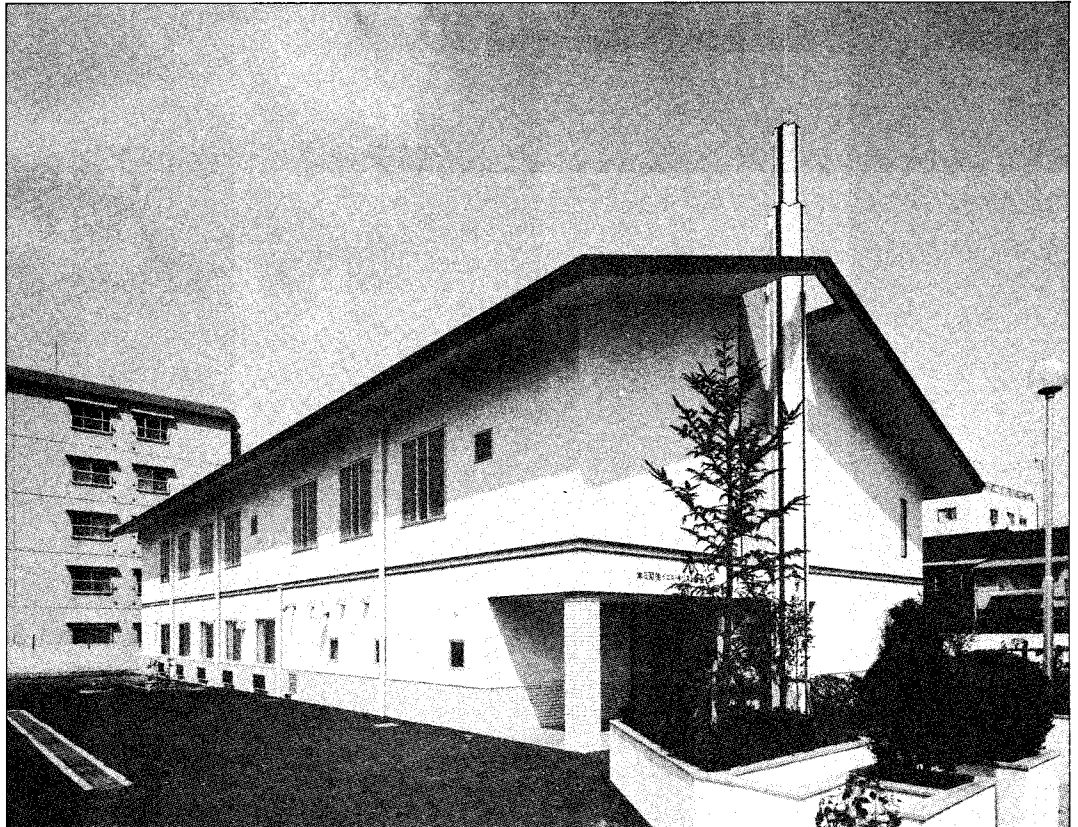
## 献堂された 東大阪ワード部 教会堂

〔完成—1983年8月30日〕  
〔献堂—1984年9月2日〕



河嶋明輝監督

敷地面積：1,602.09㎡  
建築面積：415.88㎡  
延床面積：790.79㎡



大阪ステーキ部東大阪ワード部  
大阪府東大阪市荒川 2-15-3  
TEL 06-720-6849

### 《美しい教会堂に感謝》

1970年、万国博覧会を機に、生駒、信貴山のふもとに広がる東大阪市、八尾市、柏原市の地域に、東大阪支部として伝道の基が築かれました。

貸しビルから出発し、その後、土地購入と教会堂建築資金のチャレンジの後に、東京神殿、ステーキ部センター建築のための資金のチャレンジと続き、当時の会員にとっては多大の犠牲を払うことになりました。

しかし、今ここに会員の方々の信仰の現われとして美しい教会堂が建ち、その中で福音を学べることを、心から感謝しています。また1980年に献堂された東京神殿に参入し、多くの恵みと祝福を得ることができ



るので、心から感謝しています。

主は私たちに建築資金という試練を通して、一人一人の信仰を試みられたのでした。

試練は最初、喜ばしいものとは思われず、むしろ苦しいものと思われれます。しかし、それを乗り越えたとき、主は以前にも増して良いものをあらかじめ備えてくださって

いることを証いたします。

末日聖徒イエス・キリスト教会は、一人一人の信仰の上に成り立っています。私たちはこれからも主を信頼し、心をひとつにして共にシオン建設のため、努力しようと思っています。(東大阪ワード部監督・河嶋明輝)

## ローカルページ

### 本州の最北端に位置する八戸支部教会堂の完成を喜ぶ

完成—1984年1月27日  
献堂—1984年6月10日

この八戸の地に初めて宣教師がやって来て、家を借りて集会を始めたのは1968年の12月でした。その集会所から数えて5番目が、現在私たちが集っている新しい教会堂です。

1984年1月に完成し、引き渡しを受けた翌日、待ち焦がれていた私たちはさっそく引っ越しにかかりました。その日は土曜日で、安息日をひかえて厳寒の中での切迫した引っ越しでした。

新教会堂での最初の聖餐会は、慣れない施設で、ぎこちなさの目立つ集会でした。集まった兄弟姉妹たちの顔は心なしか紅潮し、皆すばらしい笑顔でした。

八戸は本州の最北端、青森県の太平洋側にある人口24万人の県内第2の市で、「はちのへ」と読みます。教会堂は本八戸駅のすぐ近く、歩いて3、4分のところにあります。市の中心に近く今後の伝道の進展を期待しています。

盛岡地方部ができてから、はや5年経ちますが、今まで岩手、秋田、青森の3県には正規の教会堂がありませんでした。最初の地方部大会は、借家の八戸支部で開かれましたが、100人も集まりませんでした。しかし新しい教会堂を得て開かれた1984年春の地方部大会では、ホールに入りきらないほどの参加者でした。

遅まきながら、シオンの杭は八戸と青森で2本続けて打たれました。私たちはやっと歩み始めたようです。そして少しずつその速度を早めようとしています。

八戸で伝道して下さった宣教師の皆様、

あなた方の献身的な働きにより、八戸支部は今、宝を得ました。また、これまで八戸の地で育ち、遠くの地で主の業に励んでおられる兄弟姉妹、あなた方の汗や涙、信仰、そして証がこの教会堂を賜わる助けとなりました。

主はこれまで様々な試練を与えてくださり、八戸支部を鍛えられ、この祝福を受ける備えをさせていただきました。感謝しております。1日も早くシオンのステーキ部を建てることで、この気持ちを表わせたいと思っております。(八戸支部支部長・小泉隆司)



盛岡地方部八戸支部  
青森県八戸市城下4-1-40  
TEL 0178-43-8435



小泉隆司支部長



敷地面積：  
671.89㎡  
建築面積：  
223.59㎡  
延床面積：  
419.46㎡

# 家族で取り組む系図「十種競技」

ジョージ・D・ダラント

**若**い頃、私はロバート・マサイアスという人にあこがれたことがあります。彼は、1948年と1952年の2回のオリンピックで十種競技に優勝した人です。

マサイアスは100メートルを10秒9で走りました。1位の選手のタイムは、それよりも0.5秒速い10秒4でした。400メートルのマサイアスのタイムは50秒2、400メートル専門の選手のタイム40秒2にははるかに及ばないものでした。また、走り高飛びは6フィート2.75インチ(約1.9メートル)で、この種目だけに出て優勝した選手の記録には6インチ(約15センチ)ほど及ばず、やり投げも194フィート3インチ(約41.2メートル)で、やり投げだけに全力を費やした選手の記録242フィート(約73.76メートル)には遠く及びませんでした。

ボブ(ロバートの愛称)・マサイアス選手は、個々の競技ではどれも最高点を取れませんでしたでしたが、どの競技でもまずまずの成績を上げ、全得点を合計すると十種競技に優勝していたのです。

人生も十種競技と同じようなものです。自分の隠れた才能を発揮し、人のために尽くしたいと思ったなら、いろいろな種目に参加することです。私たちは記録を打ち立てようとしても遠く及ばないかもしれませんが、また、自分の成果を専門家のそれに比べたら、自分には適さないと思うでしょうし、自分はこれ以上はよくできないといううしろめたい気持ちさえ感じることだってあるでしょう。

忙しすぎるという状態と何もしないという状態。とらえにくいのですが、この両極

端の間のどこかに、調和の取れたと言われる状態があるのです。私たちの人生についても、いろいろな面にバランス感覚を持って取り組むことによって、人生のすばらしい十種競技の勝利者になれるのではないのでしょうか。

私たちは系図に関する義務を人生という忙しい活動の中で果たそうとするとき、系図は私たちを失敗させるためにあるのではないかと思われることがあります。それは、系図の責任を十種競技のひとつの種目としてではなく、専門の種目として見るためにそのように感じてしまうのだと思います。系図の仕事を喜んで行なうには、分厚い覚えの書や、手に入るあらゆる調査のための記録、きちんと書き込まれた家族の記録が必要だと思ってしまうのです。

この道の専門家ならともかく、私たちはそこまでする必要はありません。

自分がよく調和を取っているかどうか、次の質問に「はい」か「いいえ」で答えてください。

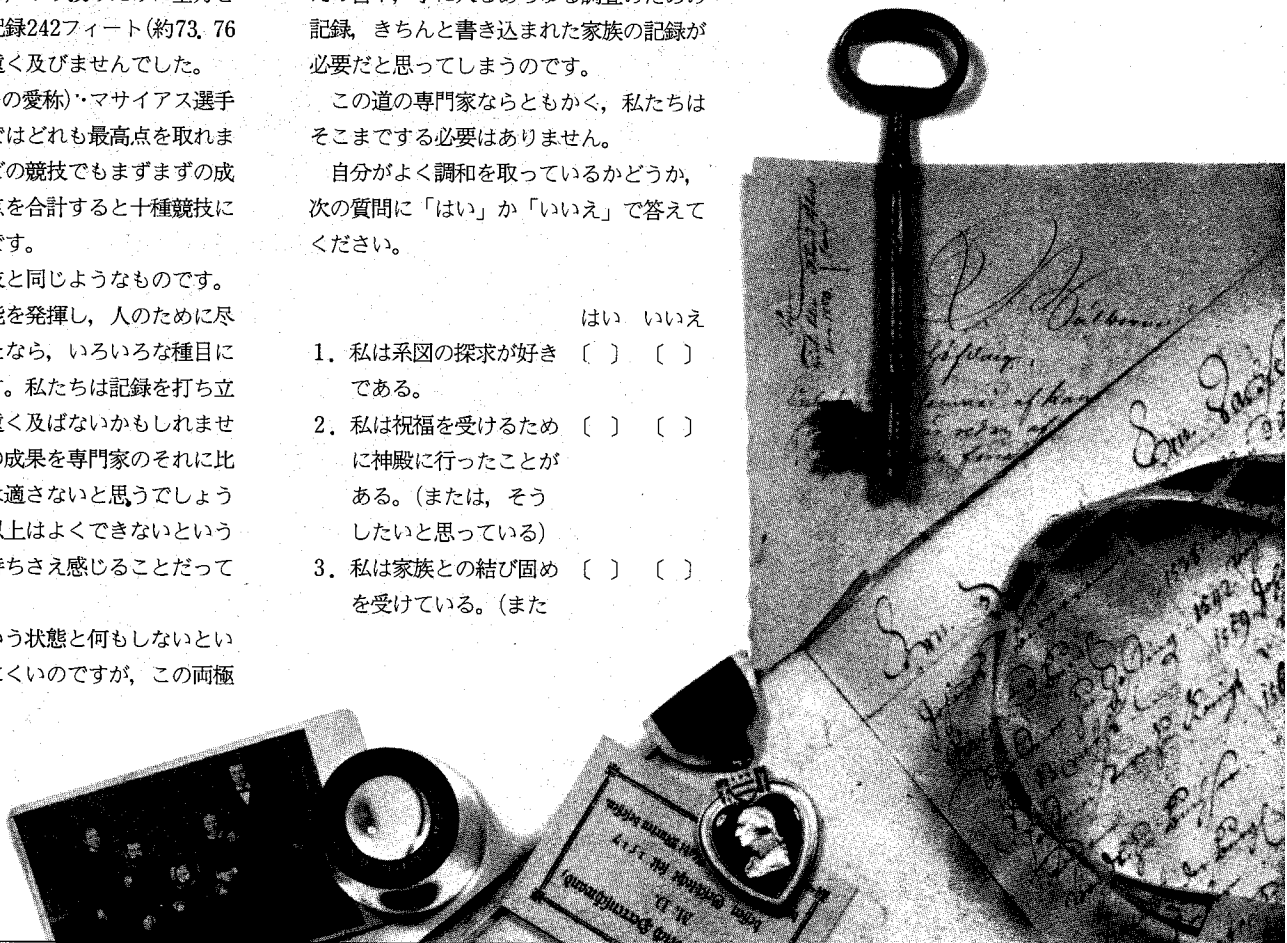
- はい いいえ
1. 私は系図の探求が好き   である。
  2. 私は祝福を受けるため   に神殿に行ったことがある。(または、そうしたいと思っている)
  3. 私は家族との結び固め   を受けている。(また

は、そうしたいと思っている)

4. 私は毎週家庭の夕べを   開いている。
5. 私は少なくとも4代の   先祖の記録を作成し、神殿の儀式を受けられるように名前を提出した。
6. 私の系図探求はほとん   ど終わっている。

答えを見てみましょう。あなたのバランスはどうだったでしょうか。

質問1：私は系図の探求が好きである。



「はい」と答えていたらすばらしいですね。もし「いいえ」という答えだったら、それはあなたが「系図」という言葉の意味をまだよく理解していないからでしょう。

系図とは、家族の記録や系図表、正確な大量の古い系図記録を言うものではありません。それらは単なる手段です。系図というのは、自分の家族を調べること、私たちの先祖を調べることです。つまり、その生年月日や生い立ち、抱いていた夢、結婚、仕事、子供のこと、死などについて調べることなのです。過去のこうした事柄で現在に影響を及ぼさないものはありません。突きつめると、系図は自分自身を探ることなのです。

ときどき私は思います。もし私の曾祖父がジョン・ダラントでなくてだれかほかの人だったら、自分はようになっていただろうか、と。もしほかの人だったら、私はこの私ではなく、自分の血筋のうち八分の一は違っていたことになるからです。

もし曾祖父が異なった選択をしていたら、私の人生もまた違ったものとなっていたでしょう。100年以上も前、宣教師がイギリスに渡ってきたとき、私の曾祖父は宣教師の話信じました。もし信じていなかったら、曾祖父はおそらくイギリスを離れることも

なく、私もまたイギリス人として暮らしていたことでしょう。

そういうわけですから、私が曾祖父やほかの先祖のことをもっと知りたいと思っても、何も不思議はないでしょう。先祖のことを知れば知るほど、私は自分のことがよくわかるようになるのです。

あなたも先祖のことがわかってくと、彼らに深い愛を感じるようになるに違いありません。そして、彼らのために神殿の儀式が行なわれるようにしたいと思うでしょう。系図は、あなたをそのように仕向けてくれる手段なのです。

もしあなたが「いいえ」と答えていたら、やり直して「はい」という答えに変えたいと思いませんか。そうするだけでも小さな喜びがわきあがってくるのを覚えるでしょう。

質問2：私は祝福を受けるために神殿に行ったことがある。(または、そうしたいと思っている)

「はい」と答えましたね。

すべての神殿および系図の責任の一番の基本となるのは、自分のために神殿の儀式を受けることです。もっと多くの会員がこの祝福にあずかれるようにするために、現在多くの神殿が世界中に建設されています。神殿の祝福を受けることは、福音の神髄です。何よりも大切な霊的な祝福を得るための土台となるのです。まず自分が神殿の祝福を受けて初めて、亡くなった先祖がそのような祝福を得られるようになるのです。

あなたがすでに神殿の祝福を受けていたら、その祝福をほかの人にもたらし、また自分が交わした誓約を思い出すためにも、できるだけたびたび神殿に入るようにしま

しょう。まだ神殿に入っていない人は、その日のために自分をふさわしく備えてください。

質問3：私は家族との結び固めを受けている。(または、そうしたいと思っている)

何年前かになりますが、家庭の夕べとそれが子供たちに及ぼす影響というテーマで調査を行なったことがあります。私は家庭の夕べを開くことはほとんどめったにないという家族をいくつか見つけ、彼らに3カ月間、毎週家庭の夕べを開くように言いました。

その中のある家族の経験は今も心に残っています。毎週家庭の夕べを開くようにお願いをするためにこの家庭を初めて訪問したとき、父親は吸っていたたばこのパイプをわきに置いたものでした。座っている椅子のすぐそばには、口の開いた缶ビールが置かれていました。いくつかの問題に触れてから、私はお願いしました。それに対して、その父親は「毎週きちんと家庭の夕べをします」と言って応じてくれました。

そろそろ冬も終わり、春になろうという頃になって、私はふたたびその家族と会いました。私はびつくりするような歓迎を受けました。「しますとおっしゃった家庭の夕べですが、この3カ月間、毎週行なわれましたか」という私の質問に、父親はじっと私を見てこう答えました。「ええまあ、ほとんど毎週しました。ただ1週だけ、家庭の夕べになるのかわからない週があるんです。」

すると母親が横から言いました。「あの週にしたことは、私は数に入れてもいいと思うわ。」

「何をなさったのか話してみてください。そうすればわかりますから。」私は言いました。

すると父親はこう答えたのです。「私たちは神殿に行って、家族として永遠の結び固めを受けたのです。」

思いがけない返事に、私はあっけにとられました。胸が一杯で言葉に詰まった私は、穏やかな口調でこう答えました。「もちろん、家庭の夕べに数えられると思いますよ。」

私は父親に、こんなに大きく変わった動機は何だったのか尋ねました。

その答えは簡単なものでした。「毎週私は



家族を集めて、家庭の夕べを開きました。子供たちは私や妻のそばに座りました。家族のみんながとてもよい気持ちを感じ、幸福感を覚えました。それで変わるのは今だと決心がついたのです。永遠と一緒にいられるように、神殿に入ることに話合いました。そして、そのことをホームティーチャーに話し、監督にも伝えました。それである期間を経た後、私たちは監督から神殿に入るのにふさわしいと認められたのです。」

中には、神殿の祝福なんて当分は甘い夢だと言う家族もあるに違いありません。しかし、いつまでもそのようであってはなりません。神殿の祝福を望む家族は、いつかはその祝福にあずかることができるのです。

質問4：私は毎週家庭の夕べを開いている。

もし「いいえ」という答えだったら、あなたは永遠の家族をつくるという最も基本的な責任をおろそかにしていることになり。家庭の夕べは、どんなに忙しくてもできるものです。バランスの取れた信仰生活を送るうえで欠かせないものなのです。オークランド神殿（カリフォルニア州にある）の献堂式のとき、ハロルド・B・リー一大管長は次のような意味深い話をしています。

「ジョセフ・F・スミス大管長と副管長は、教会員に対して、週に一度子供たちを集めて福音を教えるなら、そのような家庭に育った子供たちは道を誤ることがないという約束をしました。

皆さんは、親としてその心を子供たちに向け、子供たちの心をその親に向けさせるまたとない時は、とばりの向こうに行った時であると思いませんか。とばりの向こうに行くまで引き延ばしておいて、その時になっておろそかにしてきた子供たちを懐かしむとしたら、家族との絆が確かなものとなるでしょうか。真剣に考えていただきたいと思いませんか。とばりの向こうに行っても親子の絆が死を越えて続くものとなるように、私たちは今生きている間に親の心を子供に向けることを考えるべきでしょう。親の心を子供たちに向ける、これこそ真の原則であると思いませんか。私たちはこのことを考えなくてはなりません。」

このような週に一度の経験が続けて家庭生活の中心となるなら、この世において絆

が生まれ、その絆は神殿での結び固めによって結び合わされて、とばりを越えて続くでしょう。

もしこの質問に「いいえ」と答えていたら、もどって「はい」に直し、毎週家庭の夕べを実行してください。

質問5：私は少なくとも4代の先祖の記録を作成し、神殿の儀式を受けられるように名前を提出した。

もしあなたが「いいえ」と答えていたら、それは4代の完全な先祖の記録を得るのがほとんど不可能な場合がままあるからでしょう。

一生懸命努力してそれでもどうにもならなかったら、「はい」と答えてよいでしょう。そのような人は、系図の探求という仕事の精神に応えていることになるからです。得られたかどうか定かでない情報よりも、探求を実際に行ってみるの方が大切な場合がよくあるからです。

4代かそれ以上さかのぼって先祖の記録を完成していたら、その記録によく注意して目を通したり、元になった記録を振り返って調べたりするとよいでしょう。そうすると、記録に載っている先祖に詳しくなるだけでなく、同時に情報の正確さも判断することができます。

これらの記録やほかの記録は、系図表や家族の記録、個人および家族の歴史などと一緒に使えるように、家族の覚えの書に入れておくことができます。これらはみな、家族に先祖のことを教えるときに役立つことができます。

質問6：私の系図探求はほとんど終わっている。

「はい」と答えた人は、正直にそう答えたのだと思います。でも、それはたぶん思い違いでしょう。

確かに多くの先祖の家系が、現存する記録でわかる限りさかのぼって調べられてきました。しかし、それ以上さかのぼって調べられる家系がひとつもないという人はまれです。またそのような人でも、時間を上手に使い、この楽しい探求に参加することができます。

することは簡単です。あなたの曾祖父の子孫で生存している人の中には、系図の仕事をもっとしたいと思っている人がたぶん何人かいるでしょう。普通は、系図に関心

を持っている親戚がだれかはわかっているはずですから、彼らに手紙を書くか、訪問して話を聞かします。そして、あなたを含めたふたり以上で、先祖を調べる家族集会なるものを開く計画を立てます。

その会では、まとめ役としてみんなが推す人を見つけて議長に指名します。議長に選ばれた人は（もしかしてあなたかもしれません）、調査の進み具合を確かめたり、どこまでさかのぼって調べるかや、その目標を達成する方法を決めたりするために、自分から案を出していきます。これが家族としての系図計画になります。

親戚の人たちと集まると、それぞれ得意とする分野があることがわかります。ある人は記録を調べ、ある人は家族の歴史を書き、ある人は系図表や家族の記録用紙に清書することができます。また、ある人は資金を調達し、ある人は写真をとり、ある人はネットワークの仕事を受け持つことができます。ほかの家族と連絡を取って、家族集会や一族の集まりを計画し準備することのできる人もいるでしょう。全員の才能を生かせるような計画を立てましょう。そうすれば、だれも重荷に感じることなく、全員が自分も貢献しているという気持ちを味わうことができます。

この系図計画に参加すれば、どの家族も家庭の夕べでこの計画を取りあげることができるでしょう。

こうなるとすっかり夢中になって、いくつかの家系を一緒にした大きな組織を作りたいと思うようになるものですが、それはやめましょう。自分で処理しきれない仕事を背負うことになりかねませんから。信仰生活をバランスの取れたものにするには、ひとつかふたつの家系を調べれば十分でしょう。家族の努力を促すために、兄や弟にひとつの家系の探求を受け持つてくれるように励ましてください。姉や妹にもまた別の家系を調べてもらうことができます。

あなたの系図探求は完全に終わったわけではありません。あなたの働きはまだ必要です。ひとつの親戚と連絡を取ること、まずはそこから始まります。もしあなたがすでに系図ができて、自分ひとりで調べる時間のある人だったら、親戚の人たちも系図「十種競技」のチームに誘って助けてあげてください。

# 「神が私たちに下さったのは、臆する霊ではなく……」



第二副管長  
ゴードン・B・ヒンクレー

この話は、1983年11月5日、ソルトレークインスティテュートで、末日聖徒の大学生を対象に話されたものです。

**私**は世界各地を回っていて、またこれまでの生涯の中で、いろいろな悩みや心配事がかかえた大勢の人に出会ってきました。チャレンジとも思えるそうした悩みや不安を聞くたびに、私は昔使徒パウロが書いた言葉を思い起こしてきました。当時パウロは、確かローマで捕らわれの身にあつたと思います。彼は「すでに自身を犠牲としてささげている」(Ⅱテモテ4：6)と言っています。彼はゆるぎない証を持ち、よみがえられた主を証することに熱意を抱いた偉大な伝道者でした。彼は自分が間もなく世を去ることを知っていました。彼は大いなる思いを胸に抱き、「愛する子」と呼んでいた同僚のテモテに手紙を送っています。

「こういうわけで……内にいただいた神の賜物を、再び燃え立たせなさい。

というのは、神がわたしたちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである。」(Ⅱテモテ1：6-7)

一体、不安や恐れのない人というのはいるのでしょうか。そのような人に、私はいまだかつて出会ったことがありません。もちろん、人より大きな不安を抱いている人はいます。またすぐに不安を取り除いてしまうことのできる人もいれば、不安のとりこになって圧倒され、それに打ち負かされてしまう人もいます。人からばかにされるのではないかという不安、失敗するのではないかという不安、孤独や無知への不安など、私たちは様々な不

安にかられます。現在に対して、また将来に対して大きな不安を抱いている人々もいます。また罪の重荷を背負い、その重荷から逃れるために何もかも手放し、それでいて生活を変えることを恐れている人々もいます。このような恐れや不安は神から来るのではないということを私たちははっきりと認識しておかなければなりません。そうした執拗な、破壊的な力は、真理や義にさからうことによりもたらされるのです。恐れは信仰に相反するものです。恐れや不安は致命的なまでに人をむしばんでいきます。

「というのは、神が私たちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである。」

この中に述べられている原則は、私たちから力を奪い、時には私たちが打ちのめしてしまう不安や恐れがあっても、それを取り除いてくれるすばらしいものです。私たちに力を与えてくれるのです。

では、どんな力でしょうか。それは福音の力、真理の力、信仰の力、神権の力です。

昨年、多くのキリスト教徒たちが、マルティン・ルター生誕500周年を祝いました。私たちは彼を回復に関する偉大な勇気ある先駆者のひとりとして尊敬しています。私は彼の手になる偉大な讃美歌、「神はわが砦」が大好きです。

神はわが砦  
破れることなし  
強き助け手ぞ  
悪には打ち勝つ  
すべてのもの  
救いたもう

力づよき造り主よ  
世はみな従わん

(『神はわが砦』「讃美歌」17番)

私たちはみな神の息子、娘です。そのことを知るたびに、私たちの内に大きな力が宿ります。神聖な力が宿るのです。このような知識があり、それが生活に影響することを知っている人は、決して卑しい価値のないようなことはしないでしよう。

私たちの内にあるそのような神聖な力を、もっともっと強めていこうではありませんか。信仰を持てるがゆえのあざけりに対し、何ら恐れる必要はありません。私たちは皆、少なからずそうした経験をしてきているのです。私たちの中にはそうしたあざけりを克服することのできる力、そのあざけりを自分のためになるように変えていく力があります。

私は、教会本部から遠く離れた所に住む、多くの友人の生活を変えることとなったある女子高生者の経験談を耳にしたことがあります。彼女と彼女の友達、あるパーティーを開く計画をしました。もちろんその時点で、友人たちはだれひとり教会員ではありませんでした。彼女ははっきりこう言ったのです。「きっと楽しいパーティーになるわ。アルコールなんて必要ないわ。」

すばらしいことに、その友人たちは彼女を大変尊敬していたのです。そして彼女の勇気は友人たちの心に伝わり、その友人たちは彼女の模範のおかげで、責任感を持ち、道徳的につつましくある勇気を得たのです。神は私たちに福音の力を授け、不安や恐れを克服できるようにしてください。

神は私たちに真理の力を授けてくださいました。

ジョセフ・F・スミス大管長は、かつてこのように言われました。「私たちは、どんな事柄に関するものでも、すべての真理を信じる。世のすべての教派宗派は、私たちが受け入れている真理の原則をひとつは持っている。私たちは、出所がどこであろうと、すべての真理を喜んで受け入れるものである。なぜなら真理はいつまでも真理として存続するからである。」(「福音の教義」p. 1)

永遠の真理の光によって歩むとき、私たちに恐れるものは何もありません。それよりも、私たちはもっと識別する力を身につけるべきです。ごまかしの議論は、それを真理のように見せかけようとし、半面だけの真理は、それを完全な真理であるかのように主張して人々を欺こうとします。主のみ業に対抗する人々は、推論を真理であるかのように主張することがよくあります。また、仮説や学説がまるで確認された事実のように伝えられたり、時代的背景や状況による判断で出された声明や文書が真理として伝えられたりすることがよくあるのです。そしてそのようなことが往々にして虚偽の根元となるのです。

英国人の改宗者ジョン・ジェイクスは、このことを次のような美しい詩に書きあげています。これは讃美歌として人々に親しまれているものです。

真理は時を越えて  
始めなり終りなり  
天は滅び地は裂くとも  
真理は悪を切り抜け  
永遠に変わらずあらん

(『真理は何といえば』「讃美歌」141番)

私たちは、永遠の父なる神のもとから来る真理に正しく従い、そこからもたらされる力を身に受けていれば、何ら恐れる必要はありません。

信仰の力を身につけている場合も同じことです。世の中には教会のあら捜しを



人生は悩みや不安に満ちている。しかしパウロがローマで捕らわれの身にあつたときに語つたのは、次のような希望の言葉であつた。「神がわたしに下さつたのは、臆する霊ではなく、力と愛と憤みの霊なのである。」(IIテモテ1：6-7)

したり、教会を敵視したりするような人々が大勢います。彼らは神聖なものまでも嘲弄するのです。神から来るものをけなし、神聖なものが嘲弄されるのを見ながら人々の欲望を満たそうとしているのです。こうした行動こそ、最もキリストのみたまにそぐわないものと言えるのではないのでしょうか。私はそう思います。

私たちにとって神聖なものが冒瀆され

ると、非常に胸が痛みます。しかしそのようなときでも、恐れる必要はないのです。その神聖なものが主張しているのは、ほかのいかなる人物よりも偉大なすばらしいものだからです。そしてそれは冒瀆し、敵視する人々よりはるかに長く生き続けるのです。私たちに求められているのは、恐れを捨て信仰の力を持ってまい進することだけです。このみ業が起こさ

れた初期の時代に、主は次のように言われました。

「この故に小さき羊の群よ、おそるるなかれ。善を行え。この世と地獄と共にありてむかい来らしめよ。もし汝らわが磐の上に立たば、彼ら打ち勝つ能わざればなり。」

何を念うとも、念々われを見るべし。疑うなかれ、おそるるなかれ。

わが肋の突き傷と、またわが手足にある釘痕を見よ。忠信なれ。わが誠命を守れ。さらば、われ汝らに天の王国をつがしむるなり。」(教義と聖約6:34, 36-37)

パウロはコリント人に次のような手紙を書き送っています。「目をさまさない。信仰に立ちなさい。男らしく、強くあってほしい。」(Iコリント16:13)

「というのは、神が私たちに下さったのは、應ずる霊ではなく、力と愛……なのである。」

この愛とはどんな愛なのでしょう。それは主に対する愛、主のみ業、主の目的、主の王国に対する愛すなわち人々に対する愛、お互いに対する愛なのです。

私はこれまで、神の愛によって不安や恐れがやわらぐ様子を何度も目にしてきました。教会を愛することによって、確かに疑いの心を克服することができます。私は大学の学生たちに、もう50年以上も前になる私の学生時代の経験を話したことがあります。それはいろいろな面で暗い時代でした。何もかもが絶望的で皮肉な時代、そう、あの大不況期の最悪の時代だったのです。私が大学を卒業した1932年当時、失業率は30パーセントを越えていました。合衆国内だけではなく、世界的に大変困難な時代を迎えていました。失業者があふれ、自殺者があつたを絶たない時代だったのです。

大学時代の若者というのは、少々批判的で気むずかしくなりがちなのですが、1930年代には時代の風潮によりそうした傾向が一層あおり立てられていきました。何でも疑ってかかる時代、人生のことや

世の中のこと、教会のことや福音のことにまで疑いをはさむ時代でした。しかし同時に、喜びと愛の時代でもありました。そうした中で、私の心の奥底には、立派な両親や家族、すばらしい監督、献身的で忠実な教師たち、そして聖典からもたらされた愛がしっかり根をおろしていたのです。

私たちの若い頃は何もかも自由に知ることのできる時代ではありませんでしたが、私たちの心の中には神に対する愛、偉大なみ業に対する愛と言えるものがありました。そのおかげで、私たちはどんな疑いや不安をも克服することができました。私たちは心から主を愛していましたし、すばらしい立派な友人たちを大切にしていました。そのような愛から、私たちは大きな力を引き出すことができたのです。

恐れや疑い、不安や落胆から立ち直らせてくれる愛の力、なんとすばらしい力でしょうか。

「神が私たちに下さったのは、應ずる霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである。」

ここに出てくる「慎み」という言葉を、パウロはどのような意味で使っていたのでしょうか。彼は福音の基本論理のことを指していたのではないのでしょうか。私にとって福音とは、単なる神学用語の集まりではありません。安らぎの真理が順序正しく並べられた、簡潔で美しい筋の通ったものです。私はまだ知られていない奥義をあれこれせんさくするつもりはありません。天の門が開き戸か引き戸かといったことを心配する必要はないのです。私に関心を持っているのは、確かに門は開かれるということだけです。最近では、予言者ジョセフ・スミスが最初の示現についていろいろな表現で話していることに何の不安も持たなくなりました。それは、新約聖書の福音書を4人の人々が書いていることと同じなのです。彼らは自分自身の判断で、しかも様々な出来事を彼らの記す目的に合わせて書き連ねてい

るのです。

私がかつと関心を抱いているのは、この神権時代に、男性も女性もすべての人々が彼らの創り主、贖い主を愛し、お互いに感謝の気持ちで仕え合い、不死不滅と永遠の生命に至る道を信仰を持って歩めるようにと、神が偉大なすばらしい計画を啓示してくださったという事実です。

「神の栄光は英智なり。すなわち、光明と真理なり。」(教義と聖約93:36) 私は、このようにすばらしい宣言をして下さっている主に感謝しています。また次のような戒めが与えられていることにも感謝しています。「汝ら最も善き書より智慧ある言葉を探し求めよ。」また、私たちは「研究と信仰とによりて」知識を得るようにも言われています。(教義と聖約88:118)

私が大学生だった頃、生物の進化に関して様々な意見が飛び交っていました。地質学と生物学のクラスをとっていた私は、ダーウィンの進化論を詳細に学ぶことになりました。しかしどうも納得できず、いろいろ考えてみましたが、結局は私自身の考え方に影響を及ぼすまでには至りませんでした。なぜなら私たちの起源や神と私たちとの関係を、私は聖典を通して知っていたからです。それ以来私は、自分にとってもっとずっと大切な、すばらしい進化論を持つようになりしました。それはすべての男性、女性が神の息子、娘であり、創造主の子供としてすばらしい進歩の可能性を持った者であるという説です。この偉大な原則は、啓示の中に次のような言葉で述べられています。

「人を徳に導かざるものは、神によるにあらざる暗黒なり。」

神によるものは光明なり。その光明を受けて神に従うこといよいよ久しき者は、その受くる光明いよいよ明らかなり。その光明いよいよ明らかとなりてついに完き昼となるべし。」(教義と聖約50:23-24)

この言葉をよく頭に入れておきたいものです。ここには、私たちの内に宿って



いる偉大な可能性について、すばらしい約束がなされています。神が息子、娘である私たちを愛するがゆえに与えてくださった約束のもとに、私たちは生まれてきているのです。人生で出会ういろいろな問題や困難に対して、何の恐れることがあるのでしょうか。かつての合衆国大統領フランクリン・D・ルーズベルトが語っているように、「恐れそのもの」を恐れるべきではないでしょうか。ここでもう一度、パウロの教えている非常に大切な真理に触れたいと思います。「神が私たちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである。」

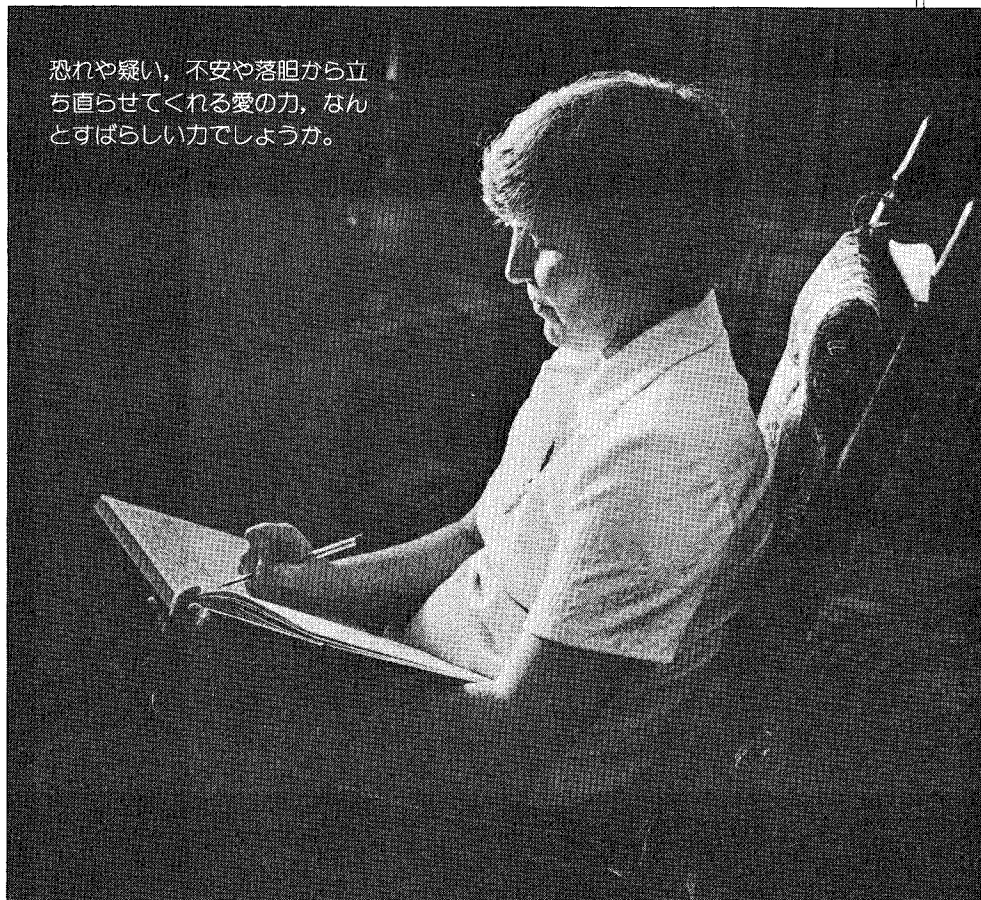
そしてパウロは、テモテに次のようなすばらしい勧告を送っています。「だから、あなたは、わたしたちの主のあかしをすること……を、決して恥ずかしく思ってはならない。」(IIテモテ1:8)

この言葉を、皆さん一人一人に与えられたものとして受けとっていただきたいと思います。決しておごり高ぶることなく、自信を持って歩もうではありませんか。私たちの救い主、贖い主なるイエスキリストへの確信の中に、静かな威厳を漂わせて行動していこうではありませんか。主からもたらされる力の中にこそ強さを見だし、主の存在に欠かすことのできない平安の中にこそ安らぎを見いだしたいものです。全人類のためにみずからを犠牲として捧げてくださった主の精神にならって、私たちが喜んで犠牲になりたいものです。「主の器<sup>うつわ</sup>をになう者よ、おのれを清く保て。」(イザヤ52:11) この主の戒めに従って、徳高く生きようではありませんか。そして「悔い改めよ」という主の戒めを守るために、いかなる罪をも悔い改め、主が約束して下さっている慈悲のもとで、赦しを求めようではありませんか。お互いに仕え合うことによって、主に対する私たちの愛を表わそうではありませんか。

### ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのとき、以

恐れや疑い、不安や落胆から立ち直らせてくれる愛の力、なんとすばらしい力でしょうか。



下の点を強調するとよいでしょう。

1. 恐れは神から来るものではなく、悪魔から来るものである。恐れは信仰に相反するものである。神は私たちに、恐れを取り除いてくれるものとして「愛」と「力」と「慎み」とを与えて下さっている。
2. 福音の力は私たちに強さを与えてくれる。その強さとは、私たちが神の息子、娘であることを知るときにもたらされる強さである。
3. 私たちは人を勇気づける愛の力すなわち主に対する愛、両親、家族、友人、教会の指導者に対する愛によって、恐れや疑い、悩みや挫折感を克服することができる。
4. つつましきは、私たちに福音は簡潔で美しく、筋の通ったものであることを理解させてくれる。

5. 恐れを克服しようとするときには、決しておごり高ぶることなく、自信を持って、また救い主への確信の中に静かな威厳を漂わせて行動していきたいものである。

### 話し合いを進めるために

1. 恐れ<sup>こゝろ</sup>の気持ちを克服することについて、あなたの感じていることや経験したことを述べる。
2. このメッセージの中に、家庭で読んだり話し合ったりするのによい聖句や言葉はないだろうか。
3. 話し合いをより充実したものとするために、訪問する前に家長と話し合っておくとよい。今回のテーマに関して定員会指導者や監督から家長にあてられたメッセージはないだろうか。

# ラッセル・M・ネルソン長老： 神の律法を生かして

マービン・K・ガードナー

**19** 78年2月、メキシコのサンマニヨで30年前の同級の医師たちとの学会に出席していたときのことで。急にひとりの医師が胃の大量出血で重態になりました。平常であれば居合わせたれにも処置はできたはず。だれもが医療訓練を積み、経験を重ねて、技術にも知識にも秀でていました。しかしそのときは、仲間が苦しむのを見ながら、自分たちが無力なことを知ったのでした。

「町から遠い漁村のリゾート・ホテルだったのです。」ラッセル・M・ネルソン長老は当時を思い起こして語りました。

「病院は一軒もありませんでした。一番近い所が、山道を何百キロも行ったグアダハラにありましたが、夜で飛行機は飛べませんでした。器械がないので、輸血などとてもできません。だんだん衰えていく彼を目の前にしながら、知恵を集め、憂慮を重ねても、友を助ける手だてにならないのです。出血を止めることはできませんでした。」

病人が祝福をしてくれるように頼みました。するとすぐさま、メルケゼデク神権を持っている医師が数人集まり、ネルソン博士が祝福の言葉を述べました。「私は『出血が止まり、あなたは生き延びて、家に帰り、仕事に復帰できるでしょう』と宣言しました。みたまがそう告げたのです。」祝福の通り、その病人は快復して、無事帰宅したのでした。

「病人やけが人を癒すのに、人間が手を下せる領域はほんのわずかしかなかった。」ネルソン長老は言います。「教育を受ければできることは少し増えます。学位を得、専門技術を学ぶことによって、手を下せる領域はほんの少し広がるでしょう。しかし、本当の癒す力は神からの賜です。人が自分でできることをすべて尽くしてもまだ足りないとき、神は人を

益し祝福するために、神権の権能を通して神の力のいくらかを行使できるように計らってくださいました。」

心臓外科医であるネルソン博士は、人が無力であるときに神権の力が働くのを数々見てきました。しかし、また別の神聖な原則が働くことをも見てきました。

「もし、祝福がいただきたいなら、その祝福の基づく律法に従うことです。」

彼は、スペンサー・W・キンボール大管長から手術前に祝福を頼まれたときのことを例にあげてこう語ります。「予言者は祝福のあとで、『その祝福が実現するように、なすべきことをどうぞ続けてください』と言いました。」

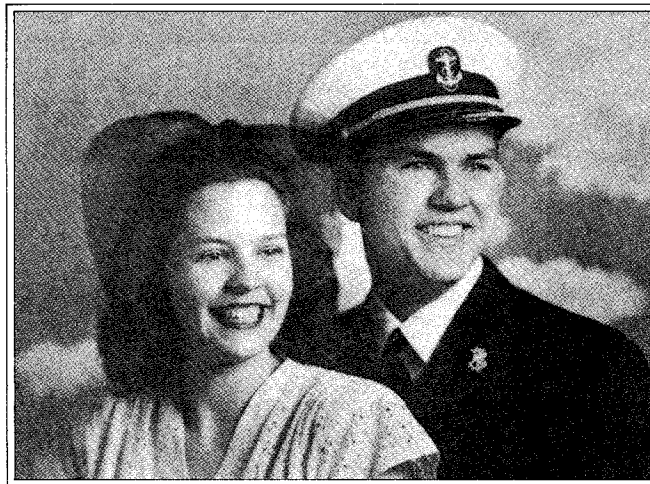
新たに使徒に召されたネルソン長老はこう語ります。「私は40年間、神が創造された肉体に直接かかわる仕事をしてきました。そしてそれは、100パーセント神の律法にかかわる仕事でした。疑う余地のない永遠、永劫の律法です。そしてその律法は手術の仕事に応用されるのと同じように、使徒の召しにもあてはまります。」

そうした経験が備えとなって、ラッセル

ル・M・ネルソンは1984年4月7日、十二使徒定員会会員に召されました。彼は召しが来るずっと以前から、職場や家庭で神の律法を尊重し、それに従うことを学んでいたのです。ネルソン長老は先祖が残してくれたものに負うところが大きいと語っていますが、曾祖父母の8人全員がヨーロッパで教会に加わり、ユタへ移住し、エフライムの町に入植しました。彼らの勇気と熱意は、子孫に同様の心をはぐく育んできたのです。

ネルソン長老は1924年9月9日、マリオン・C・ネルソンとエドナ・アンダーソン・ネルソンを父母として、ソルトレーク・シティに生まれました。少年時代はたくさんのことに関心を持ち、10歳で父が経営する広告会社の使い走りをしました。のちには銀行や郵便局、写真スタジオでアルバイトをしました。音感に優れていたため、高校、大学までは合唱団で歌い、音楽劇に出演し、四重唱では賞も得ました。ピアノを弾き、チームで弁論大会にも出場しています。

ネルソン長老はそのほかにもいろいろな活動を得意としましたが、フットボー



「それまで会った女性の中で最も美しい人」と呼んだダンツェル姉妹と共に。婚約直後の1945年撮影。

ルのコーチは、試合中一度も彼をベンチから出してくれませんでした。「ひとつには、私に手をかばいたい気持ちがいつもあったせいだろうと思います。スパイクで踏みつけられるのが恐かったんです。」その彼の手が、40年ほど後になってコーチに手術を施したのです。

彼は大学在学中に、医学を学ぼうと決心しました。成績は優秀で、何度も優等生に選ばれ、1945年6月に文学士号を受けました。このときにはすでに医学大学院の1年に入学しており、彼は4年間の課程を3年で終了しました。こうして1947年8月に首席で卒業した彼は、22歳の若さで正式な医師の資格を得たのです。

その間、ネルソン長老はダンツェル・ホワイト嬢と出会い、結婚しました。参加を誘われていた大学の音楽劇でリード・ソプラノを歌っていたのが彼女でした。彼女と会い、歌声を聞いて、ネルソン長老はすっかり夢中になりました。「それまで会った女性の中で最も美しい人だと思いました。すぐに、結婚するのはこの人だと感じましたね。」彼が音楽劇に出演するつもりになったことは言うまでもありません。それから3年後の1945年8月31日に、ふたりはソルトレーク神殿で結婚しました。ダンツェルは学士号を取り、第一子が生まれるまで教職に就きました。

ネルソン博士がミネソタ大学のインターンであったとき、彼のチームは医学史に残る業績を上げました。心臓手術中に患者の心臓と肺の機能を代替する器械を、3年の歳月をかけて初めて開発したのです。1951年に、その器械を使って初めて人の開胸手術が行なわれました。

4年後にはネルソン博士によりソルトレーク・シティーで初の開胸手術が成功し、ユタ州は合衆国第3番目の州として、この重要な里程碑に名のりをあげたのです。

彼はこの画期的な業績を、神の律法に従ったおかげであると語っています。「医学大学院に入学したての当時は、人の心臓はいじってはならない、拍動が停止するから、と教えられました。しかし教義と聖約88章36節には、『すべての王国にはみな一つの律法を与えらる』とあります。そ

れで、心拍という祝福も律法に基づいていると思ったのです。それらの律法を理解し、コントロールすることができれば、おそらく病人のために役立つだろうと考えました。

ということはつまり、科学実験の中で課題を探求し、研究していけば、心拍をつかさどる律法をつきとめることができるといことです。今はそうした律法のいくつかが明らかになっていますので、拍動を止めて、損傷した弁や血管を慎重に修復してから、また拍動の開始ができるということがわかっています。」

ネルソン長老はソルトレーク・シティーへ戻るまでに2年間、朝鮮戦争中に陸軍で医務に就き、韓国と日本、その後はワシントンD.C.のウォルター・リード軍医療センターで働きました。そののち、ボストンのマサチューセッツ陸軍病院に1年勤務し、ミネソタ大学に復帰して1年後の1954年に博士号を得ました。

ネルソン博士はユタへ帰ってからも、研究、教育、手術を続けました。公務も忙しく、地域や国内外で専門を生かし、さまざまな要職を務めました。おもだったものは胸部外科指導区会会長、アメリカ胸部外科委員会委員長のほか、ソルトレーク・シティーの教会付属病院では胸部外科主任および副病院長の職責にありました。受けた栄誉の一例をあげれば、アメリカ心臓協会からの「国際奉仕活動表彰状」、アメリカ功績アカデミーからの「黄金プレート賞」などがあります。

彼は長年にわたり、教会幹部や社会の指導者を含む大勢の人々の心臓に直接接触してきました。1972年にはスペンサー・W・キンボール長老の心臓手術を手がけ、そのあと、自分が手を下したその人がいつの日か教会の大管長になるという証を受けたのでした。『心臓外科医ラッセル・M・ネルソンと従順』「聖徒の道」1983年4月号参照)

医療の道から全時間の教会奉仕に転換する現在、ネルソン長老の心境はどうでしょうか。「奉仕できるこの特権が待ち遠しくてならないのですよ。」彼はそう言ってにっこり笑いました。「私に会いたいと思う人たちに来ていただけることは、ど

んなにかいいことだろうと思っているのです。これまではいつでも、来たくはないのに来ざるを得ない人たちとばかり、病院でお会いしていました。これからは、務めの大半が楽しいものであると思います。」

彼にあつては、人生の一章を閉じるいくばくかの悲しみが、次に始まる章への期待によって和らげられています。「私は何年も前に、N・エルドン・タナー副管長から、振り返らないということをお教わりました。『懐古メガネ』で振り返り、もしあのときああしていたならと過去を悔やんではならないということです。ですから、もう過去を忘れます。その時々になんかの機会はありましたし、私にとっては良かったか、失敗したかのどちらかです。自分は最善を尽くしたと自覚して、これまでの生活に決別します。」

ネルソン長老は、教会活動にも始終最善を尽くしてきました。合衆国が戦争中であつたため、19歳でフルタイムの伝道に出る機会はありませんでしたが、以来、彼は多くの機会を見つけて宣教師となりました。あるときひとりの看護婦にほかの外科医となぜ違うかと問われ、彼女に教会を紹介しました。彼女はほどなくバプテスマを受け、のちにその子息が伝道に出ました。

また同僚の夫妻が教会に興味を持ったので、いくつかの原則を説明し、モルモン経を貸しました。1週間後に、彼らは丁寧なお札を言ってモルモン経を返してきました。「ほんとにありがとうって、どういこと。」ネルソン長老はふたりの友人に尋ねました。「この本を読んだにしては実に不似合いな返事だよ。読まなかったんでしょ。どうかもう一度持って帰って読んでよ。そして、返すときにはもっと気の利いた言葉を聞かせてください。」

夫妻はモルモン経をざっとしか見なかったことを認めて、ネルソン長老の勧めに従いました。それから3週間後、彼らは目に涙をにじませて本を返してくれました。「この本は確かだね。もっと知りたいんだが、どうしたらいい？」

青年医師はほほえんで答えました。「本

を読んでくれたことがわかったよ。さあ、ではこれからだ。」やがて夫妻はネルソン長老からバプテスマを受けたのでした。

ラッセル・ネルソンは、医学研究と専門の職務に忙殺されながらも、教会の責任を誠実に果たしてきました。日曜学校や祭司定員会、監督会、高等評議員会で働き、10年間テンプルスクウェアの宣教師も務めました。またステーキ部長、中央日曜学校会長、地区代表としても働いてきました。

しかし、いかに優先すべきものがほかにあったとしても、彼の心は常に家族の上にあります。あるとき、国内誌の記者から9人の娘とひとりの息子を持つ珍しいネルソン家の写真を撮りたいと言われ、そのときネルソン博士はこう説明しました。「私たちは、人生一番の目標はしっかりした家庭を作ることだと考えています。教会や社会での奉仕も、学び続けることも、仕事の苦勞も、みな家族の発展、子供たちの成長のためです。」

記者は驚きました。「いや、しかしこの前のインタビューでは、『まず神の国を求めなさい』（マタイ6：33参照）という聖句にご夫婦で従うように努めてこられたとおっしゃいました。それが、家族が第一だと今言われるわけですが。」

「記者はしてやったりと思ったのでしよう。でも、私はずっと以前からの優先事項を改めて思い返して言いました。『主から授かった家族をまず愛し、大事にしなければ、神の国を求めることはできません。まず妻を愛し、大切にしなければ、家族を大事にすることもできません』と。」

勉強や研究を続けたいと望む彼を支え、困難な時期に貧しさを嘆くこともせず、「家庭の中心」であり続けた妻のダンツェルを、ネルソン長老はたたえ、感謝します。

一方ネルソン姉妹は、彼こそが自分を支えてくれたと語ります。「彼の人生に一番大切なのは私なのだと、感じる事ができるのです。子供たちに母である私を粗末にさせず、口答えも決して許さない人でした。いつも、『母さんは我が家の女王様だ。何なりとお望み通りにいたしま

しょう』と言うんですよ。いつもそんなふうに支えられてきました。」

木曜日は彼女がしたいことをする日です。毎週木曜日の午前中は教会付属病院でボランティア活動を行ないます。また1967年以来タバナクル聖歌隊のメンバーとして、木曜日の夜の練習に参加しています。「夫はこれまで、毎週木曜の夜だけは何とか都合をつけて、家で子供たちと一緒にいてくれます。」

ハロルド・B・リー大管長が、それほど多忙な人の妻であるのはどんな気持ちか、ネルソン姉妹に尋ねたことがありました。その後リー大管長は、そのときの彼女の返事をよく引き合いに出したのですが、ネルソン姉妹は、「帰宅したときは、家におりますもの」と答えました。

「家では、彼の心にあるのは家族のことだけです。」ネルソン姉妹は言います。「テレビを見るよりも、食事の支度を手伝ったり、お皿を洗ったり、子供の宿題を見たり、寝る前に本を読んでやったりしています。夫婦ふたりの時間も楽しめます。」

これから、彼女の役目は変わると思うのでしょうか。「きっと気持ちは違うでしょうね。医療でなくて、すべて教会の仕事に向けられるのですから。でも、私の役目は前と同じ、彼を支えることです。彼の伴侶として、一緒に働けることを誇りに思っております。」

子供たちの思いもネルソン姉妹と同じです。父親が自分たちを愛していることを一度も疑うことなく、一人一人が自分こそは愛されている子だと感じています。「忙しすぎてかまわれないって感じたことはないですわ。よく一緒にいろんなことをしました」と、娘のエミリーは言います。

ネルソン長老は忙しいスケジュールでありながら、時間を作ってそれぞれの子供と着実な関係を築いてきました。各地を旅行することが多かったため、毎回ネルソン姉妹かひとりの子供をその旅行に伴いました。彼はそれを、ぜいたくではない、賢明な投資であると考えました。

「そういう旅行のおかげで、彼らの問題や希望にじっくり耳を傾ける機会が持

てたのです。ただおしゃべりをしたり、考えや経験を話し合ったり。」

ネルソン家の子供たちにははっきりした日課があります。午前6時30分に聖典を読むこと、6時45分と毎食前と午後10時の家族の祈り、そして週に1度の家庭の夕べ。子供たちも皆親ゆずりの音楽好きで、合唱を楽しみます。ピアノやバイオリン、ギター、アコーディオン、フルートの音色がこの家を包んできました。

待ち遠しいのは休暇です。冬にはスキーをします。(ネルソン長老の言葉によれば、スキーは「どうしようもなく好きなもののひとつ」です)夏は水上スキーや水泳、テニスをします。毎年、馬の遠乗りにも出かけます。「ついて来た子をひとりずつ前に乗せて走った思い出は、なつかしいかけがえのない思い出です。」ネルソン長老は語ります。「子供の髪に鼻を埋めて、体をすっぽりと抱き包んで。きっと子供たちは馬から落ちないように私がしっかり押さえてくれていると思ったでしょうね。しかし実のところ、順番に子供とふたりきりになるその貴重な瞬間を



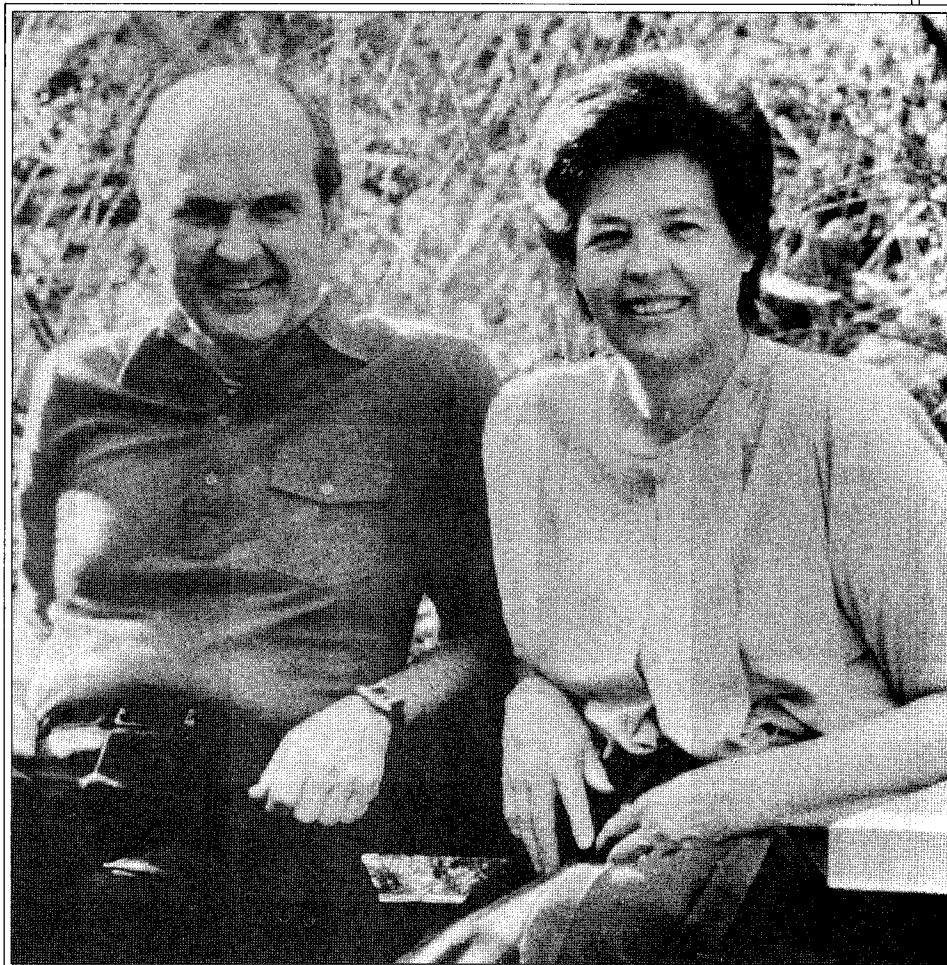
高性能拡大鏡とスポットライトの下、手術中のネルソン医師

心にしっかり焼きつけておこうと、夢中だったんですよ。乗るたびごとに、私はこの子の父親なんだというすばらしい特権を天父に感謝しました。どの子も私にとって特別な霊でしたから。」

ネルソン夫妻は、それぞれの子供たちを祝福であると感じています。1972年に第10子として初めて息子を迎えましたが、その17年前のある夜にネルソン姉妹はひとつの経験をしています。「ただの夢ではなかったと思っています。」それは、いつの日か息子を得ると確信させる経験でした。1972年のある夜半にネルソン長老もある経験をしました。「今度ダンツェルがみごもっているのは、以前に妻に現われていた男の子だとわかったのです。」ラッセル・ジュニアが生まれて、父親がその知らせを電話で家に伝えると、娘たちから歓声が上がりました。

今では家に余裕があります。残っているのは18歳のマージョリーと12歳のラッセルだけになりました。マーシャ（クリス・マッケラー夫人）、ウェンディー（ノーマン・マックスフィールド夫人）、グロリア（リチャード・イリアン夫人）、ブレンダ（リチャード・マイルズ夫人）、シルビア（デビッド・ウェプスター夫人）、エミリー（ブラッド・ウィットワール夫人）、ローリー（リチャード・マーシュ夫人）、ロザリー（マイケル・リングウッド夫人）の娘8人は既婚者で、ネルソン長老夫妻には22人の孫があります。

予想に違わず、ネルソン家は一族の親睦のために方法を講じています。「ネルソン家だより」は、家族からの投稿や大切な行事などを載せた月刊の家族新聞です。毎月1回夕食会を開き、その月の誕生日や記念日をまとめて一緒に祝います。祝われる人たちの名前をデコレーションケーキに書き、ネルソン長老がその写真を撮って欠席した人に送り、その人の誕生日をみんなで祝ったことを知らせます。娘たちが何人か家を離れてから、ネルソン長老は空き部屋のひとつを書斎に変えました。「妻のアイデアだったんです。それぐらいの道楽はしなさいと言われましたよ。」書斎には写真の設備や科学研究用のコンピューター、ワードプロセッサ、



教会図書や科学書を取めたライブラリーがあります。

彼の1日は自分のための1時間から始まります。「私が一番に起きます。ひとりで聖典を読み、祈りをし、30分位は讃美歌やヨハン・セバスチャン・バッハをオルガンで弾きます。ですから朝出かけるときには、聖句や美しい音楽といった良いもので心が満たされています。それが何よりの良いスタートです。」

ネルソン長老個人の準備や、教会や家庭での様々な経験や職業は、みな彼の証を強めるもととなりました。これまでの人生を医の律法とともに歩んできた彼は、自分の信仰をキリストの弟子としてだけでなく、科学者の目でも見つめています。「外科医というのは、神の最高の創造物のひとつである人体について知るうえで、ユニークな立場にあると思うのですよ。人体の各部分が、私には信仰を深めるもと

となっているんです。

それに、イエス・キリストについてのもうひとつの証であるモルモン経の大きな説得力があげられます。モルモン経については、予言者ジョセフ・スミスの説明を読めば、ほかの説明は無用です。」

ラッセル・M・ネルソン長老は、心臓外科医として働いたその同じ熱意と精力と献身を十二使徒定員会に捧げることでしよう。

しかし彼にとって、新しい召しは新たな側面を持っています。「私は神と御子イエス・キリストに深い確かな信仰を持っています。今携わっている仕事は、世の中で最も重要な仕事です。すべてを包含した、実に充実した手ごたえのある仕事です。ベストを尽くさなければならないと思っています。この管理の職は主から託されたものですから。」

# 瓶の中のイーグル(鷲)

クレイグ・J・スミス

**1** 本の瓶から貴重な教訓を得るとは、だれが考えつくだろうか。忘れられないあの春までは、私にも、とても考えられないことだった。あの春は、もし全部が予定通りにいけば、じきに3年近く努力してきた目標が達成されてイーグルスカウトバッジがもらえるという特別な春だった。

その喜びにもましてうれしいのは、賞を親友と一緒に受けられることだった。私たちは幼い頃からまるで兄弟のようにして育ててきて、スカウト活動に参加するのも例外ではなかった。テンダーフットの階級からだいたい同時に進級してきた、同じときにイーグルスカウトになれるのを楽しみに待っていた。

ただひとつだけ、一緒にできないことがあって、それはイーグルスカウト評議会による面接という難関だった。地区の指導者の中から選ばれる2、3人の評議員から個別に面接を受けるのだ。そこでは、イーグルの階級、スカウト活動全般、国に対する考え方、イーグルスカウト奉仕活動などのことについて評価をされる。中でも奉仕活動は地域に貢献する立派な仕事でなければならず、イーグルの階級に達する最終関門だった。私は自分の活動計画が確実に通るように、前もって数人の地区指導者に提出して見てもらい、大丈夫だろうという保証を得ていた。

待ちに待った当日の夜がついに来て、友と私は評議員の前に立つこととなった。面接室のひとつに呼ばれて行くまでの待ち時間が果てしなく長く感じられた。考えることといえば、イーグルの階級を得るためにこれまでどんなに頑張ってきたかということと、あと数分で、成功か失敗か、自分の懸命な努力の結果がわかるということだけだった。

永遠のように思われた10分の後、ついに私が呼ばれた。友は私のすぐあとで隣の部屋に入った。評議員は2、3分話をしてから奉仕計画のことを私に尋ねた。それについて詳しいことまで話し合ってから、彼らが審議する間、私は外に出された。その時間に比べれば、面接までの待ち時間は、何と気楽だったことか。

やがて面接室のドアの開く音が、廊下の重苦しい沈黙を破った。私は両親と隊長と一緒に中に入るように言われた。評議会の議長が私に、スカウト活動の最高の段階まで到達できたことの賛辞を述べ始めた。それはすばらしいほめ言葉だったが、心のすみでは、「しかし……」と彼が続けるのを想像しないわけにはいかなかった。だがその悪夢が実際に起きるとは、少しも感じなかった。評議会の議長が丁重な賞賛の言葉をしばらく述べた後、「しかしながら、あなたの奉仕活動は、イーグルバッジを授与するまでにはいささか及ばないと思われます」と言った。私は平手打ちを食って地面に張り倒されたような、生まれて初めての屈辱を感じた。体中の力が抜けた。そこからは、彼らは何を言ったか、まるで覚えていない。何も感じず、何も考えなかった。ただ、さっきまで胸ふくらませて待っていた部屋を通り過ぎるとき、イーグル志願者たちの前で涙を見せるのが非常に気になったことを思い出す。それから、3年もの間一緒に頑張ってきた親友が、評議員の前を晴れやかな様子で通るのを耳にしたことも覚えている。彼は今度の授賞式で、自分を加えずひとりだけでイーグルバッジを受けるのだ。そのときの挫折感、屈辱感は言葉ではとうてい表わすことができない。イーグルスカウトへの階段のほんの小さい1段、もう当然と思っていた

その1段が、目標到達をさえぎったのだ。この克服できそうもない痛手から、自分は立ち直ることができるだろうか。そうだ、父が何か言ってくれたらきっとできる。

それから数日して、父からドライブに行かないかと誘われた。そのときは別にすることもなかったのに、「行くよ」と答えた。どこへ行くのかわからなかったが、行き先はじきに知れた。車が近所にある瓶工場に近づいたとき、これという理由もないのに、そこが目的地だとわかったのだ。私たちはガラス瓶製造の最初の建物に入った。父は、ガラスの原料となる砂の山を教えてくれた。白熱した大粒のしずくが瓶型に流れ落ちるのを、ふたりでうっとり見つめた。

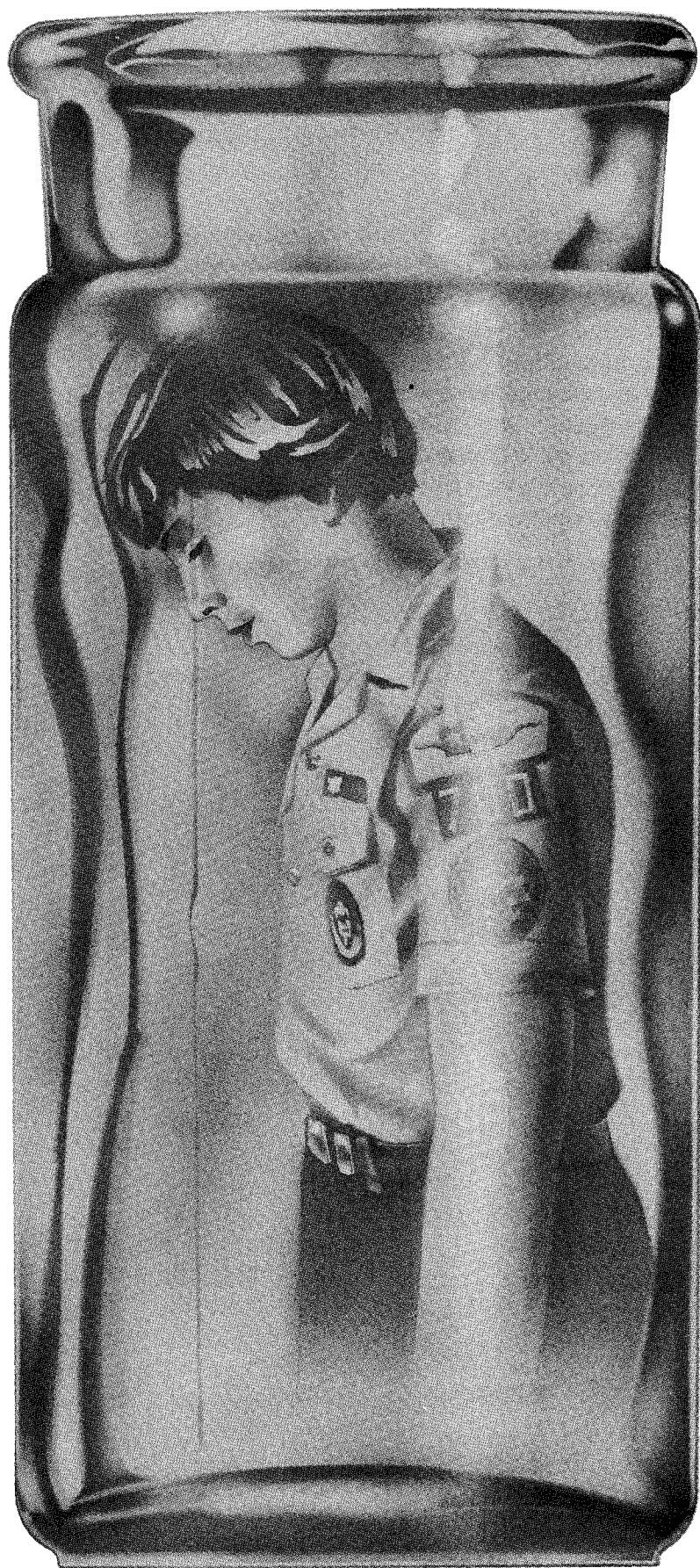
父は機械の一つ一つが、瓶の完成に向けてどういう働きをしているのか説明しながら、全工程を見せてくれた。その終わり近くに、おもしろい装置があった。それはひと瓶ずつに高圧をかけて、「安全な使用」ができるかどうか、強度を試験する装置だった。圧力を加えられてたくさん瓶が壊れた。父は、見学の記念に、廃棄処分になる瓶をひとつもらって帰らないかと言った。私は心の中で、「父さん、見学はとてもおもしろかったけど、瓶1本をもらって行って、これからの人生にこのことを思い出すのがそんなに必要かな」と思ったことを覚えている。

私は、その瓶がどういう意義を持つことになるか、少しも知らなかったのだ。父は帰り道で私の方を向いてこう言った。「クレイグ、イーグルスカウト評議会との面接のときの経験は、あの装置と同じなんだよ。瓶とおんなじに、君は高圧をかけられた。そのあとは君次第だ。圧力で割れるか、持ちこたえて、圧力をはね

返すか。立ち直れば、君はもう友達に追いついている。しかもこれからの人生は、彼にはなかった障害を君が乗り越えて余分に得た力のおかげで、彼をしのげるかもしれないんだ。」

私は父のその言葉を聞いて、ありがたいと思った。苦痛を和らげる手だてを与えてくれた父に、心から感謝した。しかし、私とその経験の意味するところを余さず理解したのは、それから数年あとのことだった。自分の父親は特別だ、特別な人だと知ったのである。父はわざわざ時間を取って瓶工場を案内してくれたのだが、おまけにその着想は父独自の創造的思考が生み出したものだった。同じような状況のもとで、ただ「残念だったね。てっきり合格だと思っていたのに」とか、「もう一度頑張ってみるんだ。別に約束があるから、父さんはもう行ってもいいかな」と言う父親もいるだろうに。

瓶工場で私が学んだ教訓は、そのときばかりか今もなお貴重である。そのおかげで、やがて私はイーグルバッジを手にし、あの日拾った不良品の瓶は、大事な財産のひとつとなっている。しかしそれよりもっと大切なのは、息子が問題を抱えていると知り、その息子が問題を乗り越えるように手伝ってくれた父が身をもって示してくれた教訓である。それは何と独創的な方法だったことか。教えてくれた方法の奇抜さと、実に効果的だったことで、あれから9年以上たってもまだよく覚えている。私に子供ができたなら、父の模範に従って自分も時間を取り、第一の事をまず第一に行なうことができるようになりたいと思う。



# 墜落

スティーブン・R・アフレック

どれくらいの間眠っていたのかわかりませんが、思わず目が覚めてしまいました。私たちの乗っていた小型双発機が、乱気流のためにひどく揺れたからです。晴れていたはずの夜空も、曇り空に変わっていました。操縦士のマイクの方に目を向けると、やはり心配そうな表情をしています。マイクは操縦装置を調整し、飛行計器を点検している最中でした。リズムカルだったエンジンの音も不規則な音に変わっていて、いかに飛行経験の乏しい私でも、不安にかられる思いでした。何かしら異状のあることは私にもわかりましたが、マイクの表情をもう一度見ると、私の恐れもいよいよ確かなものになってきました。

マイクは、無線でソルトレーク・シティのレーダー基地を呼び出しました。そして、様々な計器の圧力が下がっていることや高度が落ちていることを説明しました。私は何も言いませんでした。この時点では、それほど大きな心配はしていなかったからです。むしろ、自分たちが現実に危険な状況に直面しているという事実を努めて考えないようにしていたのです。マイクは、再びソルトレークのレーダー基地と交信しています。「キャブレターに氷が付着し始めているんだと思う。まるで石ころみたいに落下中だ。」

私はまるで興奮剤でも注射されたような気持ちになりました。これ以上眠ってられるでしょうか。私の思考は停止していたのです。しかし、揺れもやまず、飛行機の高度計の数字がどんどん減っていくのを見つめていた私は、これは夢ではないのだと、すぐに認識しました。

その日の夕方早く、マイクと私は、ネバダ州のラスベガスをユタ州のソルトレーク・シティに向けて離陸しました。私たちは仕事のことで、アリゾナ州のフェニックスまで出張して来ていたのです。飛行機が高度4,500メートルまで達すると、私は一息入れているいろいろと考えま

した。今週の出張を無事終えたこともうれしいことでしたし、妻のカリンを驚かせることも楽しみのひとつでした。妻は、私の帰りは金曜日の午前中になると思っているはずだからです。

マイクと私は、これまでもよく一緒に飛行機で旅をするがありました。マイクは私の親友ですし、パイロットとしても絶対的に信頼のおける、また慎重な人物でした。ですから、ソルトレーク・シティへ飛んで行く準備をしているときも、まったく気楽なものでした。私は大空を飛んでいるとき、夜空というのは本当に美しいものだとことに気がつきました。足下に地球を見、頭上に神様のお造りになったものを見ていると、私は何かしら、神様の近くにいるような気持ちさえしたものです。

私はよく、神様はどのようにして、ご自身の造られたもの一つ一つに心を配ることができるのか、不思議に思ったことがあります。神様はどのようにして、子供たち一人一人の祈りを聞き、さらにその一人一人に個別に関心を持つことができるのでしょうか。こんな様々なことを考えていた私は、単調なエンジン音の誘いもあって、思わずうとうとしていたのです。しかし、今は眠いなどとは言っておられません。ますます募る不安の中で、マイクが何とかして飛行機の体勢を立て直そうと必死になっているのを、じっと見つめていました。

時間がたつにつれ、安全に不時着できるような方向に進んでいないことが、ますますはっきりとしてきました。険しい山岳地帯に向かってひどい速度で落下していたのです。周囲は真っ暗やみ、聞こえるものといえば、失速警告信号のけたたましい響きだけ。計器は、この飛行機が安全飛行速度をはるかに下まわる速度で飛行中であることを示しています。私は何とも形容しがたい無力感に襲われてしまいました。

突然、私は冷酷な現実気づきました。自然の法則や重力、空気力学の法則といったものは、決して人を差別しないという現実です。自然の力というものは、何が公平かなどということとは無関係だし、ましてや、もしマイクと私がここで事故死したら、それぞれの子供たちや愛する妻たちの人生は劇的に変化することになるだろうなどといったこととは、まったく関係がないのです。私はマイクに、いくらかでもソルトレーク・シティに到着する可能性があるか、尋ねました。「ないね。下降しているだけだ」というのがマイクの答えでした。そしてさらに、「何も感じないはずだ。一瞬のうちに死んでしまうから」とつけ加えたのです。

以前私は、死が避けられないと知ったとき、人はどんなことを考えるものか知りたいと思ったことがあります。自分の一生の出来事が一瞬のうちに眼前をかすめるものか、とも考えましたし、また恐怖におびえる気持ちが起きるものか、とも考えました。

私の場合、自分の家族のことを考えました。私の8人の子供たちの顔が、一人一人の心の中に浮かんできたのです。7人のすばらしい息子たちと、たったひとりの娘。どうしてこんなことが起きるんだろうか。あの子たちには父親が必要だし、私にもあの子たちが必要だというのに。疑うことを知らない妻のことも考えました。妻は気丈に振る舞ってはくれるでしょうが、心の痛みをひどく感ずるに違いありません。妻のことを思い、また、その寂しさを思うと、私は悲しくなっていました。私はまた、天使のような母とその母が受ける悲しみのことを思い浮かべました。また、父が一人一人を慰めようとしている姿も心に描くことができました。私はそのとき、何か不思議な気持ちになったことを今でも覚えています。また自分自身、恐れの手持もなく、狂乱状態にもならなかったのは本当に驚き



でした。むしろ、あとに残される人々のことを思って悲しんでいたのです。まだ到達していない目標のこと、そして、まだ果たしていない約束のことも考えました。こうした様々な考えやそのほかのことは、ほんの数秒のうちに凝縮されて脳裏をかすめたのです。それはまるで私が思いめぐらすことができるように、しばらく時の方でゆっくり進んでくれたような感じでした。

私はマイクの方を見ました。マイクの精神力と集中力には、相変わらず驚かされます。マイクは、「スティーブ、ぼくたちのために祈ってくれないか」と言いました。私はそれまでも祈っていたのです。しかし、マイクに祈ってくれないかと言われた私は、突然はっきりと気づきまし

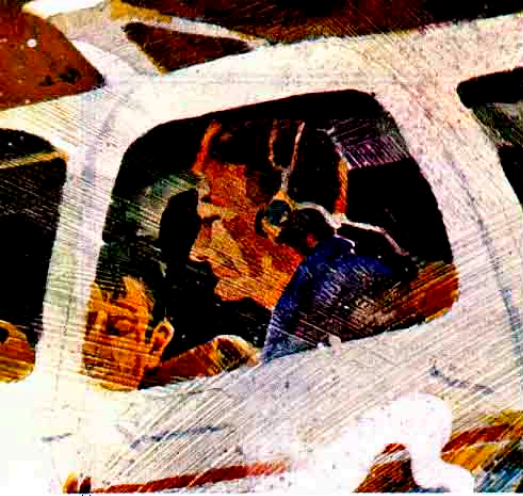
た。今はマイクの受けた飛行訓練も、経験も、私たちの生命を救う役には立たないということに。マイクは、天の力を呼び寄せる責任を私に託していたのです。彼は、間に立って私たちの運命を左右できるお方は主しかおられないことを理解していました。マイクは、主のみ手のうちにあつて、その器となるだけだったのです。

私は再び祈りました。しかし、このたびはかつてなかったほどの熱烈な思いを込めて祈りに集中しました。私は、ただ神様だけが私たちの寿命を左右できることを知っていたのです。私はまた、神権の権能を呼び求めるよう、強く心を動かされました。ですから私は祈りの中で、聖なる神権の権能によって、飛行機にこ

のまま飛行を続け、私たちを守るよう命じたのです。私は、自分の大胆さにいささか驚きましたが、しかし、確かにその祈りは正しいという平安な気持ちを得たのでした。私は、信仰というものが必要なら、それを行使しなければならないときは今をおいてほかにないことを知っていました。私たちはふたりとも、恐怖におののくようなこともなく、安らかな気持ちに満たされていました。

祈り終わって窓の外を見ても、相変わらず何も見えません。エンジン音はますます不調になるばかり。大変な速度で高度も低下しており、失速警告信号も依然として鳴っています。これが最後だろうと、ソルトレーク・シティのレーダー基地と交信し、現在の位置と高度を教え





てくれるよう頼みました。すると、すでにこの空域の安全飛行高度をはるかに下まわっているとのこと。山頂は、すでに私たちの頭上にあったのです。

マイクは私に怖いかどうか尋ねてきました。私が、ただカリンと子供たちのことを気の毒に思うだけだと答えると、マイクも、自分もやはり同じ思いで家族のことを考えているという返事でした。私たちは、これまで固い友情で結ばれてきたことを、お互いに感謝し合いました。そして私たちはその時を待ったのです。

私は窓の外に目をやり、何も見えないながらも一心に地面を捜しました。翼の先端についている閃光灯が光った瞬間、翼のすぐ先ほんの数メートルのところに、険しい山の頂が見えたのです。機体は左に旋回しました。マイクが翼を水平に修正している間に、下を見ると地面が見えます。ひどい速度で落下していくのに驚かされました。激突まであとほんの数メートルです。

その直後に起こったことで覚えていることと言えば、機体が地面にたたきつけられる音とその衝撃でした。最初のひどい衝撃で私は前へ投げ出されたようです。顔を何かにぶつきましたが、意識ははっきりしていて特に痛みは感じませんでした。機体は完全な暗やみの中を滑走しています。それはまるで、初めて来た家の中を目かくしされたまま走るようなもので、いつか何かにつまずくか、壁にぶち当たるかするのだらうと思いました。

機体はまだ滑走を続けています。一体どれくらい滑走したら、岩か立木か、あるいは山腹に激突するのか。私は当然次の衝撃が来るものと覚悟していました。しかし、何の衝撃も来ませんでした。機体はその滑走を終えて止まったのです。

こうして、あたりは完全に静まりかえりました。

急いで外に出なければなりません。爆発の恐れがあったからです。私たちは暗やみの中へはい出て、機体から遠ざかりました。このとき初めて、私は自分がけがをしていることに気づきました。前頭部のけがのため、おびたしい量の出血をしていたのです。でも私は生きていました。私には、主が私たちを救ってくださったのだと、はっきりわかりました。

マイクは、どこにもけがをしていませんでした。彼は間髪を入れずに、私に応急処置を施してくれました。私は額から血が流れ出ているのがわかりましたし痛みも感じてきましたが、その痛みは何か、自分が生きているという証のように思えたものです。私たちは共に、命が救われたことを天の御父に感謝しました。

状況を分析してみると、マイクはすぐにも救助を求めに出発した方がよいと考えました。私が「どうも目がかすんで見える」と言ったために、脳内出血でもあるのではと思ったからです。もしそれが事実なら、一刻の猶予もできないことをマイクは承知していました。機体からガソリンの漏れがないかどうかを点検し、もう火災の危険はないと判断したのでマイクは私に手を貸して、もう一度機内に戻してくれました。そして毛布と寝袋を渡して、出かけて行ったのです。

私はどれくらいの出血をしたのかわかりませんでしたが、マイクがいない間も、何とかして眠らないでいようと努力しました。そこで自分の時計のアラームが15分おきに鳴るようセットして、目を覚ましていようとしたのです。私は書類入れの中に、日記をしまっておいたのを思い出しました。その中には、家族の写真も入れておいたはずです。書類入れを捜し出し、それを開けて日記を取り出しました。そして眠らないようにするために、15分ごとに家族の写真を眺め、日記に書き込みをしました。マイクがここを出たのが、午後11時30分。私は一晩中マイクのことを考え、無事を祈り続けました。

私が捜索機のエンジン音を聞いたのは、午前3時頃のことです。しかし、彼らが遭難現場に接近して、私の懐中電灯の信号に気づいたのは午前5時になってから

のことでした。操縦士は、翼をちょっと傾けて、私の信号を見つけたことを教えてくれました。私は間もなく救出されるのです。マイクが救助を求めてくれたに違いありません。

それから4時間後、救助隊とヘリコプターがようやくのことで墜落現場に到着しました。しかし救助隊は、マイクに会ってもいなければ、直接情報を聞いてもいないと言います。マイクが道路を見つけて、通りがかりの車に拾われて病院に収容されたのは、午前11時頃だったのです。私たちは、病院ですばらしい再会をしました。マイクは夜を徹して歩き続け、走り続けたのです。私がどんな状態にいるかは何も知らずに、ひたすら救助隊を遭難現場に連れて来たいと望んでのことでした。これは、真の兄弟愛と勇敢さを示す行為以外の何ものでもありません。

「君たちは幸運だっただけさ、百万にひとつの偶然さ」と言う人もいます。しかし私には、これが運不運の問題ではなかったことがはっきりとわかっています。私たちは、天父によって救われたのです。

あれ以来、私はよく天父はなぜあのよう to 助けてくださったのかと自問することがあります。同じような状態に陥りながら、亡くなった人もたくさんいます。もちろん、そのような人々も祈り、また生きたいと願ったに違いありません。主はなぜ私たちを心に留めてくださったのでしょうか。私はあの晩、墜落現場で一晩中このことを考えていました。そして私は、人間の寿命というものは、その個人の力よりもはるかに偉大な力で測られているのだという、静かな確信を得ることができたのです。マイクも私も、この地上での使命をまだ果たし終えていなかったのです。まだ死ぬよう定められてはいなかったのです。救出されるまでの10時間あまりの間に、私は主に感謝を捧げ、この生命という賜を、まず自分の家族の生活に祝福をもたらすために用い、次に、主の求めに応じてどこでもほかの人々に奉仕するために用いると約束したのです。

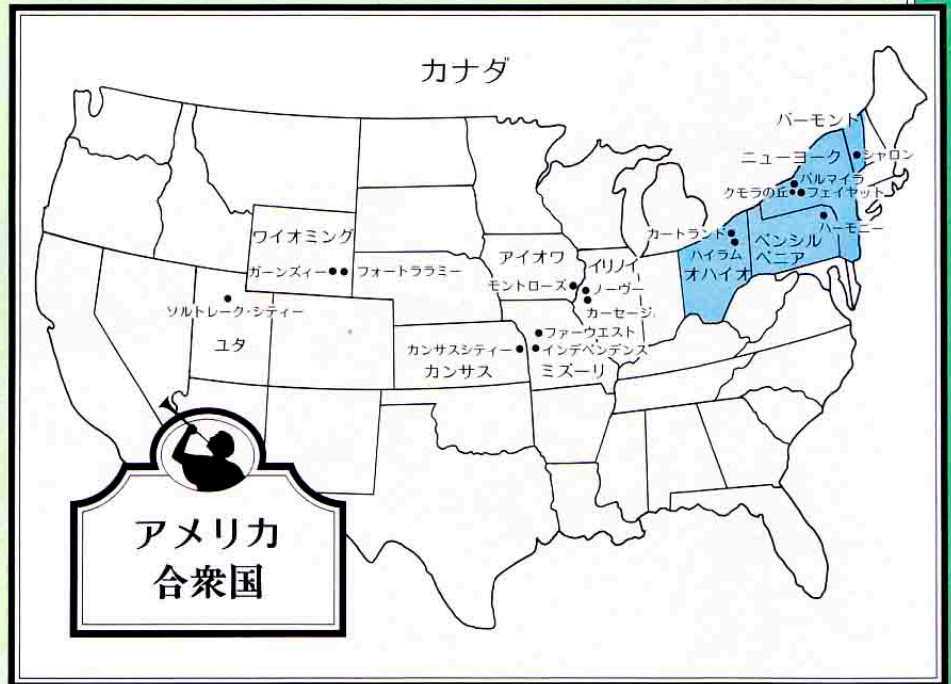
\* スティーブン・R・アフレックは、ユタ州サンディステーク部の高等評議員。マーケティングコンサルタントで、8人の子供の父親である。



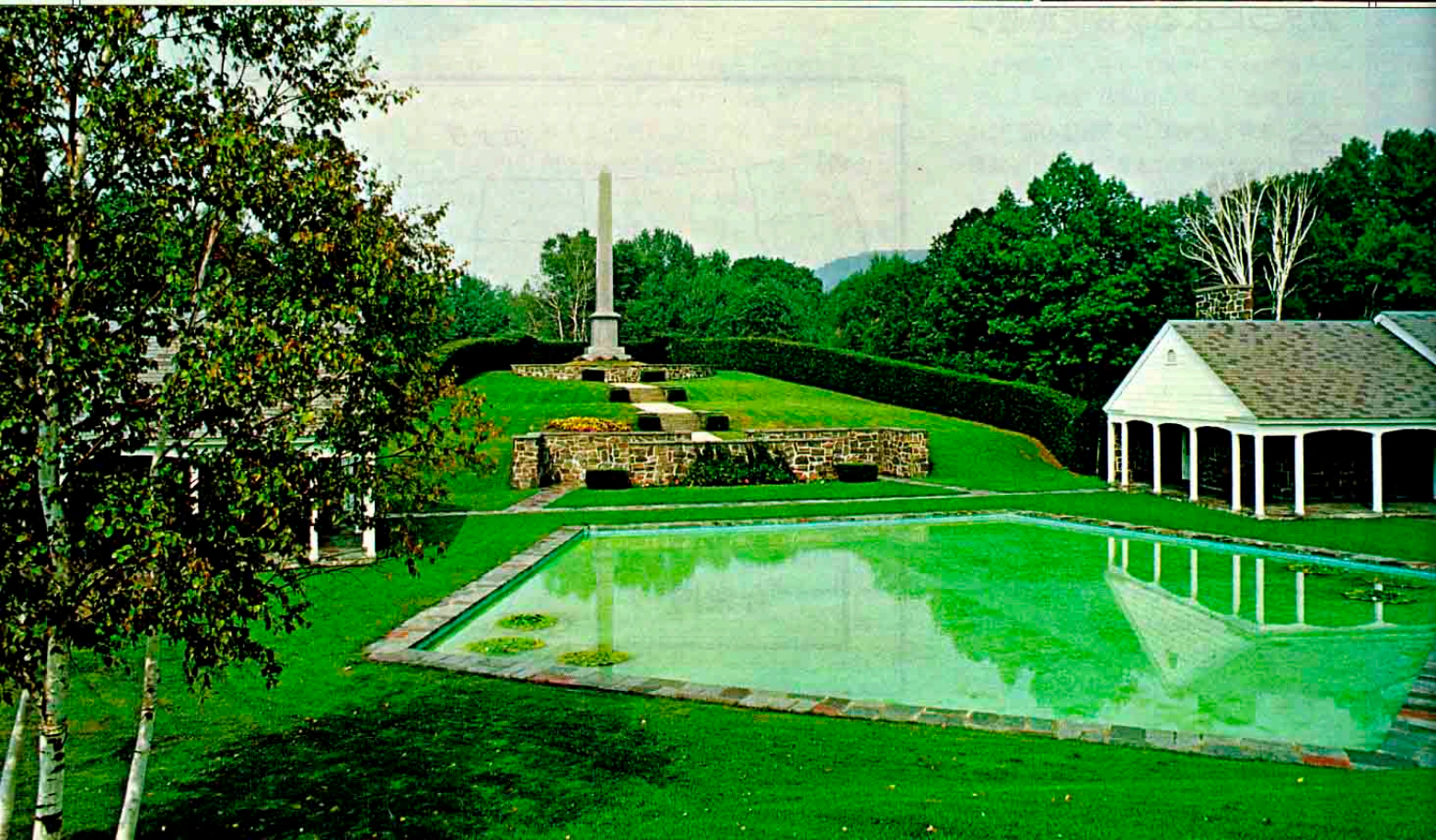
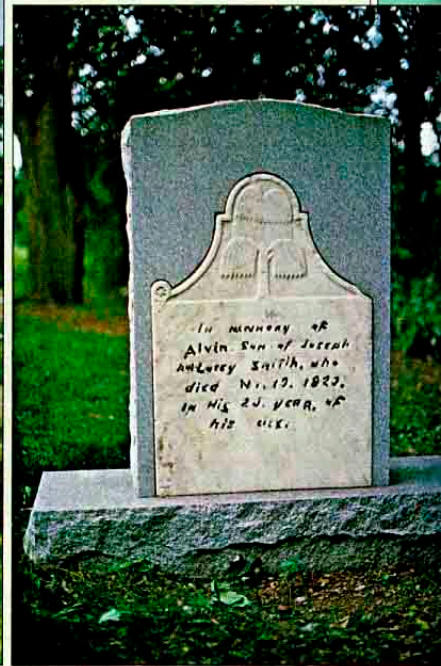
ニューヨーク州クモラの丘の航空写真。クモラの丘の記念碑は、写真中央左の樹木の群生している中にある。教会の訪問者センターは、丘のふもとに立つ樹木の右側、幹線道路からそれた所にある。

## あの場所は今 カメラによる教会史跡巡り

**今**月号を皮切りに、「聖徒の道」では今後、写真によるエッセイを掲載していく。教会史跡が現在どのようになっているのかを伝える企画である。この旅では、教会の成長発展に重要な役割を果たした場所を探訪して回る。聖徒たちが生活する舞台となった場所を見学し、予言者ジョセフが歩き、話し、そして死んだ場所を巡っていく。今月号では、まず、ニューヨーク州、ペンシルベニア州、バーモント州及びオハイオ州の特別な史跡を訪れる。今後、本誌のカメラは、聖徒たちの移住の足跡を追い、ミズーリ州、イリノイ州から、大平原を横断し、グレートソルトトレイク盆地まで至る予定である。今回の写真は、ジェド・A・クラークとロンジン・ロンクザイナ・ジュニアによって撮影されたものである。



左上：ニューヨーク州セネカ郡フェイヤットにある復元されたピーター・ホイットマー・シニアの家。教会は、1830年4月6日に、この建物の中で組織された。右上：粘板岩の笠石にはジョセフ・スミスとエマ・スミスの幼児のための花崗岩の墓碑がはめ込まれている。ふたりの間に生まれた9人の子供のうち、5人は幼児のうちに世を去っている。下：バーモント州シャロンにあるジョセフ・スミス記念碑の全景。記念碑を映し出すプールの両側の建物は、訪問者センターと宣教師用住居である。



上：ニューヨーク州パルマイラの大通り。写真中央の白い屋根の建物の中でモルモン経の初版本が印刷された。白わくの窓が12カ所にあるこの建物の3階では、エグバート・B・グランディン印刷会社が昔、店舗を構えていた。モルモン経を印刷した手動印刷機は、現在では、当教会が所有している。下：ペンシルベニア州ハーモニー近辺の田園地帯の航空写真。ここでジョセフ・スミスとエマ・スミスが生活した。また、モルモン経の翻訳の大部分がここで行なわれ、さらに、教義と聖約の中の15の章の啓示がここで与えられた。ジョセフとエマの家は、右手の道路にある灰色に見える駐車場の左側にあった。



上：オハイオ州カートランドにあるニューエル・K・ホイットニーの店は、今は宣教師が住んでいる。1823年に建てられたこの建物は、1年以上にわたって予言者とその家族の家として使用された。プリガム・ヤングは、この店の裏で木を切っていたジョセフと初めて会ったのである。

下：オハイオ州カートランドにあるこの美しい家は、ジョセフ・スミス・シニアとその妻ルーシー・マック・スミスがその晩年を過ごした家である。この当時のすぐれた木工品の一部は、今なおそのままの形で保存されている。





左：オハイオ州カートランドにあるニューエル・K・ホイットニーの店の2階。すぐ左のドアは、スミス家族の住居部とジョセフがおそらく翻訳をしていた部屋とに通じている。正面は予言者の塾として使用された部屋である。この部屋の中で、救い主の訪れを含む偉大な霊的な現われが起こった。

下：オハイオ州ハイラムにあるジョン・ジョンソンの家の玄関。聖書の改訳に従事している間、ジョセフはエマとこの家に住んでいた。予言者ジョセフが暴徒によってひきずり出され、コールタールを塗られ、羽毛をつけられた事件があったが、この家からひきずり出されたのである。









## 私を訪ねてくれる隣人たち

ノニー・ギルバート

これは愛の物語です。私は、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員ではありません。しかし、皆さんの教会の女性たちを、姉妹のように考えています。私がそう考える主な理由はふたりの人物にあります。レオラ・デュークとロレイン・スタダードがそのふたりです。

数年前のことです。私ども夫婦がユタ州ファーマントンに引っ越して間もなく、そのふたりの女性が私たちの家を訪ねて来ました。ふたりは、次のようなことを一気に言ったのです。私が正確に覚えていればの話ですが。「ごめんください。私たちはロレインとレオラといいます。近所に住んでいて、末日聖徒の教会の訪問教師です。できたら、これから毎月おじゃましたいんですが。霊的なメッセージについてはあなた次第です。伝えることもできますし、いやなら断わってください。でも、あなたさえよければ、ぜひとも私たちはおじゃまさせていただきたいと思っていますのですが。」

このときまで、いろいろなタイプのモルモンが我が家を訪ねて来てくれましたが、私はどうしても積極的に聞く気にはなれませんでした。私の方も若かったし、度量が小さかったせいもあるでしょう。モルモンというのは頭が固く、攻撃的な人たちだと思っていたのです。ですから、それまで訪ねてくれた人の中で「また来てください」と言われた人は、ひとりもいませんでした。

さて、突然現われたふたりの末日聖徒の女性。このふたりからは、まぎれもな

く、温かさ、愛、思いやり、関心といったものがほとぼり出ていました。だれが見ても、このふたりが真心からそう言ってくれたのは明らかです。私にはその理由が皆目わかりませんでした。なぜこのふたりは、私や家族のことに関心を持ってくれるのだろうと思ったのです。

明らかなことは、ふたりが確かに関心を持ってくれたという事実です。それ以来、毎月訪問してくれたからです。しかし私の方としては、ふたりがいずれ興味を失ってくれるだろうと考えていました。私がか家にいる時間に訪ねてくるのは、ふたりにとっても容易なことではありませんでした。私はかなり忙しい日程をこなしていましたし、そのうえ、なかなか予定も立たなかったからです。それでもふたりの熱意と、私をありのままに受け入れてくださる態度とに心を動かされて、私は次第にふたりの訪問を心待ちにするようになりました。

レオラとロレインが我が家の訪問を始めた頃、私はかなりひどいアルコール中毒でしたが、自分にそんな病気があるとは知らずにいました。しかし、私がそうした酒癖を克服しようと努力を始めてから、ようやくのことで快復のきざしが見えるまでの長い間、ふたりは私と一緒に、また私のために祈ってくれました。しかも、私ができるような状態にあることについては、完全に秘密にしておいてくれたのです。

批判めいたことも言わず、分別の押しつけもせず、ふたりは私の飲酒の習慣

や喫煙、そして不愉快な言葉遣いや意見にじっと耐えてくれました。腹を立てられても当然のような状態でした。しかし、ふたりには偉大な愛がありました。この愛は確かに神の導きを受けたものに違いありません。ふたりはこの愛の力で、モルモンに対する私のかたくなな態度を変えてしまったのです。ほとんどが末日聖徒のこの地域で、私は次第に自分が教会員として受け入れられているような気持ちになってきました。私には隣人もでき、友人もできました。それがたまたま私の訪問教師だったというわけです。

あの最初の訪問のとき、そしてその後の訪問のときも、ロレインとレオラの態度に少しでも不誠実なものが見られたとしたら、二度と訪問を受けることはなかったでしょう。しかし私は、ふたりが義務を果たすためにしぶしぶやって来ているという感じを一度も抱いたことがありませんでした。

レオラとロレインが私の訪問教師になってくれてから、今ではもう何年にもなります。また、私がアルコール中毒とかかわるようになってからも、何年も経ちます。私は、快復の過程でこのふたりの姉妹が助けてくださったことを、決して忘れることはないでしょう。ふたりはいつも私の友人でした。決して私を裁くことも、責めることもありませんでした。うわさ話で私の信頼を裏切ることもありませんでした。霊的なメッセージはいらないという私の要望にも、いつも敬意を払ってくれましたし、私がほかの教会の会員として幸福な生活を送っているという事実も、そのまま認めてくれました。

ふたりがしてくれたことは、私を愛することと、ありのままの私を認めてくれることでした。

ロレインとレオラから耐えることを学び始めました。私は、人に会ったら60秒以内にその人の善悪を判断してしまう傾向がなくなったことを、喜んでいます。

ですから私は、公式の訪問教師のレッスンは断わり続けましたが、ふたりの模範を通じて、愛すること、耐えること、そして人を受け入れることといった、もっと大切なことを学んだと言えるでしょう。

\*ノニー・ギルバートは、フリーランスの作家で、4人の子供の母親でもある。また、ユタ・アルコール中毒治療財団の広報部長も務めている。

ユタの画家アル・ラウンズによるカートランド<sup>®</sup>神殿。  
1836年の完成直後を描いたものと思われる。水彩画  
を写真製版したもの。今月号を皮切りに教会史跡の  
フォトエッセイが3回にわたって掲載される。

